

求来里の遺跡Ⅱ

— 県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2） —

金田遺跡の調査

2009年

日田市教育委員会

巻頭写真図版



求来里川流域遠景（北西から）



調査区近景（北から）

序 文

求来里地区は日田盆地の東部に位置し、その中央を流れる求来里川によって形成された沖積地に水田が広がる長閑な農業地域であります。

この求来里川流域では平成 14 年度より、圃場整備や市道改良、河川改修工事が実施されるのに伴い、多くの発掘調査が行われ、旧石器時代から近世に至る遺物・遺構が発見されてきました。

本書では、圃場整備工事に伴って、平成 16 年度に実施した金田遺跡の調査内容を報告しています。調査では市内における最も古いカマドを持つ住居が、初期須恵器や朝鮮半島系の土器などとともに確認され、日田地域だけでなく、筑後川流域や北部九州の古墳時代中期を考える上で重要な発見がありました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後の文化財保護や学術研究、地域の歴史を学ぶための教材などとして、ご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に従事いただきました作業員の皆様、地元の方をはじめとして調査にご協力いただきました方々に、心から厚くお礼申し上げます。

平成 21 年 3 月

日田市教育委員会
教育長 合原 多賀雄

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成16年度に実施した金田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成16年度に県営経営体育成基盤（圃場整備）整備事業（求来里地区の工事実施に伴い、大分県日田地方振興局（現、大分県西部振興局）の委託業務として、日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 本遺跡では発掘調査が3度行われており、このうち、平成15・16年度に求来里川河川改修工事に伴い、大分県教育庁文化課（現、大分県教育庁埋蔵文化財センター）が実施した調査をそれぞれ1次・3次調査、本調査を2次調査としている。
4. 調査にあたっては、求来里地区圃場整備組合（故）室文男組合長、伊藤成忠組合長（現、組合長）をはじめ、地元の方々、市経済部農政課（現、農林振興部農業振興課）のご協力を得た。
5. 調査現場での実測は若杉及び渡邊・杉森が行った他、雅企画有限会社に委託し、遺構写真撮影は、若杉・渡邊が行った。
6. 本書に掲載した遺物実測図およびその製図は、雅企画有限会社・株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託した成果品のほかに、若杉が行ったものを使用した。また、遺構配置図を除く遺構図の製図については、株式会社九州文化財総合研究所に委託したものを使用した。
7. 遺物実測については、今田秀樹・矢羽田幸宏（市文化財保護課）の協力を得た。
8. 空中写真は九州航空株式会社に撮影を委託し、その成果品を使用した。
9. 遺物写真は雅企画有限会社に撮影を委託し、その成果品を使用した。
10. 個別遺構図中の方位は磁北である。
11. 遺物写真に付した番号は、実測図番号に対応する。
12. 出土遺物及び平面、写真類は日田市埋蔵文化財センターで保管している。
13. 石材については、石器を野田雅之氏（大分県天然記念物（地質）調査指導委員会会長）に、玉類を大坪志子氏（熊本大学埋蔵文化財調査室助教）に同定していただいた。
14. 本書の執筆・編集は若杉が行った。



日田市の位置

本文目次

I	調査に至る経過と組織	1
	(1) 調査に至る経過	1
	(2) 調査の組織	2
II	遺跡の立地と環境	4
III	調査の内容	6
	(1) 調査の概要	6
	(2) 遺構と遺物	6
	1. 竪穴住居	6
	2. 竪穴遺構	59
	3. 溝状遺構	60
	4. 墓	61
	5. 土坑	63
	6. その他の遺物	74
IV	まとめ	84
	(1) 弥生時代の遺構と遺物について	84
	(2) 古墳時代の遺構と遺物について	85

挿 図 目 次

第 1 図	金田遺跡周辺地形図 (1/5,000)	1
第 2 図	求来里川流域の主要遺跡分布図 (1/15,000)	5
第 3 図	遺構配置図 (1/300)	7～8
第 4 図	1号竪穴住居実測図 (1/60) 及びカマド実測図 (1/30)	10
第 5 図	2～4号竪穴住居実測図 (1/60) 及び3号竪穴住居カマド実測図 (1/30)	11
第 6 図	1～4号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	12
第 7 図	5・6号竪穴住居実測図 (1/60)	13
第 8 図	5・6号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	13
第 9 図	7号竪穴住居実測図 (1/60)	14
第 10 図	7号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	14
第 11 図	8号竪穴住居実測図 (1/60)	15
第 12 図	8号竪穴住居カマド実測図 (1/30)	16
第 13 図	8号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3・1/2)	17
第 14 図	9号竪穴住居実測図 (1/60) 及びカマド実測図 (1/30)	18
第 15 図	9号竪穴住居出土遺物実測図 (1) (1/3・1/2)	19
第 16 図	9号竪穴住居出土遺物実測図 (2) (1/3)	20
第 17 図	10号竪穴住居実測図 (1/60・1/30)	21
第 18 図	10号竪穴住居出土遺物実測図 (1) (1/3)	22
第 19 図	10号竪穴住居出土遺物実測図 (2) (1/3)	23
第 20 図	10号竪穴住居出土遺物実測図 (3) (1/3)	24
第 21 図	10号竪穴住居出土遺物実測図 (4) (1/3)	25
第 22 図	10号竪穴住居出土遺物実測図 (5) (1/3)	26
第 23 図	11号竪穴住居実測図 (1/60)	27
第 24 図	11号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	28
第 25 図	12～14号竪穴住居実測図 (1/80)	29
第 26 図	12～14号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	30
第 27 図	15号竪穴住居実測図 (1/60)	31
第 28 図	15号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	32
第 29 図	16・17号竪穴住居実測図 (1/60)	33
第 30 図	16・17号竪穴住居出土遺物実測図 (1) (1/3)	34
第 31 図	16・17号竪穴住居出土遺物実測図 (2) (1/3)	35
第 32 図	16・17号竪穴住居出土遺物実測図 (3) (1/3)	36
第 33 図	18・19号竪穴住居実測図 (1/60)	37
第 34 図	18号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	37
第 35 図	19号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	38
第 36 図	20号竪穴住居実測図 (1/60) 及びカマド実測図 (1/30)	39
第 37 図	20号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	40
第 38 図	21号竪穴住居実測図 (1/60)	41

第 39 図	21 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	41
第 40 図	22 号竪穴住居実測図 (1/60)	42
第 41 図	23 号竪穴住居実測図 (1/60)	42
第 42 図	22・23 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	43
第 43 図	24 号竪穴住居実測図 (1/60)	44
第 44 図	24 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	44
第 45 図	25 号竪穴住居実測図 (1/60) 及びカマド実測図 (1/30)	45
第 46 図	25 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3・1/2)	46
第 47 図	26 号竪穴住居実測図 (1/60)	47
第 48 図	26 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	47
第 49 図	27 号竪穴住居実測図 (1/60)	48
第 50 図	27 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	48
第 51 図	28 号竪穴住居実測図 (1/60)	49
第 52 図	28 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	49
第 53 図	29 号竪穴住居実測図 (1/60) 及び出土遺物実測図 (1/3)	50
第 54 図	30 号竪穴住居実測図 (1/60)	50
第 55 図	30 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	50
第 56 図	31 号竪穴住居実測図 (1/60)	51
第 57 図	31 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	51
第 58 図	32 号竪穴住居実測図 (1/80)	52
第 59 図	32 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	53
第 60 図	33・34 号竪穴住居実測図 (1/60) 及び 34 号竪穴住居カマド実測図 (1/30)	54
第 61 図	33・34 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	55
第 62 図	35 号竪穴住居実測図 (1/60)	55
第 63 図	35 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	55
第 64 図	36 号竪穴住居実測図 (1/60)	56
第 65 図	37・38 号竪穴住居実測図 (1/60)	57
第 66 図	36～38 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	58
第 67 図	1・2 号竪穴遺構実測図 (1/60)	59
第 68 図	1・2 号竪穴遺構出土遺物実測図 (1/3)	59
第 69 図	3 号竪穴遺構実測図 (1/60)	60
第 70 図	溝状遺構実測図 (1/100) 及び出土遺物実測図 (1/3)	60
第 71 図	1 号横棺墓実測図 (1/30)	61
第 72 図	1 号横棺実測図 (1/3)	62
第 73 図	1 号石棺墓実測図 (1/30)	63
第 74 図	土坑実測図 (1) (1/30)	64
第 75 図	1, 3～5 号土坑出土遺物実測図 (1/3・1/6)	65
第 76 図	土坑実測図 (2) (1/30・1/60)	66
第 77 図	8 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	67

第78図	11号土坑出土遺物実測図(1)(1/3)	69
第79図	11号土坑出土遺物実測図(2)(1/3)	70
第80図	土坑実測図(3)(1/30)	72
第81図	19・22号土坑出土遺物実測図(1/3)	73
第82図	その他の出土土器実測図(1)(1/3)	74
第83図	その他の出土土器実測図(2)(1/3・1/2)	75
第84図	その他の出土土器実測図(3)(1/3)	76
第85図	その他の出土土器実測図(4)(1/3)	76
第86図	出土土器実測図(1)(2/3・1/2・1/3)	77
第87図	出土土器実測図(2)(1/2)	78
第88図	出土土器実測図(3)(1/2・2/3)	79
第89図	出土土器実測図(4)(2/3)	80
第90図	出土土器実測図(5)(2/3)	81
第91図	出土土製品・石製品・鉄製品実測図(1/2・1/1・1/3)	83
第92図	弥生～古墳時代の竪穴住居変遷図(1/600)	85

挿入写真目次

写真1	発掘作業風景	表目次下
写真2	発掘体験風景	2
写真3	10号竪穴住居南側土層	21

写真図版目次

写真図版1上	調査区遠景(東から)	下	9号竪穴住居カマド発掘状況(南東から)	
	下	調査区空中写真(真上から)	写真図版6上	9号竪穴住居遺物出土状況
写真図版2上	1号竪穴住居発掘状況(南東から)	中	9号竪穴住居遺物出土状況	
	中	1号竪穴住居Aカマド発掘状況(南東から)	下	10号竪穴住居発掘状況(南西から)
	下	1号竪穴住居Bカマド発掘状況(南東から)	写真図版7上	10号竪穴住居遺物出土状況
写真図版3上	2号竪穴住居発掘状況(南東から)	中	10号竪穴住居遺物出土状況	
	中	3号竪穴住居発掘状況(南東から)	下	10号竪穴住居遺物出土状況
	下	3号竪穴住居カマド発掘状況(南東から)	写真図版8上	11号竪穴住居発掘状況(北から)
写真図版4上	5・6号竪穴住居発掘状況(北西から)	中	11号竪穴住居遺物出土状況	
	中	5・6号竪穴住居遺物出土状況	下	11号竪穴住居遺物出土状況
	下	8号竪穴住居発掘状況(南東から)	写真図版9上	12～14号竪穴住居発掘状況(北東から)
写真図版5上	8号竪穴住居カマド発掘状況(南東から)	中	15号竪穴住居発掘状況(南から)	
	中	9号竪穴住居カマド遺物出土状況	下	16・17号竪穴住居発掘状況(北西から)

写真図版 10 上: 16・17 号竪穴住居遺物出土状況	写真図版 21 上: 3 号竪穴遺構発掘状況 (北東から)
中: 16・17 号竪穴住居遺物出土状況	中: 2 号溝状遺構発掘状況 (南東から)
下: 18 号竪穴住居発掘状況 (北東から)	下: 4 号溝状遺構発掘状況 (南東から)
写真図版 11 上: 18 号竪穴住居遺物出土状況	写真図版 22 上: 1 号竪穴墓発掘状況 (南西から)
中: 19 号竪穴住居発掘状況 (南西から)	中: 1 号竪穴墓発掘状況 (南西から)
下: 20 号竪穴住居発掘状況 (北東から)	下: 1 号石棺墓発掘状況 (南東から)
写真図版 12 上: 20 号竪穴住居カマド発掘状況 (北東から)	写真図版 23 上: 1 号石棺墓発掘状況 (南東から)
中: 20 号竪穴住居カマド発掘状況 (北東から)	中: 1 号土坑発掘状況 (北東から)
下: 23 号竪穴住居発掘状況 (北西から)	下: 2 号土坑発掘状況 (北西から)
写真図版 13 上: 24 号竪穴住居発掘状況 (南東から)	写真図版 24 上: 3 号土坑発掘状況 (北西から)
中: 24 号竪穴住居焼土・炭化物検出状況	中: 4 号土坑発掘状況 (南東から)
下: 25 号竪穴住居発掘状況 (南東から)	下: 5 号土坑発掘状況 (南西から)
写真図版 14 上: 25 号竪穴住居カマド遺物出土状況	写真図版 25 上: 8 号土坑遺物出土状況
中: 25 号竪穴住居カマド発掘状況 (南東から)	中: 8 号土坑遺物出土状況
下: 26 号竪穴住居発掘状況 (北西から)	下: 9 号土坑発掘状況 (北から)
写真図版 15 上: 27 号竪穴住居発掘状況 (北西から)	写真図版 26 上: 10 号土坑発掘状況 (北西から)
中: 28 号竪穴住居発掘状況 (北西から)	中: 11 号土坑発掘状況 (東から)
下: 28 号竪穴住居内土坑遺物出土状況	下: 11 号土坑遺物出土状況
写真図版 16 上: 29 号竪穴住居発掘状況 (北東から)	写真図版 27 上: 11 号土坑遺物出土状況
中: 30 号竪穴住居発掘状況 (南西から)	中: 12 号土坑発掘状況 (東から)
下: 30 号竪穴住居遺物出土状況	下: 20 号土坑発掘状況 (北東から)
写真図版 17 上: 31 号竪穴住居発掘状況 (北から)	写真図版 28 上: 22 号土坑発掘状況 (南西から)
中: 31 号竪穴住居遺物出土状況	中: 発掘作業に従事したみなさん
下: 32 号竪穴住居発掘状況 (東から)	写真図版 29 1～9 号竪穴住居出土遺物
写真図版 18 上: 33 号竪穴住居遺物出土状況	写真図版 30 9・10 号竪穴住居出土遺物
中: 33 号竪穴住居遺物出土状況	写真図版 31 10 号竪穴住居出土遺物
下: 34 号竪穴住居発掘状況 (北東から)	写真図版 32 12～16 号竪穴住居出土遺物
写真図版 19 上: 34 号竪穴住居カマド発掘状況 (北東から)	写真図版 33 16～25 号竪穴住居出土遺物
中: 35 号竪穴住居発掘状況 (北東から)	写真図版 34 25～38 号竪穴住居及び土坑出土遺物
下: 37 号竪穴住居発掘状況 (北東から)	写真図版 35 1 号竪穴墓、土坑、ヒット
写真図版 20 上: 38 号竪穴住居発掘状況 (北から)	及びグリッド一括出土遺物
中: 1 号竪穴遺構発掘状況 (北東から)	写真図版 36 出土石器・土製品・玉類
下: 2 号竪穴遺構発掘状況 (南東から)	写真図版 37 出土石器 (削片類)

表 目 次

第 1 表	出土土器観察表 (1)	89
第 2 表	出土土器観察表 (2)	90
第 3 表	出土土器観察表 (3)	91
第 4 表	出土土器観察表 (4)	92
第 5 表	出土土器観察表 (5)	93
第 6 表	出土土器観察表 (6)	94
第 7 表	出土土器観察表 (7)	95
第 8 表	出土石器観察表 (1)	96
第 9 表	出土石器観察表 (2)	97
第 10 表	出土玉製品観察表	98
第 11 表	出土玉類観察表	98
第 12 表	出土鉄器観察表	98



写真1 発掘作業風景

I 調査に至る経過と組織

(1) 調査に至る経過

県営経営体育成基盤整備事業求来里地区全体の調査の経緯については、『求来里の遺跡』1に記述しているの
ここでは省略し、金田遺跡の調査の経緯について述べる。

神来2工区内に存在する金田遺跡の発掘調査は、大分県日田地方振興局耕地課（現大分県西部振興局農林基盤
部、以下県耕地課）の工事の進捗に合わせ、平成16年度に実施することとなった。しかし、この年度は平成15
年度より着手している町ノ坪遺跡B区の継続調査、及び町ノ坪遺跡D区・小西遺跡が調査予定になっていたこと
から、その実施時期が課題となった。当初は、継続調査である町ノ坪遺跡B区と小西遺跡を年度前半に、金田遺
跡と町ノ坪遺跡D区を年度後半に行う予定としていた。しかし、県耕地課との協議を進める中で、小西遺跡周辺
の用水の関係から休耕時期が平成17年度にずれ込むことになった。このことから、年度後半に金田遺跡・小西
遺跡・町ノ坪遺跡D区の調査を実施することは、事実上不可能と判断し、予定を変更して金田遺跡の調査を年度
前半に行うこととした。

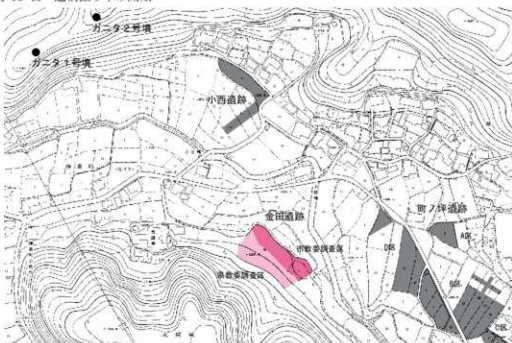
以上の経過より、平成16年4月22日に委託契約を取り交わし、4月23日から11月26日までの間、発
掘調査を実施した。その後、平成17年1月17日に調査費の減額による変更契約を締結し、平成17年2月28
日までの間、事業を実施した。

以下、平成17年度以降の委託契約の内容と期間を記す。

平成17年度 平成17年5月2日～平成18年2月28日 整理作業
平成19年度 平成19年5月1日～平成20年3月24日 報告書作成
当初契約より工程内容の変更契約を行い、報告書印刷業務を次年度に延期する。
平成20年度 平成20年5月1日～平成21年3月19日 報告書印刷

また、調査の経過は以下のとおりである。

- 4月23日 機械による撤入路作り
- 4月28日 立木伐採開始
- 5月7日 遺構検出開始
- 5月19日 遺構掘り下し開始



第1図 金田遺跡周辺地形図 (1/5,000)

- 5月23日 大分県立歴史博物館・宮内克己氏指導
- 5月26日 基準点測量実施
- 6月3日 遺構尖削開始
東側の調査区調査終了
- 6月17日 有田小学校発掘体験
- 6月19日 西有田公民館わんぱく教室発掘体験
- 7月7日 大分県埋蔵文化財センター・坂本嘉弘氏来訪
- 7月25日 地元住民を対象にした発掘体験（町ノ坪遺跡B区で現地説明会）
- 8月4日 別府大学・清水宗昭講師指導
- 10月14日 福岡大学・小田富士雄名誉教授来訪
- 11月2日 大分県埋蔵文化財センター・田中裕介氏来訪
- 11月12日 空中写真撮影を実施
- 11月26日 器材整理・撤収を行い、調査終了



写真2 発掘体験風景

調査終了後の11月30日に日田警察署長宛に埋蔵文化財発見届を提出し、12月13日に埋蔵文化財の認定を受けた。また、整理作業は平成16年7月1日～平成17年2月24日、同年6月1日～12月28日の間、行った。

(2) 調査の組織

調査関係者は以下のとおりである。（なお、職名・氏名は当時のままとしている）

平成16年度（2004）／発掘調査・整理作業

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 諏山康雄（日田市教育委員会教育長）

調査統括 後藤 清（日田市教育庁文化課課長）

調査事務 高倉隆人（日田市教育庁文化課課長補佐兼埋蔵文化財係長）

伊藤京子（同専門員）、中村邦宏（同主事補）

調査担当 若杉竜太（同文化課主任）

調査員 土居和幸（同文化課主査）行時桂子（同主任）、渡邊隆行（同主事）

発掘作業員 安心院輝雄 足立米子 穴井生海 穴井正利 安藤一枝 課元正隆 石井猪之助 石谷アサカ

梅木研次郎 梅木忠臣 梅木年子 江藤キミ子 荏隈アイ子 荏隈マサ子 大内栄一

鍛冶谷榮 鍛冶谷フミ子 梶原隆介 河津定雄 河津信義 河津満子 河部松子 北澤幾子

小下一 五島朝代 五反田静子 後藤孝市 財津敷子 財津高子 財津利枝 財津由太

坂本今朝人 佐藤八重子 庄内武子 高倉厚己 高倉エミ子 高倉富美子 高倉美津子

高野隆 高村三郎 田中健江 筒井英治 中川照美 中島カズ子 原口勝利 原田強

平川五男 平原知義 藤本弥八 松間敦子 本松シツエ 森輝雄 森本絹子 山田利彦

吉長利夫

調査補助員 杉森久恵

整理作業員 朝倉眞佐子 穴井トヨ子 石松裕美 伊藤一美 井上とし子 宇野富子 鍛冶谷節子

梶原ヒトエ 川原君子 黒木千鶴子 坂口豊子 坂本和代 佐藤みちこ 田中静香

中原琴枝 豊川暢子 平川優子 安元百合

調査指導員 清水宗昭（別府大学講師）宮内克己（大分県立歴史博物館学芸課長）

平成17年度(2005)／整理作業

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 諏山康雄(日田市教育委員会教育長)
調査統括 後藤 清(日田市教育庁文化財保護課長)
調査事務 高倉隆人(日田市教育庁文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長)
伊藤京子(同専門員)、中村邦宏(同主事補)
整理担当 若杉竜太(日田市教育庁文化財保護課主任)
調査員 土居和幸(日田市教育庁文化財保護課副主幹)
今田秀樹、行時桂子、渡邊隆行(以上、同主任)、矢羽田幸宏(同主事補)
調査補助員 石川京子 石川健 杉野貴幸 中川照美 藤野美音
整理作業員 朝倉眞佐子 石松裕美 伊藤一美 井上とし子 宇野富子 鍛冶谷節子 梶原ヒトエ
黒木千鶴子 佐藤みち子 中原琴枝 平川優子 安元百合
調査指導員 高倉洋彰(西南大学教授) 田中裕介(大分県埋蔵文化財センター副主幹)

平成19年度(2007)／報告書作成

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 諏山康雄(日田市教育委員会教育長、～平成19年8月17日)
合原多賀雄(同教育長、平成19年9月27日～)
調査統括 梶原孝史(日田市教育庁文化財保護課長、～平成19年9月30日)
原田文利(同文化財保護課長、平成19年10月1日～)
調査事務 井上正一郎(日田市教育庁文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長)
田中正勝、伊藤京子(以上、同専門員)、塚原美保(同主査)
報告書担当 若杉竜太(日田市教育庁文化財保護課主任)
調査員 今田秀樹(日田市教育庁文化財保護課主査)
行時桂子、渡邊隆行(以上、同主任)、矢羽田幸宏(同主事)

平成20年度(2008)／報告書印刷

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 合原多賀雄(日田市教育委員会教育長)
調査統括 原田文利(日田市教育庁文化財保護課長)
調査事務 井上正一郎(日田市教育庁文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長)
田中正勝(同専門員)、塚原美保(同主査)
報告書担当 若杉竜太(日田市教育庁文化財保護課主任)
調査員 今田秀樹、行時桂子(以上、日田市教育庁文化財保護課主査)
渡邊隆行(同主任)、矢羽田幸宏(同主事)、比嘉えりか(同嘱託)

また、発掘調査・整理作業・報告書作成にあたり、前述の指導者・来訪者の方々のほかに、以下の方々にお世話になった(敬称略、五十音順)。

木村龍生 芝康次郎 下村智 杉井健 長直信 中原啓彦 中村勝 原田昭一 宮田栄二 三吉秀充 吉田和彦

II 遺跡の立地と環境

金田遺跡の所在する求来里地区は益地の東部に位置し、大字東有田大石峠を源とする求来里川により形成された沖積地が狭い谷状の地形を呈している。求来里川は谷の中で大きく蛇行を繰り返しながら、北西方向に流れ、遺跡の北約2kmの地点で有田川と合流する。

求来里地区及び求来里川流域では、ほ場整備事業に伴って行われた発掘調査の他にも、広域農道建設や市道建設などによる発掘調査が行われている。ここでは、それらの遺跡を中心に周辺の遺跡を概観していく。

金田遺跡より北側200mの台地層には、弥生時代中期から終末期にかけての集落が確認された小西遺跡(2)が存在する。また、遺跡の北東側には町ノ坪遺跡(3)が存在する。調査では古墳時代中期～後期の集落が確認された。特に古墳時代中期の集落では朝倉産の初期須恵器などが出土しており、地床からカマド導入期の集落変遷が窺える遺跡である。

町ノ坪遺跡南側には、縄文時代の竪穴構或古墳時代の集落、中世の四面庇の建物が見つかった求来里平島遺跡(4)が存在する。特に、古墳時代中期の住居は金田遺跡や町ノ坪遺跡と同様に専らカマドとして注目される。さらに求来里平島遺跡の南側には弥生時代、古墳時代の包蔵地である着来遺跡(5)がある。着来遺跡の東側、求来里川が形成する谷の最奥部には縄文時代前期の包含層、古墳時代後期～終末期の集落や中世の墓地为確認された名里遺跡(6)が存在する。

一方、谷の北側には町野原台地が広がり、台地一帯は旧石器時代・縄文時代、古墳時代の包蔵地である町野原遺跡(7)が存在する。また、台地の南東側に円墳の亀ノ甲古墳(8)、さらに台地から西側に派生し、小西遺跡背後にあたる丘陵上には、横穴式石室を主体とし、3基の円墳からなるガニタ古墳群(10～12)がある。

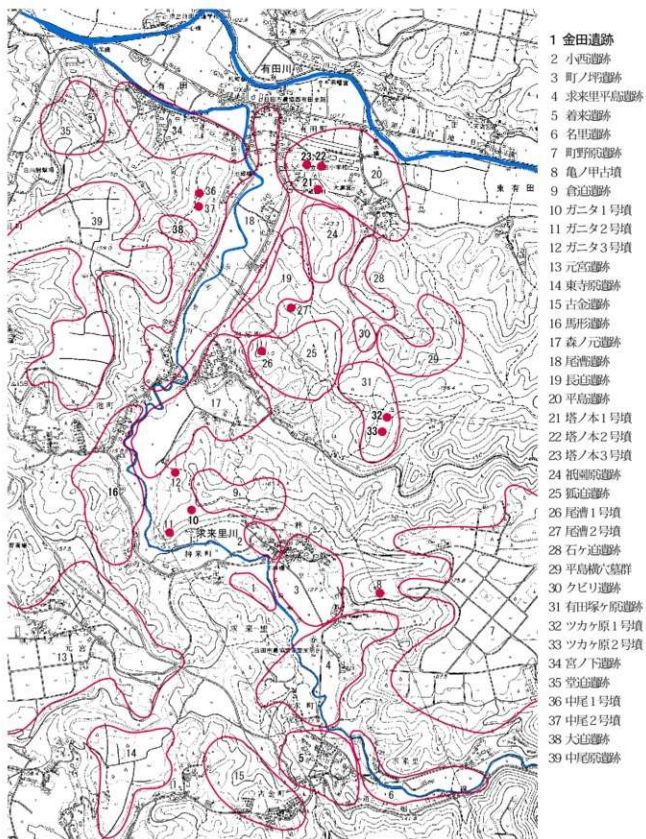
また、谷南側の元宮原台地上には弥生時代後期の粟積墓・石積墓や古墳時代後期の石蓋土坑墓、中世の塚と笠塔婆などが見つかった元宮遺跡(13)が存在する。弥生時代～古墳時代にかけての墓地は、求来里川流域に展開する同時期の集落との関係想起させる。

さらに、求来里地区から求来里川を下流に下った有田地区でも、沖積地及び周辺の丘陵上に多くの遺跡がみられる。小西遺跡の西約600mの丘陵上には古墳時代の集落や古代の土坑墓が見つかった馬形遺跡(16)がある。さらに下流の沖積地及び微高地上には、縄文時代晩期の埋蔵や平安時代の竪穴構或確認された森ノ元遺跡(17)や弥生時代の墓地や古墳時代の集落、300枚を超える六道銭が埋納された土坑墓が確認された尾溝遺跡(18)が存在する。さらに求来里川右岸の台地上には、弥生時代から古墳時代にかけての集落や近世墓群が見つかった祇園原遺跡(24)、古墳時代から古代を中心として集落が確認された長迫遺跡(19)、古墳時代後期の横穴式石室を主体とする塔ノ本1号墳(21)などが存在する。一方、左岸の台地上には古墳時代の土坑墓・石蓋土坑墓・石積墓などが確認された大迫遺跡(38)や3基の円墳からなる中尾古墳群(36,37)が存在する。

(参考文献)

- 平成15～18年度日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会 2004～2008
- 村上久和、友崎信彦、梁友和徳編 『日田系平島遺跡群、在寺横穴墓群・大迫遺跡・白岩遺跡・下城垣遺跡』九州横断自動車道開拓埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 大分県教育委員会 1997
- 行時正樹編 『森ノ元遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第13集 日田市教育委員会 1998
- 土沼和幸、行時正樹、永田昭久編 『馬形遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第16集 日田市教育委員会 1998
- 友崎信彦、松本健史 『在寺原遺跡・尾溝遺跡群・有田塚々原古墳群』九州横断自動車道開拓埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 大分県教育委員会 1998
- 村上久和、原田一編 『尾溝遺跡』大分県文化財調査報告書第112編 大分県教育委員会 2000
- 若杉成太編 『平島遺跡跡地点 塔ノ本5号墳 祇園原遺跡2次 長迫遺跡C地点 長迫遺跡D地点 尾溝遺跡6次』日田市埋蔵文化財調査報告書第28集 日田市教育委員会 2001
- 行時正樹編 『尾溝遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第30集 日田市教育委員会 2001
- 土沼和幸編 『求来里平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第38集 日田市教育委員会 2003

行岡桂子編「石巻2号墳」日田市埋蔵文化財調査報告書第69集 日田市教育委員会 2006
 行岡桂子編「求来里平島遺跡Ⅱ」日田市埋蔵文化財調査報告書第77集 日田市教育委員会 2007
 行岡桂子編「低瀬原遺跡Ⅱ」日田市埋蔵文化財調査報告書第81集 日田市教育委員会 2007
 行岡桂子編「低瀬原遺跡Ⅲ」日田市埋蔵文化財調査報告書第87集 日田市教育委員会 2008
 田中裕介・原田昭一・松本建彦編「求来里平島遺跡D区、求来里名里遺跡A区1次調査区、金田遺跡1次調査区、金田遺跡3次調査区」
 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第31集 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2008



- 1 金田遺跡
- 2 小平島遺跡
- 3 町ノ平遺跡
- 4 求来里平島遺跡
- 5 着来遺跡
- 6 名出遺跡
- 7 町野所遺跡
- 8 亀ノ甲古墳
- 9 倉迫遺跡
- 10 ガニタ1号墳
- 11 ガニタ2号墳
- 12 ガニタ3号墳
- 13 元宮遺跡
- 14 東寺跡遺跡
- 15 古金遺跡
- 16 馬形遺跡
- 17 森ノ元遺跡
- 18 尾高遺跡
- 19 長辻遺跡
- 20 平島遺跡
- 21 塔ノ本1号墳
- 22 塔ノ本2号墳
- 23 塔ノ本3号墳
- 24 低瀬原遺跡
- 25 狐迫遺跡
- 26 石巻1号墳
- 27 石巻2号墳
- 28 石ヶ道遺跡
- 29 平島横穴墓群
- 30 クビリ遺跡
- 31 有田岡ヶ原遺跡
- 32 ツカケ原1号墳
- 33 ツカケ原2号墳
- 34 宮ノ下遺跡
- 35 堂迫遺跡
- 36 中尾1号墳
- 37 中尾2号墳
- 38 大迫遺跡
- 39 中尾原遺跡

第2図 求来里川流域の主要遺跡分布図 (1/15,000)

Ⅲ 調査の内容

(1) 調査の概要 (第3図)

調査は、調査区内の立木の伐採や小屋などの除去を行った後、北西-南東方向に長さ約95m、幅約15～25mの範囲について、表土剥ぎならびに遺構検出を南東側より行った。

その結果、東側より約20m部分(以下、東側調査区)は、西側(以下、西側調査区)に比べて、大きく削平を受けており、近世の土坑や溝状遺構などが検出された。この部分の標高は124.25～123.75mで、南西から北東に向かって傾斜している。

西側調査区は、水田側の標高が低い部分で遺構のラインが確認できたものの、その他の大部分では、重複が激しく、検出作業に当初から手間取った。そこで、遺構のラインが確認できる水田側と山側に調査区を横断するトレンチを設定し、遺構の切り合い等が確認できた部分から、面的に広げて掘り下げる作業を繰り返すことで、遺構の確認を行っていった。標高については125.75～124.50mで東側調査区と同様に南西から北東に向かって傾斜している。

また、調査区内を南東から北西に向かってA1～H10までをグリッドで区画し、遺構検出時やピット出土の遺物取り上げ等で利用している。

また、西側調査区は切り合いが激しく、県教委調査の結果からも相当数の遺構の存在が想定できた。そのため、掘り下げ時に塵土置場が確保できなくなると予想できたため、東側調査区を塵土置場とすることとし、この部分の調査を先行して行い、6月3日に調査を終了した。

なお、本調査区の27、28、30～32号竪穴住居については、1・3次調査区と重複しており、県報告分も合わせて、本報告でも記述している。

(2) 遺構と遺物

調査では、竪穴住居4軒、竪穴遺構3基、溝状遺構6条、糞箱墓1基、石棺墓1基、土坑22基、その他柱・ピットや落ち込み等が多数確認された。

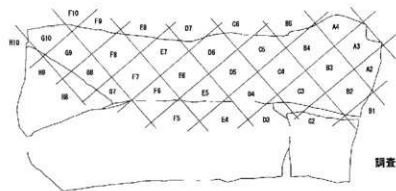
1. 竪穴住居

1号竪穴住居 (第4図 図版2)

調査区の南東側で確認され、1号竪穴遺構に切れ、位置関係から4号竪穴住居を切るとみられる。削平を受けているため、西側のコーナー付近のみ、壁が確認されている。主柱穴はP1～P4の4本と考えられ、床面からの深さは約55～90cmである。規模については、北西壁で確認されたカマドが壁の中央に付設されていたとするならば、南西-北東軸は約5mと推定できる。また、検出面からの床面までの深さは約25cmである。カマドについては、2基検出されたことから、Aカマド・Bカマドとした。切り合い関係からB→Aの順で作られたことがわかる。

Aカマドは左袖全てと右袖の一部が残っていたが、袖石・支脚は確認できなかった。袖は暗褐色系の粘土を使用しており、左袖が約70cm、右袖が壁から約30cmのみ残存する。袖間の幅は奥壁から約15cmの部分で約45cmを測る。それぞれの袖の前には袖石の抜き取り痕、袖内には支脚の抜き取り痕が確認された。支脚の抜き取り痕の前と袖石抜き取り痕の間に広がる被熱した面が火床面である。

BカマドはAカマドより約40cm南側の手前に作られている。上面は削平を受けているため、袖、袖石及び支脚は残っていないが、これらの抜き取り痕とみられるピットは確認できた。袖石抜き取り痕間の幅は約50cmを測り、支脚抜き取り痕前と袖石抜き取り痕の間に広がる被熱した面が火床面となる。



- 住………竪穴住居
- 塚………竪穴墳
- 溝………溝状遺構
- 礎………礎石
- 石………石垣基
- 土………土坑
- 1-3次調査
- S1………竪穴住居

第3図 遺構配置図 (1/300)

出土遺物 (第6図1・2 図版29)

第6図1は土師器壺である。口縁部は大きく外反し、端部は丸く仕上げられる。2は土師器の把手である。裏かきは不明である。傾きは確実ではないが、上方を向く。

2号竪穴住居 (第5図 図版2)

1号竪穴住居の北東側で確認され、3号竪穴住居に切られる。西側の1/3ほどが残っているとみられ、平面形は方形を呈すると思われる。規模は南西壁で約3.4m、北西-南西軸で約1.7m+aで、深さは検出面より約25~30cmを測る。壁際の一部には壁周溝が巡る。また、床面には深さ約60cmを測るピット(P1)があるが、これが主柱穴になるとみられ、削平を受けている南東側にもう1本の主柱穴の存在した可能性がある。この他、炉跡・屋内土坑は確認されなかった。

出土遺物 (第6図3・4 図版12)

第6図3は弥生土器甕である。口縁部は大きく外側に開く。4は弥生土器高環である。脚部は接合部より直線的に大きく開く。

3号竪穴住居 (第5図 図版3)

2号竪穴住居の北東側で確認され、2号竪穴住居を切る。西側の一部を除き、削平を受けているが、平面形は方形を呈すとみられる。規模については、北西側に確認されたカマドが、壁の中央に付設されていたとするならば、南西-北東軸の長さは、約5.6mと推定できる。検出面からの深さは西側で約10cmを測る。北西壁の中央にカマドが付設され、壁際には部分的に壁周溝が巡っている。主柱穴はP1P2に加え、P3P4の4本と見られ、深さは床面から約30~45cmを測る。

カマドは上面が大きく削平を受けており、住居の壁から約70~80cm内側で袖石の抜き取り痕が確認された。抜き取り痕間の幅は約90cmで、その部分に見られる焼土が火床面である。なお、袖石の抜き取り痕は、担当者のミスで、深さの確認を怠ってしまったため、図面上では破線で表現している。

出土遺物 (第6図5~8 図版29)

第6図5~7は土師器甕である。5は比較的長い口縁部が直線的に開く。6は短い口縁部が直線的に開く。7は小型の甕で、口縁部は器壁が厚く、短い。端部を丸く仕上げられる。8は弥生土器甕である。底部は僅かに上げ底である。他の遺構からの混入品である。

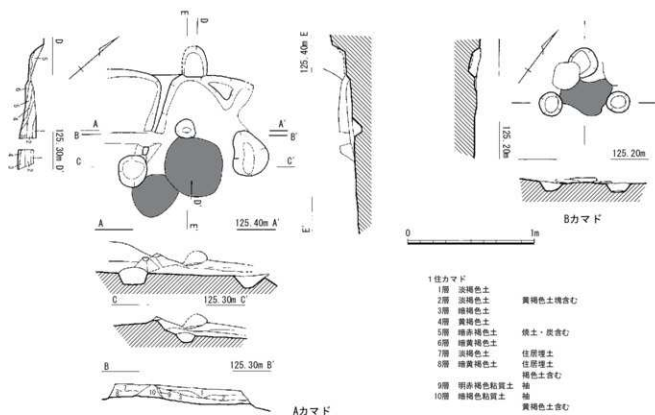
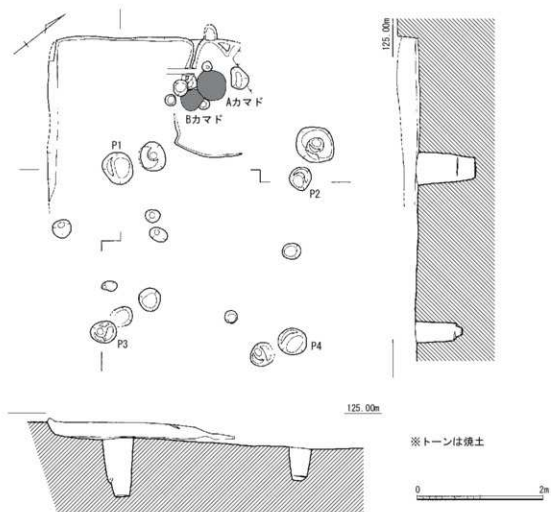
4号竪穴住居 (第5図)

1号竪穴住居の北東側で確認された。大部分を3号竪穴住居に切られ、南東側も削平を受けているため、西側の一部しか残っていない。平面形は方形を呈するとみられ、規模は北西壁で約1.6m+a、南西壁で約0.8m+a、検出面からの深さは約20cmを測る。住居としたものの、柱穴や炉跡等が確認できなかったことから、根拠には乏しい。

遺物は弥生土器と土師器が出土しているが、遺構については一部が確認されているのみで詳細が不明なため、何れの時代に属するかは、判断できなかった。

出土遺物 (第6図9~11 図版29)

第6図9・10は弥生土器甕の口縁部である。9は口縁端部を若干肥厚させ、僅かに跳ね上げる。10は直線的に開き、端部は四角く仕上げられる。11は土師器小型丸底甕である。口縁部は大きく開き、端部は薄く仕上げられる。



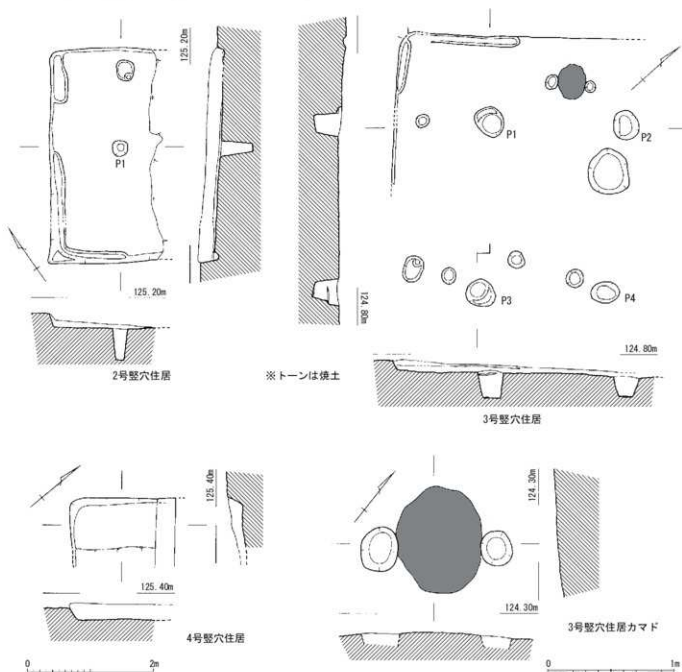
第4図 1号竪穴住居実測図 (1/60) 及びカマド実測図 (1/30)

5・6号竪穴住居 (第7図 図版4)

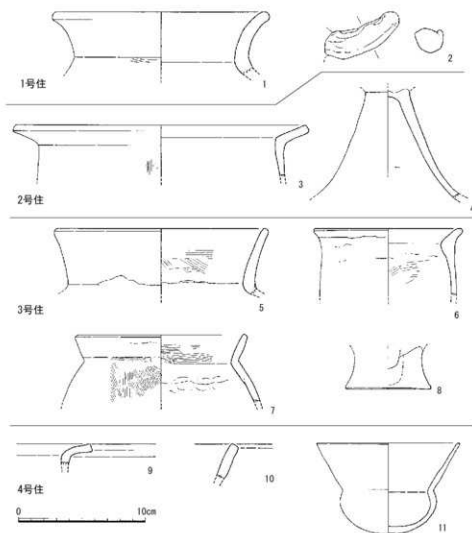
4号竪穴住居の西側で確認され、4、8号竪穴住居に切られる。南側を半周する掘り込みに対し、内側に壁溝とみられる溝があり、さらに焼土が2ヶ所確認されたことから、2軒の住居があると判断した。

5号竪穴住居は、P1～P4の4本が主柱穴とみられ、床面からの深さは約50～80cmを測る。6号竪穴住居はP5～P10の6本が主柱穴とみられ、床面からの深さは約15～60cmを測る。

5号竪穴住居の柱穴が掘り込まれる床面までの深さは検出面から約20cmを測る。さらに柱穴に囲まれた中央付近には円形の土坑があり、これらの住居に伴う中央土坑になるとみられる。ただし、5号と6号のどちらに伴うものかは確認できなかった。この中央土坑を中心に考えると、5号竪穴住居は南北軸約5.2m、東西軸約4.4mとなる。さらに6号竪穴住居は判明している東西軸約5.5mに対して、南北軸が約6.8mとなり、2軒の住居は何れも平面形は楕円形気味になるとみられる。



第5図 2～4号竪穴住居実測図 (1/60) 及び3号竪穴住居カマド実測図 (1/30)



第6図 1～4号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

これらの住居の切り合い関係については、6号竪穴住居のP 10が5号竪穴住居の周溝を切っており、さらにP 5も5号竪穴住居の周溝の推定線上に掘り込まれていることから、5号→6号の順で拡張したものと思われる。

出土遺物 (第8図 図版 29)

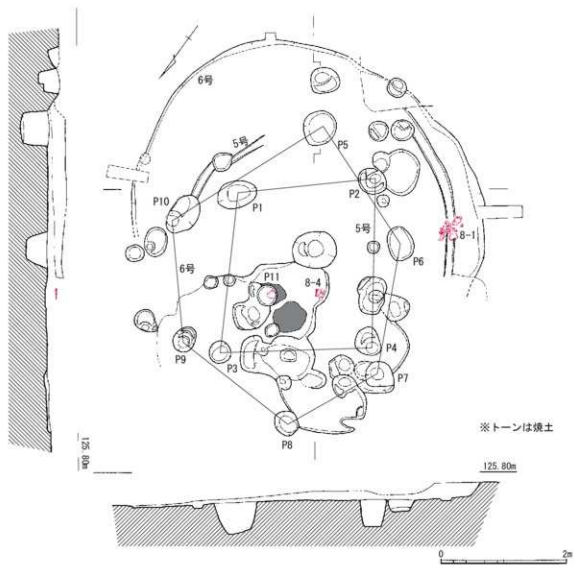
1は弥生土器高坏である。端部は外に向かってやや下がる。2は弥生土器甕の底部で、平底である。3・4は土師器甕である。ともに厚ぼったく、短く外反する口縁部をもつ。端部を丸く仕上げている。他の遺構からの混入品である。

7号竪穴住居 (第9図)

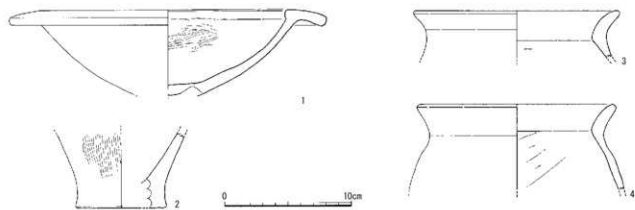
9号竪穴住居の南東側で確認され、これに大部分を切られている。そのため、北西隅の一部しか残っていないものの、平面形は方形を呈するとみられる。残存部分の規模は南壁約2.4m×東壁約1.8m、検出面からの深さは最大15cmを測る。床面には一部に数cmの段落ちがみられることから、ベッド状遺構の可能性はある。

出土遺物 (第10図)

1は弥生土器甕である。頸部に刻み目を施した断面三角形の突帯を貼り付ける。2、3は弥生土器甕である。何れも外底面をやや上底気味に成形する。4は土師器高坏である。脚部は柱状をなし、裾部で屈曲する。混入品である。



第7図 5・6号竖穴住居実測図 (1/60)



第8図 5・6号竖穴住居出土遺物実測図 (1/3)

8号竪穴住居 (第11・12図 図版4・5)

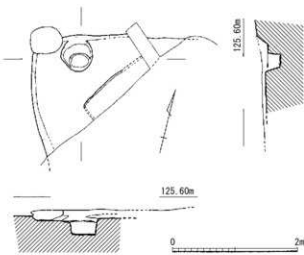
5・6号竪穴住居の北西側で確認され、5・6、12～15号竪穴住居を切る。北隅と南東側が削平を受けているが、平面形は長方形を呈すと見られ、規模は南西-北東軸は約6.2m、北西-南東軸は約6.6m+aである。検出面からの深さは最大45cmを測る。北西壁の中央にカマドが付設され、壁際には部分的に壁周溝が巡っている。主柱穴はP1～P4の4本とみられ、深さは床面から40～60cmを測る。その他、南東壁から約0.6m内側に1条の溝が掘り込まれていることから、P5～P8を主柱穴とする別の竪穴住居が存在していた可能性もある。

カマドは北西壁に付設され、約35cmの煙道が外側に延びる。袖及び支脚が残り、袖石は確認できなかった。袖は黄白色粘土を使用しているが、掘り下げの際に右袖の大部分を確認できず、掘り過ぎてしまっている。規模は左袖が約140cm、右袖が壁側から約60cm残っているが、袖石の抜き取り痕が確認できたことから、約150cmと推定できる。また、袖間の幅は奥壁側で約80cm、袖石の抜き取り間は約1.1mを測る。袖内は、支脚の前側と袖石間の境土が見られる部分が火床面である。

遺物は、カマドとその周辺から多く、出土している。

出土遺物 (第13図 図版29)

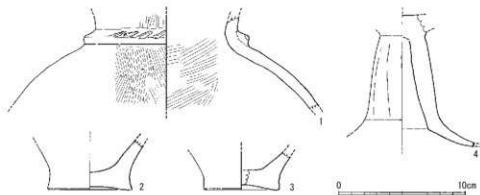
1～5は土師器甕である。1は口縁部が僅かに外反し、端部を丸く仕上げる。頸部の稜は不明瞭である。胴部の張りはなく、直線的になる。2は短い口縁部がわずかに外反し、端部を丸く仕上げる。胴部は球形を呈する。3は短い口縁部が外反し、端部を丸く仕上げる。4は上下、傾きが確実ではないが、胴部が大きく張る。5の底面はやや平坦面をもつ丸底である。6は土師器鉢である。器壁は厚く、端部は三角形に仕上げる。7は土師器杯である。口縁部が内湾し、端部を薄く仕上げる。8は手捏土器である。



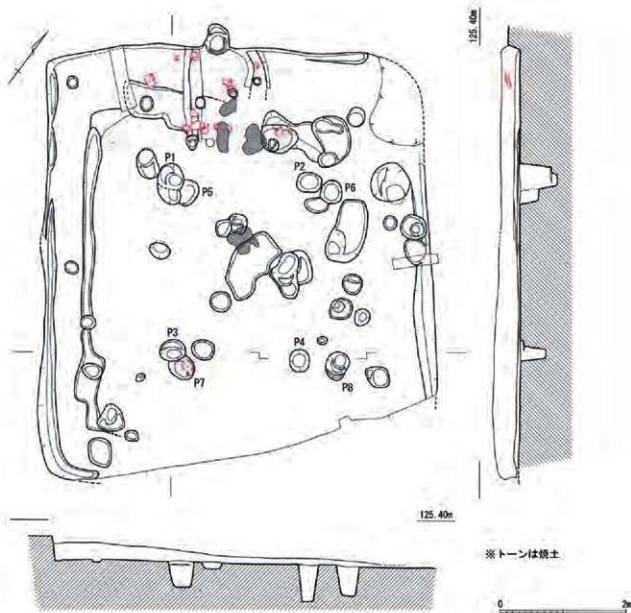
第9図 7号竪穴住居実測図 (1/60)

9号竪穴住居 (第14図 図版5・6)

8号竪穴住居の南西側で確認され、7、12～15、20号竪穴住居を切る。平面形は方形を呈し、規模は約5.3m×約5.0m、検出面からの深さは最大60cmを測る。北西壁のほぼ中央にカマドを付設する。壁際には部分的に壁周溝が巡っている。主柱穴はP1～P4を想定しているが、床面からの深さが約65cmであるP4を除き、P1～P3



第10図 7号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)



第 11 図 8号竪穴住居実測図 (1/60)

は床面から約 20 cm と浅いため、確実にこの住居に伴うものかどうか断定しがたい。

カマドは住居北西壁の内側に付設される。袖と高環が転用された支脚（第 9 図 11）は残っているが、袖石は確認できなかった。袖は暗褐色系の粘土を使用しており、左袖が約 75 cm、右袖が約 90 cm、袖間の幅は奥壁側が約 60 cm、袖石側は約 70 cm を測る。袖内には支脚転用高環のほか、多くの遺物が見られた。

遺物はカマド内や埋土中より出土しているが、初期須恵器と思われる高環蓋などが出土しており、注目される。

出土遺物

(第15・16図 図版29・30)

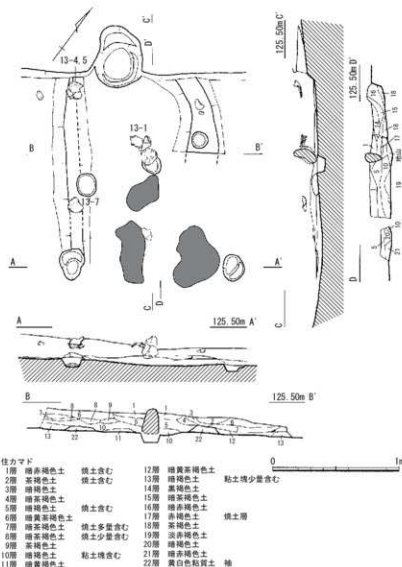
第15図1・2は弥生土器甕、3は弥生土器壺である。1・2はともに底部はやや上げ底である。他の遺構からの混入品である。

4～7は土師器甕である。4は口縁部が中位付近で外反し、端部を丸く仕上げている。胴部の張りはやや少ない。5の口縁部は4とほぼ同じだが、外反の度合いは弱く、端部は四角く仕上げる。胴部は大きく張る。6の口縁部はやや外反気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。7の口縁部は直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。また、4・6は比較的幅広いケズリ痕が見られる。8～10は土師器高環でいずれも丸底である。また、8、10は端部をわずかに外反気味に薄く仕上げるが、9は丸く仕上げる。11・12は土師器高環である。11は環部が丸味を帯びながら立ち上がり、口縁端部を外反させる。脚部は接合部から直線的に開きながら、裾部で接地し、端部が削れている。13・14はミニチュア土器である。ともに口縁端部を短く外反させている。

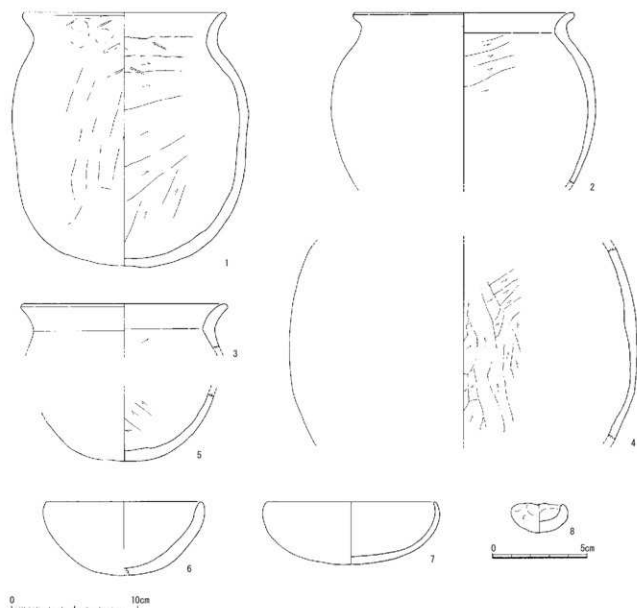
第16図1・2は土師器甕で同一個体とみられる。1は口縁部がやや外反する。2は底部が平底である。底面は約半分が欠損しているが、円形の蒸気孔が中央に1個、その周囲に5～6個配置されるとみられる。3は甕の把手である。これも1・2と同一個体の可能性がある。把手の先端はほぼ真上を向く。内面には把手を胴部にソケット状に差し込んだ痕がみられる。4は同様に土師器甕の底部で、径1～2cmほどの円形の蒸気孔が複数穿たれる。

5・6は須恵器高環の蓋である。5は高いつまみを有し、上部は山形に突出させている。外面天井部には櫛歯文が施され、口縁部には受け部が見られる。内面は全面に自然釉が付着する。6はつまみの上部を突出させており、天井部と口縁部の境は明確でない。外面は回転ヘラケズリを施しているが、仕上げは粗い。口縁端部を丸く仕上げる。

7は須恵器壺の口縁部から頸部である。口縁端部は大きく外反する。外面には2段にわたり、波状文が施される。8は須恵器壺である。外面には2段の波状文が施される。内面には自然釉が付着する。



第12図 8号竪穴住居カマド実測図(1/30)



第13図 8号竪穴住居出土遺物実測図(1～7:1/3、8:1/2)

10号竪穴住居(第17図 図版6・7)

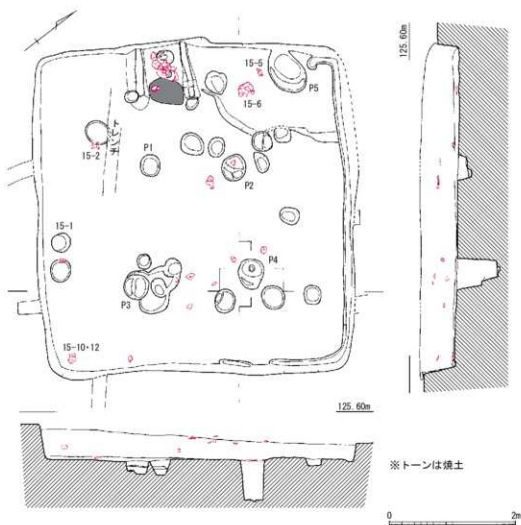
9号竪穴住居の北西側で確認され、11～15、20、23号竪穴住居、3号竪穴遺構、11号土坑を切る。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は約6.9m×約6.0m、検出面からの深さは最大約65cmを測る。床面のほぼ中央に灰跡がみられる。南壁側には屋内土坑が掘り込まれ、壁際には部分的に壁周溝が巡っている。主柱穴はP1～P4の4本と考えられ、深さは床面から60～80cmを測る。

遺物は土師器小型丸底甕・高坏が数多く出土しているほか、朝鮮半島系土器もみられる。

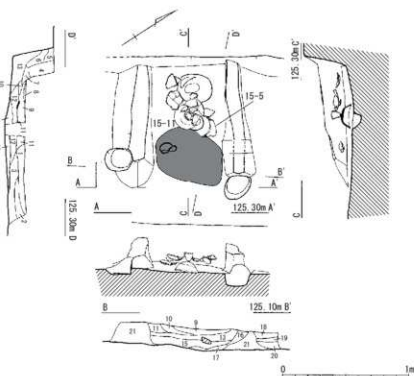
出土遺物(第18～22図 図版30・31)

第18図1～4は、弥生土器甕である。1～3は上げ底、4は平底である。混入品である。

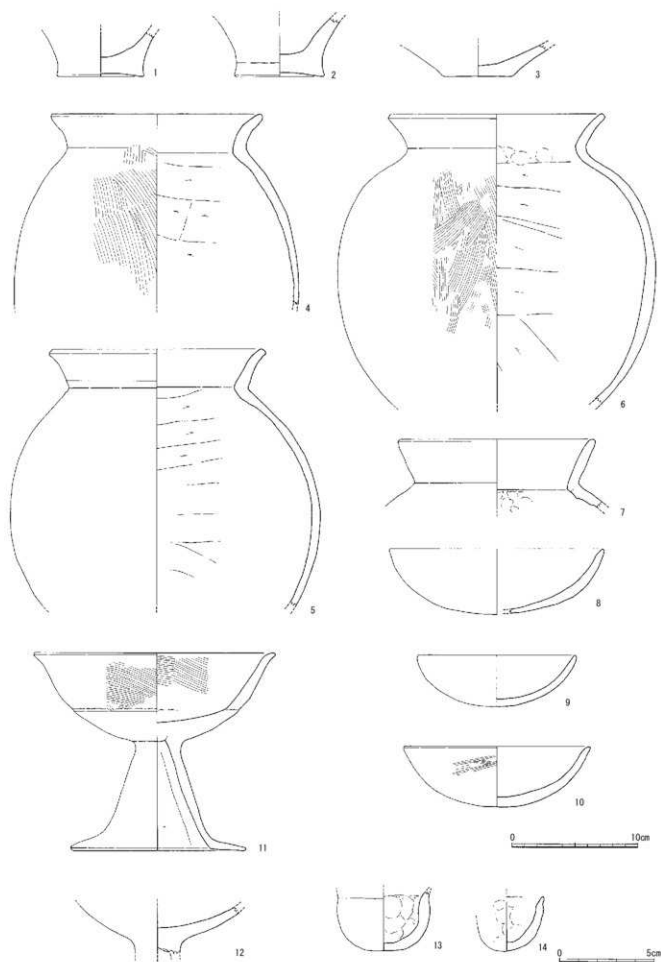
5～13は土師器甕である。5、6は口縁部が外反しながら立ち上がり、5は端部を丸く、6は四角く仕上げる。胴部は球体を呈する。5は頸部内面の屈曲部はわずかにつまみ出している。胴部は中位よりやや上で最大径を測



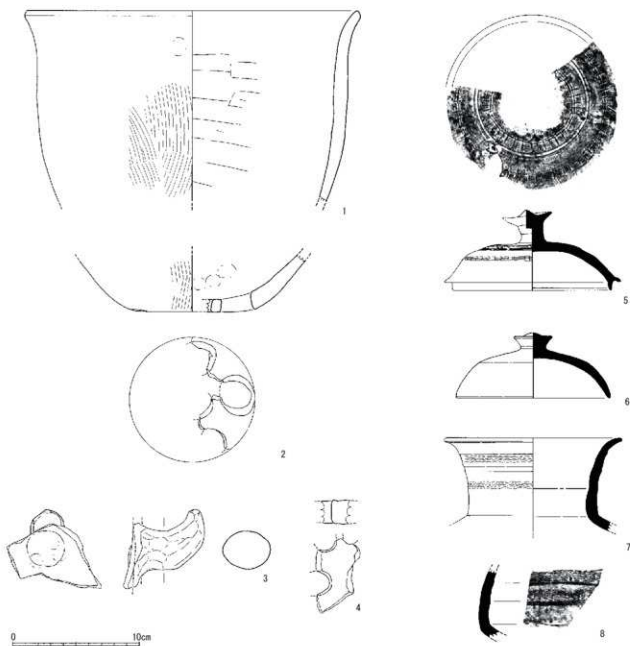
- 9 住カマド
- 1層 淡褐色土 住原埋土
 - 2層 暗褐色土 住原埋土
 - 3層 暗灰褐色土 住原埋土
 - 4層 暗褐色土
 - 5層 茶褐色土
 - 6層 暗赤褐色土
 - 7層 暗黄赤褐色土
 - 8層 暗赤褐色土
 - 9層 黄赤褐色土
 - 10層 灰褐色土 焼土少量含む
 - 11層 暗褐色土
 - 12層 暗褐色土 焼土塊・灰含む
 - 13層 赤茶褐色土
 - 14層 赤褐色土
 - 15層 暗灰赤褐色土
 - 16層 赤褐色土 焼壁
 - 17層 赤褐色土 火床面
 - 18層 暗赤褐色土
 - 19層 暗褐色土
 - 20層 暗褐色土
 - 21層 黄褐色粘質土 焼
 - 暗褐色粘質土



第 14 図 9 竪穴住居実測図 (1/60) 及びカマド実測図 (1/30)



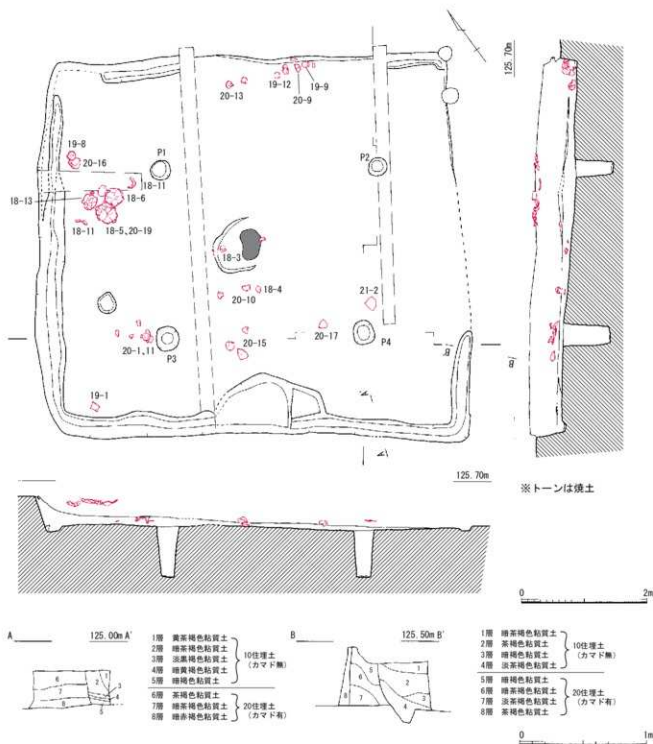
第15图 9号竖穴住居出土遺物実測図(1)(1~12:1/3、13·14:1/2)



第16図 9号竪穴住居出土遺物実測図(2)(1/3)

7は器壁の薄い口縁部が大きく外反しながら立ち上がる。端部をつまみ出すようにして内湾させている。8は口縁部が外反しながら開く。端部は四角く仕上げる。9は口縁部が直線的に開いて立ち上がり、端部を僅かに内湾させながら、丸く仕上げる。10は口縁部が僅かに外反しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げる。11は器壁の厚い口縁部が大きく外反し、端部は薄く、四角く仕上げる。12は口縁部が外反して立ち上がり、端部でさらに開く。13は底部まで器壁が薄く、精緻な作りである。

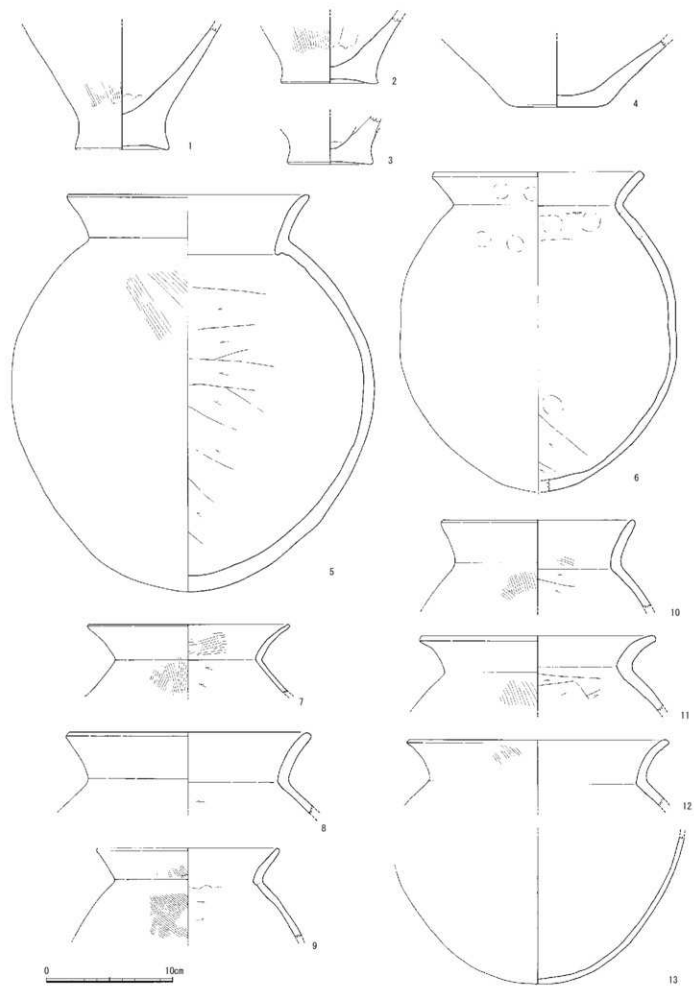
第19図1～17は土師器である。1は比較的大型の甑で、口縁部はほぼ直線的に長く立ち上がり、端部は四角く仕上げる。2～8は中型の甑である。2は口縁部がほぼ直線的に立ち上がり、頸部との境近くで、僅かに膨らむ。端部は丸く仕上げる。3は口縁部が若干開きながら立ち上がるが、端部を内湾させ、丸く仕上げている。



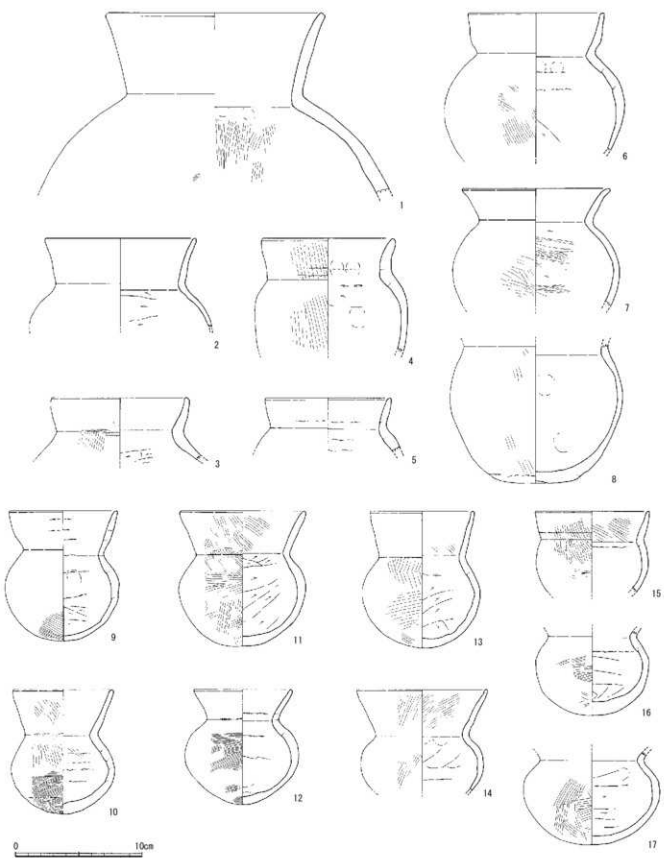
第17図 10号竪穴住居実測図 (1/60・1/30)



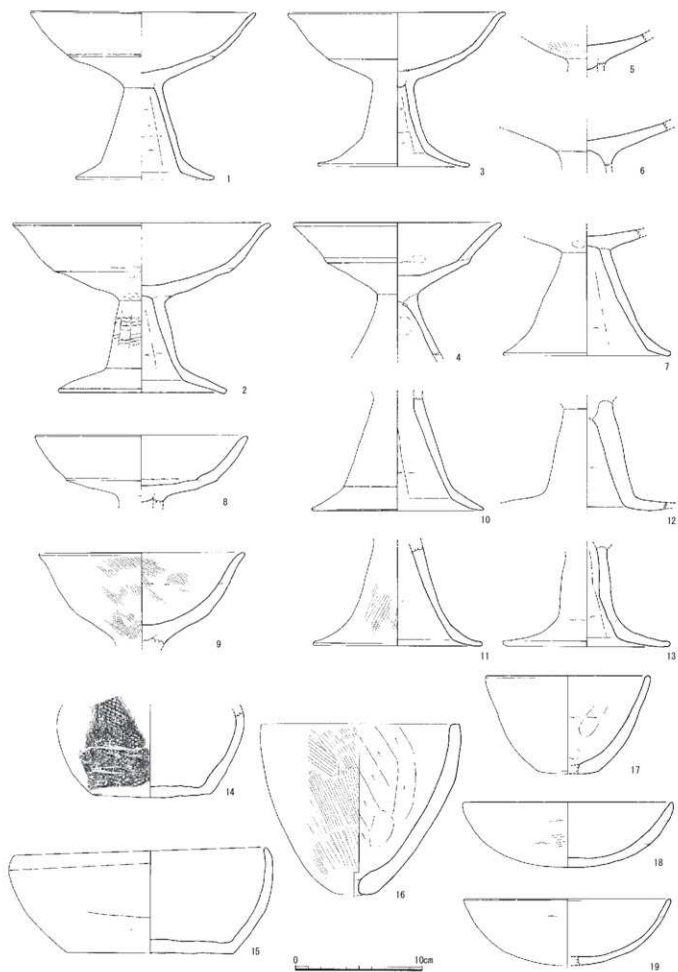
写真3 10号竪穴住居南側土層



第18图 10号竖穴住居出土遺物実測図(1)(1/3)



第19图 10号竖穴住居出土遺物実測図(2)(1/3)



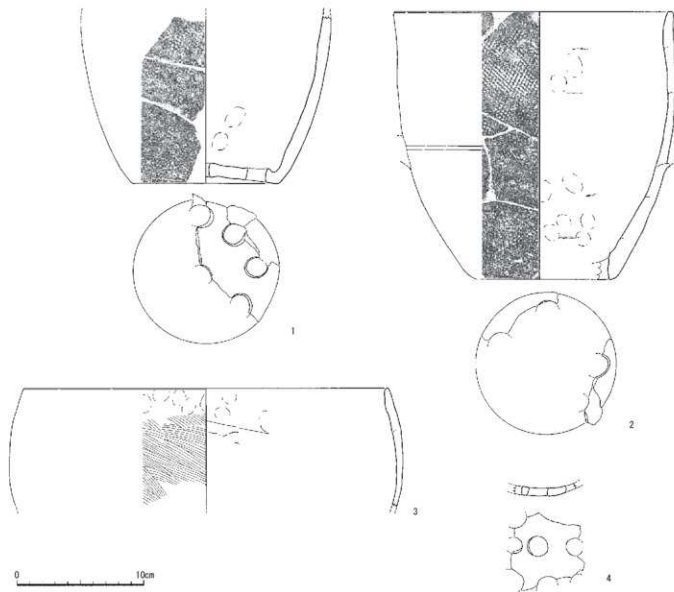
第20图 10号竖穴住居出土遺物実測圖(3)(1/3)

頸部の稜は明確ではない。4は厚ぼったい口縁部が僅かに開きながら立ち上がり、端部を丸く仕上げ上げる。頸部の稜は明確ではない。5は口縁部がほぼ直線的に立ち上がるが、開きはほとんどない。端部は丸く仕上げ上げる。6は口縁部が2とほぼ同じ形態であるが、端部はやや内湾気味である。7は口縁部が開きながら立ち上がり、端部でさらに外反する。8は頸部の稜が明確でなく、胴部の張りは少ない。底部は平底気味である。以上、中型の壺は若干の形態の差こそあれ、いずれも口縁部径が胴部最大径よりも小さくなることが指摘できる。

9～17は小型丸底甕である。9～12は口縁部が直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げ上げる。

9～11が口縁部径と胴部最大径がほぼ同じであるのに対し、12は胴部が大きく張る。13～15は口縁部が直線的に開きながら立ち上がり、端部付近で内湾する。13は口縁部径が胴部最大径より小さくなり、14は反対に口縁部径が大きくなる。15は両方の径がほぼ同じである。16は胴部の張りが小さく、17は胴部が比較的大きく張る。

第20図1～13は土師器高坏である。1～3のように坏部が丸味を帯び、明確な稜を持ち、口縁端部を外反



第21図 10号竪穴住居出土土物実測図(4)(1/3)

させるタイプや4のように直線的に開くタイプが見られる。また、坏部に稜が明確にみられ、口縁部端部を僅かに外反させる。脚部は12や13のように器付近の屈曲部分か、ほとんど接地するものと1～2cm上で屈曲するものが見られる。また、7は脚部の中位付近がやや膨らんでおり、若干古いタイプである。

14、15、17は土師器鉢である。14は平底で外面に格子目タタキが施される、朝鮮半島系の軟質土器である。15は口縁端部をやや内湾させ、丸く仕上げる。底部は平底で、中央付近において器壁が厚くなる。17は口縁部が直線的に開き、端部を丸く仕上げる。底面はややレンズ状を呈する。16は小型の土師器甕である。口縁端部はほぼ直立し、端部は平坦に仕上げる。底部には蒸気孔が1つある。18・19は土師器環である。いずれも端部が外反しない単口縁である。18は器壁が厚く、端部は薄く仕上げる。19は器壁が薄く、端部を丸く仕上げる。

第21図1～4は土師器甕である。1は外面に格子目タタキを施す。底部はやや上底気味である。蒸気孔は中央に1個で、その周囲に8個の孔があったとみられる。2は1とほぼ同様の形態で、外面には格子目タタキを施す。中位に把手を接合した痕跡が見られ、この位置に浅い沈線が施している。蒸気孔は多孔式で1と同様の配置、孔数か。3は胴部中位がやや膨らむ形態である。口縁端部は丸く仕上げる。4は底部である。径1.5cmほどの穿孔があり、1、2に比べ、多数の蒸気孔があるタイプと考えられる。

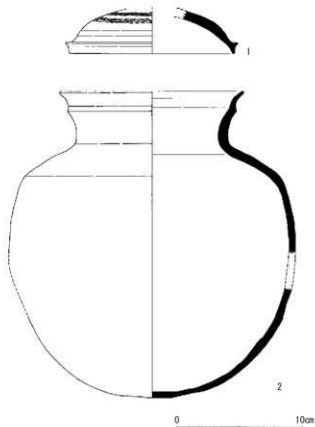
第22図1は須恵器蓋である。天井部は欠損しているため、つまみがあったか不明である。外面天井部付近には2段の波状文が施される。口縁部には受け部が見られるが、9号竪穴住居出土の蓋(第16図1)とは異なり、上方を向く。2は須恵器壺である。口縁部は緩やかに外反しながら、中位付近でやや山形に突出させている。器壁内面はやや赤褐色を呈しており、やや焼成不良の観がある。

11号竪穴住居(第23図 図版4)

10号竪穴住居とほぼ同位置で確認され、10、12～15号竪穴住居、11号土坑に切られる。平面形はほぼ正円形を呈し、規模は径約5.6m、検出面からの深さは最大約45cmを測る。住居のほぼ中央には土坑が確認された。11号土坑によって上面は削平を受けているが、規模は両軸とも約100cm、床面からの深さは約50cmと推定できる。壁際にはほぼ全周にわたり、壁周溝が巡っている。主柱穴はP1～P4の4本とみられ、深さは床面から70～90cmを測る。

出土物(第24図 図版32)

1～6は弥生土器甕である。1は口縁が大きく外に開き、端部を丸く仕上げる。胴部はほとんど張らない。2～6はどれも外底面をやや上底気味に成形する。6の内面には工具によるナデが施される。



第22図 10号竪穴住居出土遺物実測図(5)(1/3)

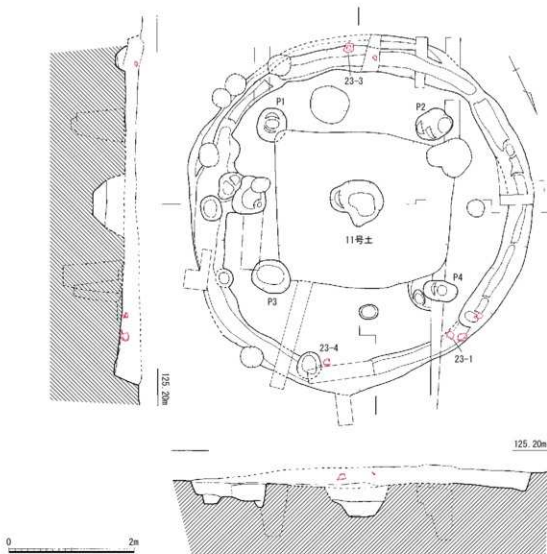
12～14号竪穴住居（第25図 図版9）

7号竪穴住居の西側で確認され、大部分が8～10、15、20号竪穴住居に切られる。このため、西側の壁と壁周溝とみられる溝がごく一部に確認された程度であるが、平面形は歪な円形を呈するとみられ、規模は東西方向で約11.5mを測る。主柱穴になるとみられるピットから少なくとも3軒の住居の存在が想定される。

12号竪穴住居は、P1～P12の12本が主柱穴と考えられ、床面からの深さは約45～100cmを測る。13号竪穴住居はP13～P23の11本が主柱穴になると考えられ、床面からの深さは約30～95cmを測る。14号竪穴住居は西側に展開するP24～28の5本が少なくとも主柱穴になるとみられるが、東側に展開する柱穴は確認できなかった。柱穴の床面からの深さは約40～75cmを測る。

これらに柱穴が掘り込まれる床面までの深さは検出面から約45～60cmを測る。さらに中央付近には土坑があり、住居に伴う中央土坑になるとみられる。平面形は不定形で規模は約2.5m×約1.5m、床面からの深さは最大約45cmを測る。また、赤漆と判断できる焼土等は確認できなかった。

これらの住居の切り合い関係を明確に示すのが難しいが、12号→13号→14号の順番で住居の規模を拡大していったものと思われる。また、この他に柱穴とみられるピットが存在するが、主柱穴として展開を確認するこ



第23図 11号竪穴住居実測図 (1/60)

とができなかった。そのため、さらに1ないし2軒ほど存在する可能性はある。

出土遺物 (第26図 図版32)

1・2は弥生土器甕である。1は頸部下部に断面三角形の突帯を貼り付ける。2は跳ね上げ口縁である。3は弥生土器甕である。4、5は弥生土器器台で、同一個体の可能性もある。6、7は弥生土器蓋である。6は口縁端部を肥厚させる。

8、10～14は弥生土器甕の底部である。10が平底になっている以外は、何れも上げ底である。9は土師器高坏の坏部である。口縁端部をわずかに外反させ、丸く仕上げられる。

15号竪穴住居 (第27図 図版9)

9号竪穴住居と10号竪穴住居の間で確認され、10、12～14、16、17号竪穴住居を切り、8～10、20号竪穴住居に切られる。削平や掘り過ぎのため、ラインは1/3程度しか残っていないが、平面形はほぼ正方形を呈するとみられ、規模は残っている部分で約6.0m×約6.0m、検出面からの深さは最大15cmを測る。主柱穴は床の南寄りにあるP1・P2の2本と考えられ、深さは床面から45、60cmを測る。P1・P2間には跡が見られる。また、壁際には部分的に周溝が巡っている。

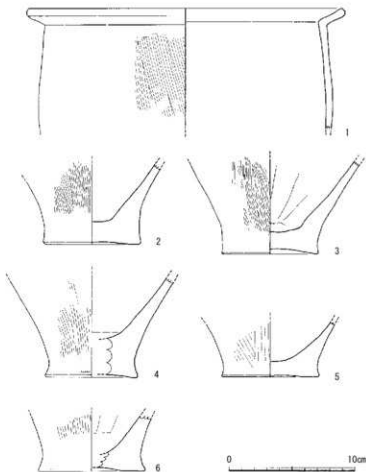
出土遺物 (第28図 図版32)

1・2・4・5は弥生土器甕である。1は口縁部がやや外反気味に開き、端部は四角く仕上げられる。2は口縁部があまり開かず、端部は丸く仕上げられる。4はわずかにレンズ状を呈する底部である。胴部の張りは少ない。3は弥生土器高坏である。内面にはシボリ痕が見られる。

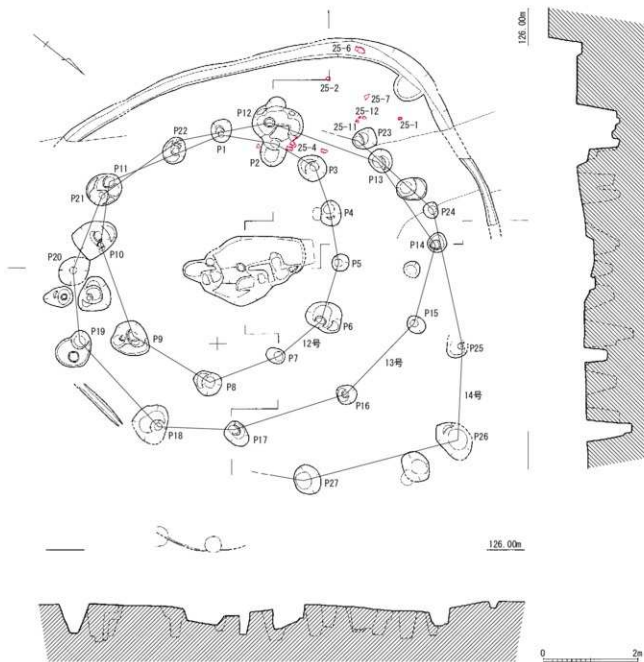
16・17号竪穴住居 (第29図 図版9・10)

15号竪穴住居の北東側で確認され、15・18号竪穴住居に切られる。16号竪穴住居の南隅から約0.8m範囲に段が見られたため、さらに1軒の住居の存在を想定して、17号竪穴住居とした。また、北東壁は削平を受けているものの、現状の規模は約5.6m×約4.6m+a、検出面からの深さは最大約25cmを測る。床面の中央からやや南東寄りに主柱穴とみられるピット(P1・P2)が確認され、その深さは床面から35～40cmを測り、その間に跡がみられる。また南東壁際には屋内土坑が掘り込まれ、土坑付近に壁周溝が巡っている。

遺物はが跡と屋内土坑との間で多く出土している。



第24図 11号竪穴住居出土遺物実測図(1/3)

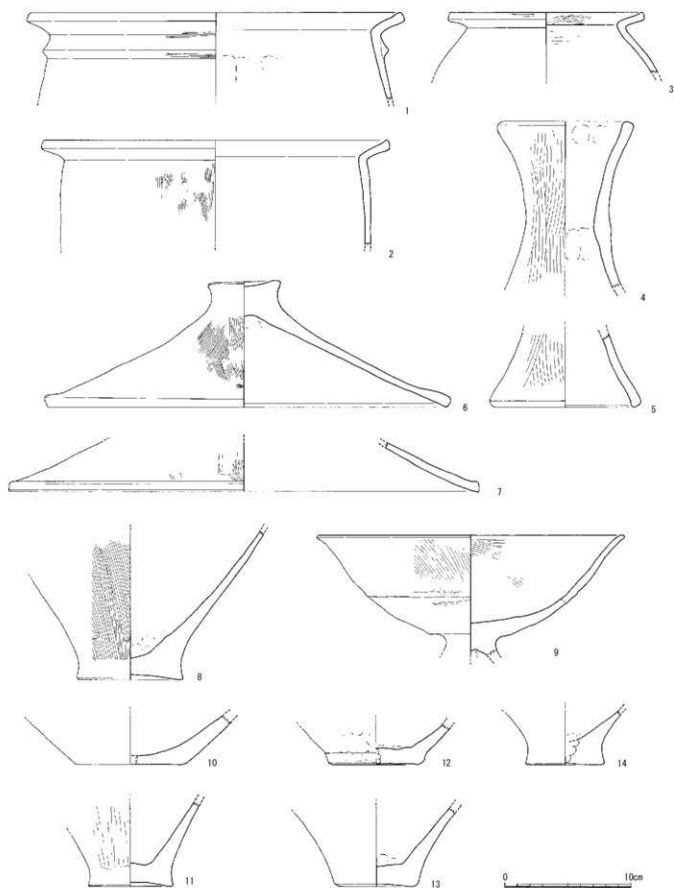


第25図 12～14号竪穴住居実測図(1/80)

出土遺物(第30～32図 図版32・33)

第30図1～9は弥生土器甕である。1は底部がレンズ状を呈し、口縁部は大きくは開かない。口縁端部を丸く仕上げる。2、3は口縁部が大きく開き、口縁端部は四角く仕上げる。また、2の胴部は3に比べて張りが小さい。4は口縁部がやや外反しながら開く。5はレンズ状の底部を呈する。また、6は平底、7～9は上底である。

第31図1～6は弥生土器甕である。1は頸部から口縁部にかけて丸味を帯びながら外反し、端部をやや窪ませている。胴部はあまり張らない。2、3は口縁部が緩やかに外反しながら開く。2は端部をやや肥厚させ、沈線が見られる。3は端部を丸く仕上げる。また、2、3ともに頸部に断面三角形の突帯を貼り付ける。4は胴部が楕円形気味に張り、底部はレンズ状を呈する。5は断面M字形の突帯に斜め方向の刻目を施す。6は底部が



第 26 图 12 ~ 14 号竖穴住居出土遺物実測図 (1/3)

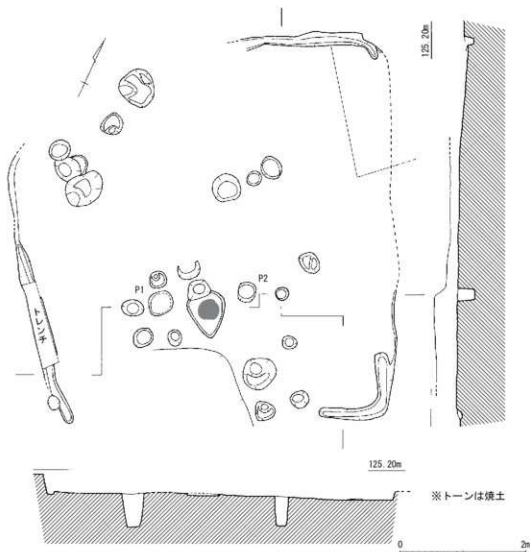
レンズ状を呈する。

7～11は弥生土器鉢である。7は口縁がやや波状を呈し、端部を丸く仕上げている。底部は平底である。8は器壁が厚い。9は口縁端部を四角く仕上げ、底部はレンズ状を呈する。10、11は口縁端部をやや内湾させ、端部を丸く仕上げている。底部はレンズ状を呈する。また、10は内面に暗文を施す。

第32図1～5は弥生土器高坏である。1は鋤先状の口縁部を呈する。口縁上面はやや窪み、端部を丸く仕上げている。2は坏部が中位付近から大きく内湾し、端部を僅かに上方につまみ上げている。3～5は高坏である。3は口縁部が大きく開く。4は口縁部があまり開かず、3に比べて、坏部は深く、接合部は太い。5は脚部が坏部との接合部から開かず、裾近くで開き、端部は薄く仕上げている。

18号竪穴住居（第33図 図版10・11）

8号竪穴住居と16・17号竪穴住居の間で確認され、16・17号竪穴住居・1号裏棺墓を切る。平面形は長方形を呈し、規模は長軸が約2.5m、短軸は掘り過ぎているもの、想定ラインで約2.0mを測る。また、深さは検出面より約30cmである。床面にはいくつかのピットが見られ、中央付近のP1が主柱穴となる可能性がある。



第27図 15号竪穴住居実測図 (1/60)

床面からの深さは、約 55 cm である。炉跡や壁周溝は確認されなかった。

出土遺物 (第 34 図 図版 33)

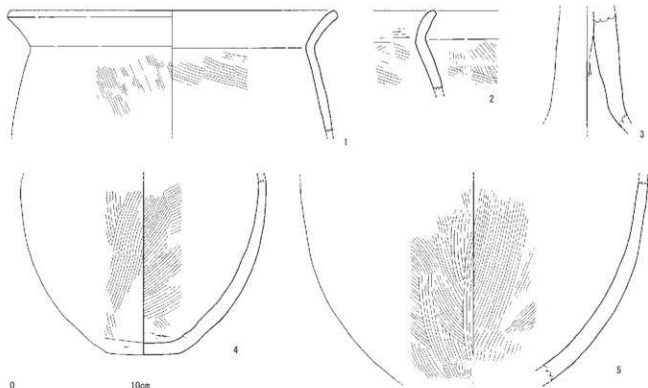
1・2 は弥生土器甕である。長胴タイプで、底部はレンズ状を呈する。口縁部は直線的に開く。2 は丸底である。3 は弥生土器高坏である。一見、甕台と思われるが、内面に坏部を接合する。脚端部はやや内湾し、沈線状に窪ませる。

19 号竪穴住居 (第 33 図 図版 11)

10 号竪穴住居西側で確認され、24 号竪穴住居を切る。南西側は調査区外へと広がり、1 次調査区の SH27 にあたる。平面形は方形を呈し、規模は北東壁で約 4.0 m、これに直交する北東 - 南西軸で 2 次調査区内は約 1.9 m を測る。床面には焼土やピットがいくつか見られるが、この住居に伴う炉跡や支柱となるか、不明である。また、壁際には南東側から北側にかけて、壁周溝が巡っている。

出土遺物 (第 35 図 図版 33)

1、2、4、7～10 は弥生土器甕である。1 は口縁部が大きく開き、端部を跳ね上げる。2 は口縁部が緩やかに外反し、端部を丸く仕上げる。4 は口縁部が大きく外反しながら開く。胴部は球形を呈し、底部は丸底である。3 は弥生土器複合口縁甕である。口縁上部は屈曲部より外反しながら立ち上がる。端部は丸く仕上げる。5、6 は弥生土器高坏である。5 は脚部が柱状を呈し、端部近くで外に開くが、その部分に 7 箇所の穿孔が施される。一方、6 は坏部との接合部から直線的に大きく開く。7 は底部が平底を呈する。8～10 の甕底部は何れも上げ底である。



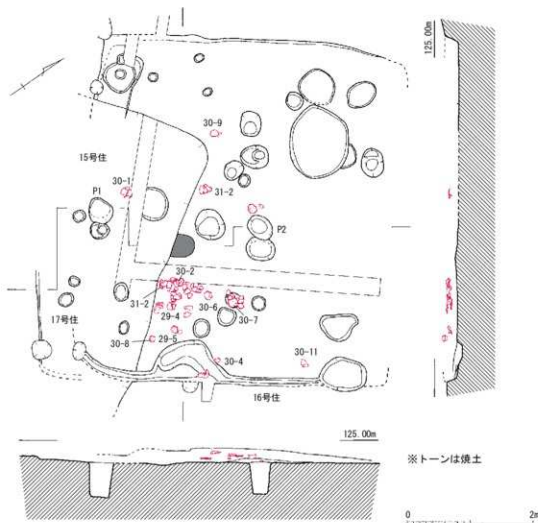
第 28 図 15 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

20号竪穴住居（第36図 図版11・12）

9号竪穴住居と10号竪穴住居の間で確認され、12～15号竪穴住居を切り、9、10号竪穴住居に切られる。この住居については、当初は確認できず、周辺の住居を掘り下げる過程でカマドを検出したため、住居の存在を確認した。よって、周辺の壁の大部分は掘り過ぎてしまっているため、平面形及び規模については不明である。主柱穴はP1～P4と考えられ、深さは床面から40～60cmである。

カマドは南西壁の内側に付設される。袖及び袖石、支脚はいずれも残っていた。袖は暗褐色及び褐色系の粘土を使用しており、左袖が約70cm、右袖が約70cm、袖間の幅は奥壁側が約40cm、袖石側が約55cmを測る。左袖石は板状の石材を利用し、やや内傾しているものの、ほぼ原位置を保っているものと思われる。右袖石は左側と同様に板石を利用しているが、袖の外側に倒れている。袖内には棒状の石材を利用した支脚、その手前には天井石に使用していたとみられる板石が割れて落ち込んでいた。支脚の前面から左右袖間が被熱しており、火床面となる。

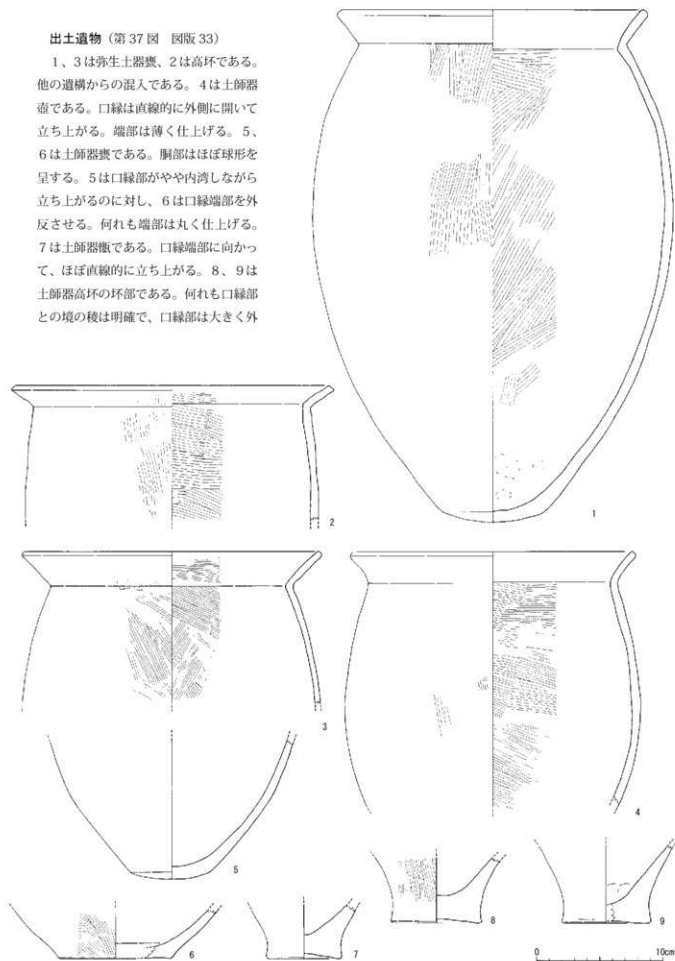
また、2層が天井の崩落に伴う土層と考えられ、この層が袖内にしか存在しないことから、内側への引き倒しによるカマド祭祀が行われた痕跡が窺える。ただし、2層と火床面の間には暗褐色土（3層）が1枚堆積していることから、カマド廃棄後、ある程度時間をおいて祭祀を行った可能性がある。



第29図 16・17号竪穴住居実測図 (1/60)

出土遺物 (第 37 図 図版 33)

1、3は弥生土器甕、2は高坏である。他の遺構からの混入である。4は土師器壺である。口縁は直線的に外側に開いて立ち上がる。端部は薄く仕上げる。5、6は土師器甕である。胴部はほぼ球形を呈する。5は口縁部がやや内湾しながら立ち上がるのに対し、6は口縁端部を外反させる。何れも端部は丸く仕上げる。7は土師器甕である。口縁端部に向かって、ほぼ直線的に立ち上がる。8、9は土師器高坏の坏部である。何れも口縁部との境の稜は明確で、口縁部は大きく外

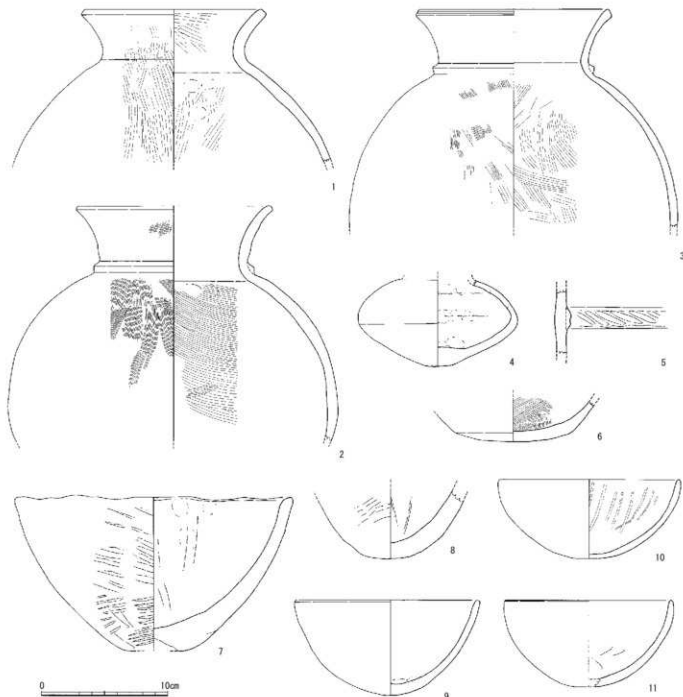


第 30 図 16・17 号竪穴住居出土遺物実測図 (1) (1/3)

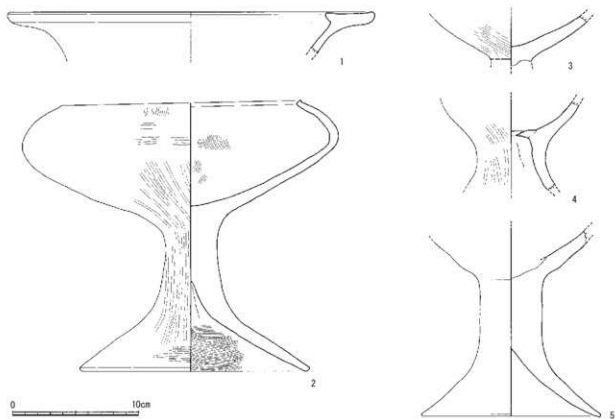
に開きながら立ち上がり、端部を僅かに外反させる。

21号竪穴住居（第38図）

11号竪穴住居の北側で確認され、22号竪穴住居を切り、7号土坑に切られる。北側は削平を受けているが、平面形は長方形を呈すると思われる、規模は約3.0m×約3.0m+α、遺構面からの深さは約20cmを測る。床面のほぼ中央には焼土が見られるが、灰跡の可能性がある。この他、床面に見られるピットが主柱穴になるかどうかは不明である。また、西壁から南壁にかけて、壁周溝が巡る。



第31図 16・17号竪穴住居出土遺物実測図（2）（1/3）



第 32 図 16・17 号竪穴住居出土遺物実測図 (3) (1/3)

出土遺物 (第 39 図)

1 は土師器甕である。口縁は緩やかに外反し、端部を丸く仕上げる。

22 号竪穴住居 (第 40 図)

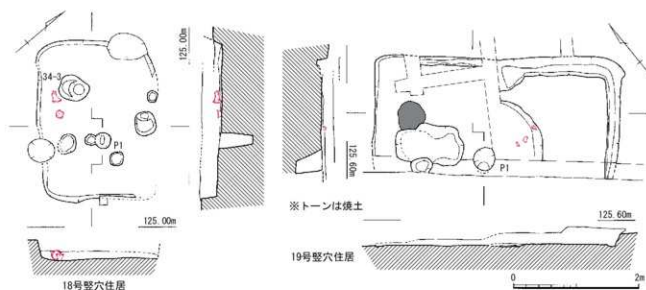
21 号竪穴住居の東側で確認され、この住居に切られる。北東側は削平を受けているが、平面形は方形を呈するとみられる。規模は南西壁で約 1.3 m、南東壁で約 1.1 m、検出面からの深さは最大約 20 cm を測る。住居内には焼土やピットがみられるが、炉跡や支柱穴になるか、不明である。この他、壁周溝等は確認されなかった。

出土遺物 (第 42 図 1～3)

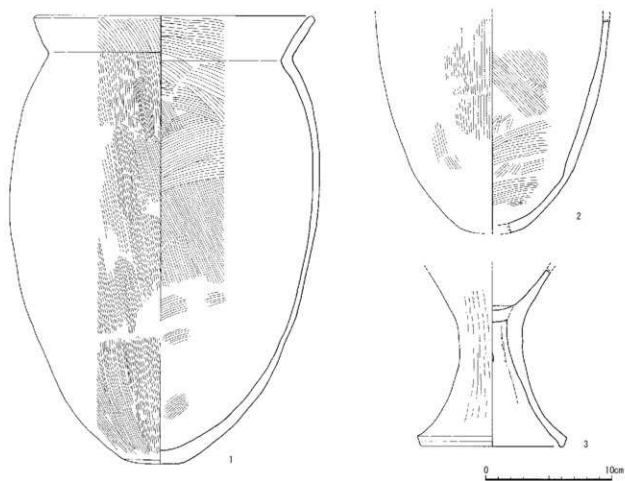
1 は土師器甕である。内底面まで深く、口縁端部を薄く仕上げる。2 は土師器甕の底部である。3 は土師器高坏である。坏部下位に稜線が明確に見られる。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部でさらに外に開く。端部は丸く仕上げる。

23 号竪穴住居 (第 41 図 図版 12)

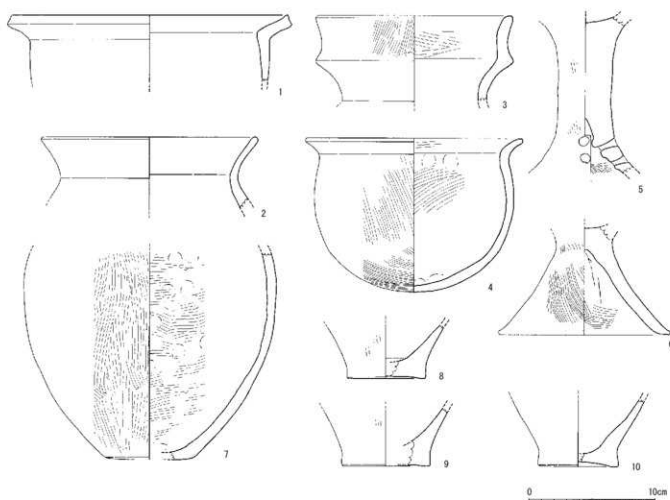
19 号竪穴住居の北東隣りで、この住居とほぼ軸を揃えて検出され、10、24 号竪穴住居に切られる。西側を 10 号竪穴住居により切られているものの、平面形は長方形を呈していることがわかる。規模は約 5.3 m × 約 4.8 m、検出面からの深さは最大約 30 cm を測る。主柱穴は住居の軸とずれ、やや歪になるもの、P 1～P 4 の 4 本と推定され、これらの床面からの深さが約 50～70 cm を測る。また、床面中央からやや南西より見られる焼土が炉跡とみられ、南西壁中央には屋内土坑が掘り込まれる。この他、壁際には北側の一部を除き、周溝が巡る。



第33図 18・19号竪穴住居実測図 (1/60)



第34図 18号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)



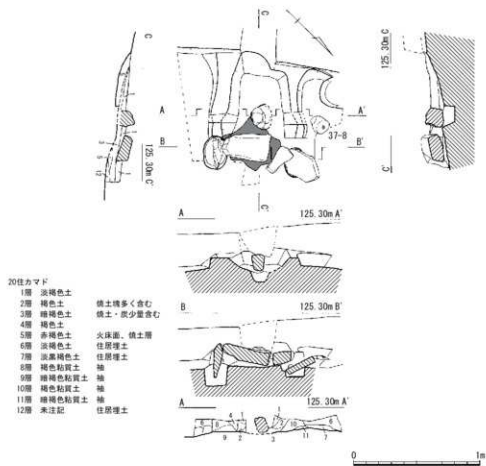
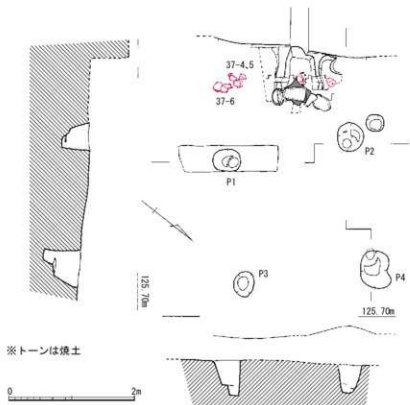
第35図 19号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第42図4～12 図版33)

4～7は弥生土器甕である。4はいわゆる長胴甕である。口縁部は直線的に開き、端部は肥厚させる。胴部径は中位付近で最大となり、底部は丸底を呈する。5は口縁部がやや外反しながら立ち上がり、端部は四角く仕上げられる。4と同じく長胴甕か。6は三角口縁、7は跳ね上げ口縁の甕である。8は弥生土器甕である。頸部に断面三角形の低い突帯を貼り付ける。9は弥生土器高環である。環部との接合部よりやや下位から、裾部に向かって開く。10は弥生土器甕の底部で、平底である。11は土師器環である。口縁端部は薄く仕上げる。12は土師器甕である。底部から胴部にかけて、器壁の厚さはほぼ同じである。

24号竪穴住居 (第43図 図版13)

19号竪穴住居の北側で確認。これに切れ、23号竪穴住居と13号土坑を切る。住居の南側は19号竪穴住居に切れ、北側は削平を受けているが、平面形はほぼ正方形を呈すると思われる。規模は約4.4m×約4.4m、検出面からの深さは最大20cmを測る。調査時点では、調査区外へは広がらないと判断したが、1次調査の遺構図と照らし合わせると、SH28と繋がる可能性も考えられる。その場合、南西-北東軸が約2m長くなり、約6.4mとなる。主柱穴は、床面中央よりやや南西にあるP1、P2の可能性が高く、床面からの深さは約30～50cmである。灰跡については、一部焼土のみられるものの、確実なもの存在しない。この他、壁周溝や屋内土坑などの施設は確認されなかった。また、この住居は検出段階で、大量の焼土と炭化材が検出されており、その状況から焼失したと思われる。



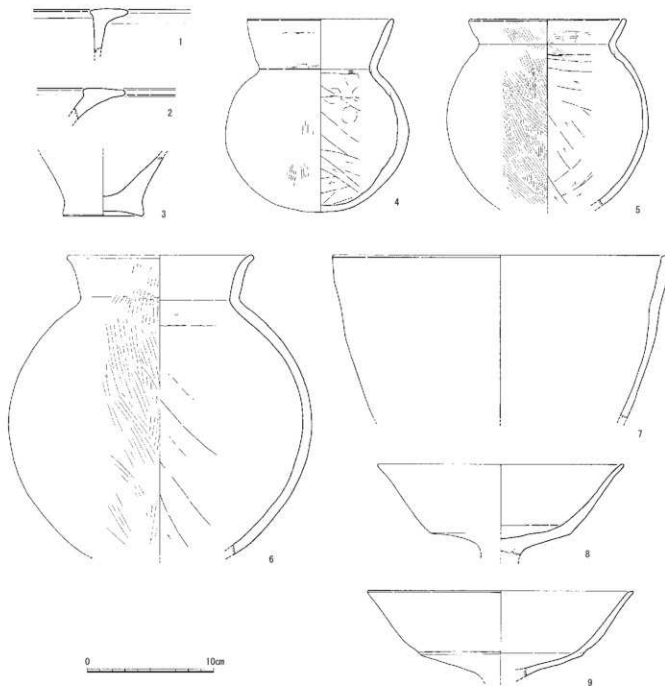
第36図 20号竪穴住居実測図(1/60)及びカマド実測図(1/30)

出土遺物 (第44図 図版33)

1・2は弥生土器裏である。1は逆「L」字形口縁である。低い断面M字形の突帯を貼り付ける。2は底部である。わずかに上げ底気味である。3は土師器高環である。環部下部に明瞭な稜があり、口縁部は端部付近を外反させる。脚部は接合部から裾に向かって開く。裾付近には稜を持たず、端部をやや肥厚させる。混入品である。

25号竪穴住居 (第45図 図版13・14)

23号竪穴住居の北側で確認され、26号竪穴住居を切る。平面形は長方形を呈し、規模は約3.6m×約3.2m、検出面からの深さは最大約30cmを測る。主柱穴はP1～P4の4本と考えられる。なお、床面については明確な貼床が確認できず、地山との区別が判断できなかったことから、ベルト部分を残して20cmほど掘り過ぎてし



第37図 20号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

まっている。なお、P 1～P 4の深さは床面から約30～40 cmと推定できる。

カマドは住居北西壁の内側に付設され、袖及び高環を転用したとみられる支脚が残っていた。袖は暗茶褐色粘質土を使用してあり、左袖が約70 cm、右袖が約60 cm、袖間の幅は奥壁側で約35 cm、袖右側で約50 cm測る。両袖の前には袖石の抜き痕が確認された。支脚の前から左右袖間が被熱しており、火床面となる。また、高環に関しては、床面から約10 cm浮いた状態で確認されたが、廃棄時の祭祀に伴うかは不明である。

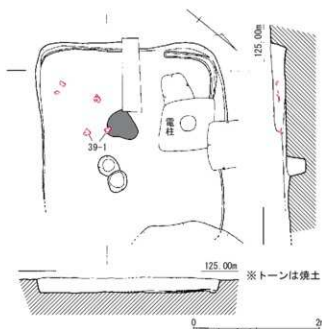
出土遺物 (第46図 図版33・34)

1は土師器甕である。口縁部は惟かに外に開いて立ち上がり、端部は薄く仕上げ。胴部最大径はやや上位に位置する。2～4は土師器甕である。2は底部が尖り気味になる。全体的に器壁が厚い。3は胴部最大径がやや上位に位置しそうである。4は口縁部が外反しながら立ち上がり、端部は丸く仕上げ。5は弥生土甕である。口縁端部をやや肥厚させる。混入品である。6は土師器鉢である。口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げる。底部はやや丸味を帯びる。7、8は土師器杯である。7は単口縁で端部を丸く仕上げ。8は口縁端部を外反させる。9は土師器高環である。カマド出土。環部は大きく外側に開き、さらに端部を外反させる。環部下部の接合部は明確な痕が見える。脚部は接合より外に開き、裾部内面で設置し、端部を跳ね上げている。また脚部中に1ヶ所の穿孔がある。

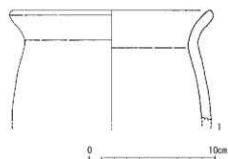
10は土師器甕である。胴部は丸味を帯びながら立ち上がり、把手の有無は定かではない。底部は平底である。底面には円形とみられる蒸気孔が2個あるが、その配置から底面周縁に8～10個配置されていたと思われる。他の竪穴住居から出土した土師器甕と同様の配置の蒸気孔なら、中央にも1個穿たれていた可能性がある。11・12は手柄土器である。ともに丁寧な作りである。11は口縁端部を薄く仕上げ、やや内湾させる。

26号竪穴住居 (第47図 図版14)

25号竪穴住居の北側で確認され、この住居に切られ、36号竪穴住居を切る。また、溝状の掘り込みが南西側から北東側へ向かって、住居を縦断している。しかし、平面形はほぼ正方形を呈し、規模は約5.3 m×約5.3 mであることがわかり、検出面からの深さは最大約30 cmを測る。主柱穴はP 1～P 4の4本とみられ、床面からの深さは35～50 cmである。床面の南東壁際には屋内土坑が付設される。また、茅葺については確認できなかったが、溝状の掘り込みのため、削平されたと考えられる。この



第38図 21号竪穴住居実測図 (1/60)



第39図 21号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

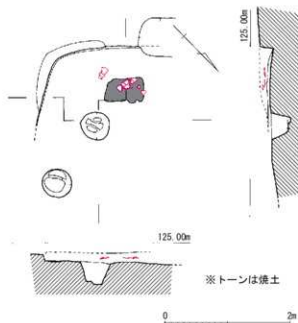
ほか、壁周溝は東壁から南東壁にかけての一部で検出された。

出土遺物 (第48図)

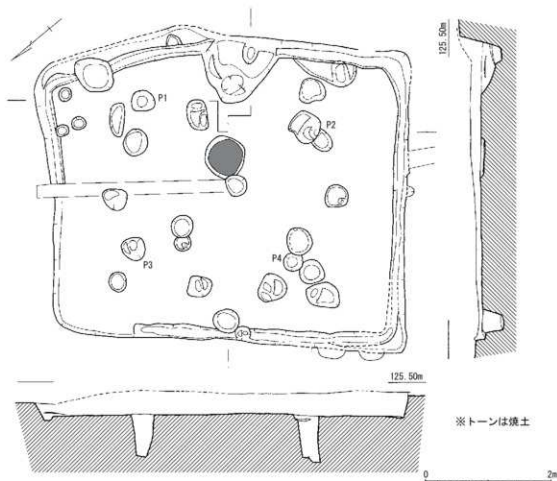
1～4は弥生土器である。1は口縁部が大きく傾いて立ち上がり、端部は丸く仕上げる。胴部はあまり張らないようである。2は端部をやや肥厚させる。壺の可能性もある。3は底面をわずかに上げ底に仕上げているのに対し、4はほぼ平底である。

27号竪穴住居 (第49図 図版15)

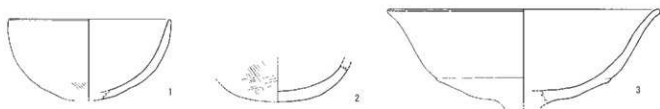
24号竪穴住居の北西側で確認され、28号竪穴住居に切られる。西側の一部が3次調査区のS H 207にあたる。北隅を中心に、削平を受けていたり、掘り過ぎてしまったものの、平面形は長方形を呈し、規模は約6.4 m × 約6.0 mであることがわかる。検出面から



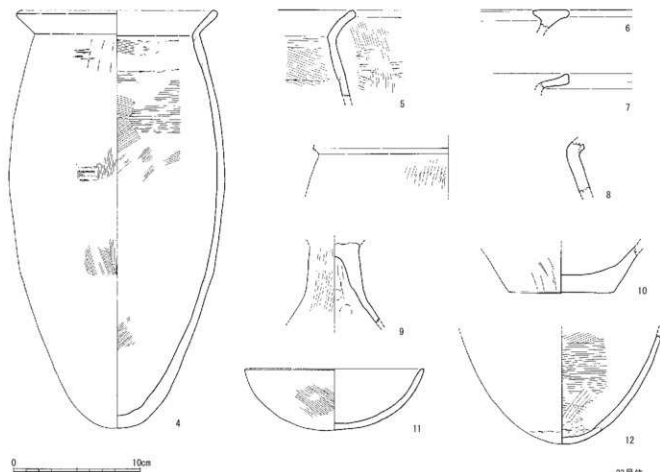
第40図 22号竪穴住居実測図 (1/60)



第41図 23号竪穴住居実測図 (1/60)



22号住



23号住

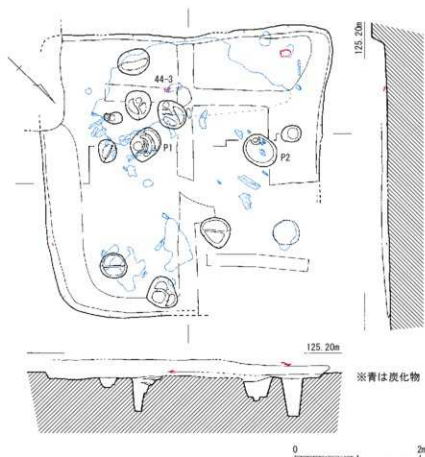
第 42 図 22・23 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

の深さは最大約 25 cm を測る。主柱穴は P 1～P 4 の 4 本とみられ、床面からの深さは 45～75 cm を測る。また、床面の中央よりやや北西寄りに焼土が見られ、*カマド*と考えられる。さらに北西壁際には屋内土坑が付設される。壁周溝は確認できなかった。

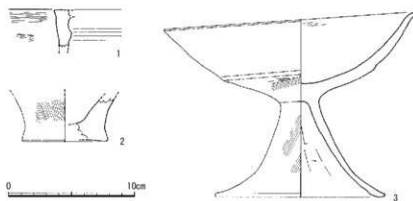
また、3 次調査ではこの住居の西側に 1 軒住居が存在しているが (SH214)、削平を受けていたためか、本調査区では確認できなかった。

出土遺物 (第 50 図 図版 34)

1 は弥生土器高坏である。口縁部上面はほぼ平坦で、内側を僅かに突出させる。2、3 は裏の底部である。2 は上げ底で底端部が大きく突出する。3 は平底である。内底面、底端部は欠損している。



第 43 図 24 号竪穴住居実測図 (1/60)



第 44 図 24 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

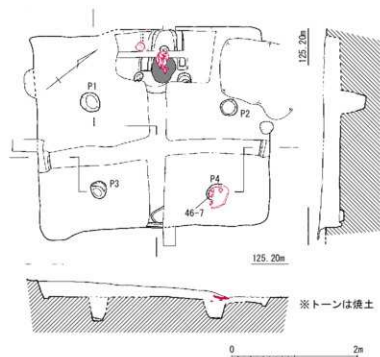
28 号竪穴住居 (第 51 図 図版 15)

27 号竪穴住居の北側で確認され、この住居を切る。西側半分が3次調査区のSH215にあたる。平面形は壁が崩落したためか、台形を呈し、やや歪である。規模は北東壁約 4 m、南西壁約 4.6 m で、北西 - 南東軸が約 3.9 m、検出面からの深さは最大約 45 cm を測る。主柱穴は壁際に寄るものの P 1・P 2 の 2 本とみられ、床面からの深さは約 30 ~ 50 cm を測る。また、床面の中央よりやや南西寄りには少量の焼土が見られ、火跡の可能性が高い。

さらに南西壁際には屋内土坑が付設され、北東壁、南東壁の一部に壁周溝が確認された。遺物は、屋内土坑から多く出土している。

出土遺物 (第52図 図版34)

1～5は弥生土器甕である。1は口縁部が大きく外側に開いて立ち上がり、端部を跳ね上げ気味に肥厚させる。胴部はあまり張らず、最大径はやや上位に位置する。底部は上げ底である。2は口縁部が開いて立ち上がるが、端部はやや上方につまみ出すように仕上っている。3～5は底部であるが、3は若干の上げ底、4は上げ底、5は平底である。6は弥生土器甕である。底面はやや上げ底気味である。6は弥生土器高杯の脚部である。端部は外面をやや肥厚させ、内面は内湾気味に仕上っている。



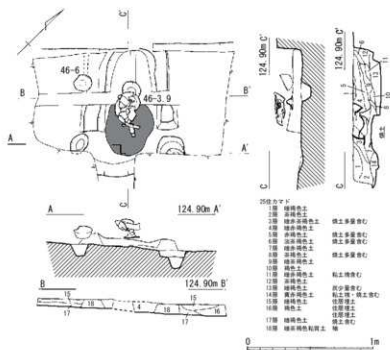
29号竪穴住居

(第53図 図版16)

25号竪穴住居の北東側で確認された。北西側は地形が下がっている分、削平を受けている。平面形は方形を呈し、規模は約3.8m×約2.0m+a。検出面からの深さは最大約15cmを測る。床面にはピットが数個見られるもの、支柱穴になるか、不明である。また、南西壁は南隅の角にかけて壁周溝が掘り込まれている。この他、灰跡・屋内土坑は確認できなかった。

出土遺物 (第53図)

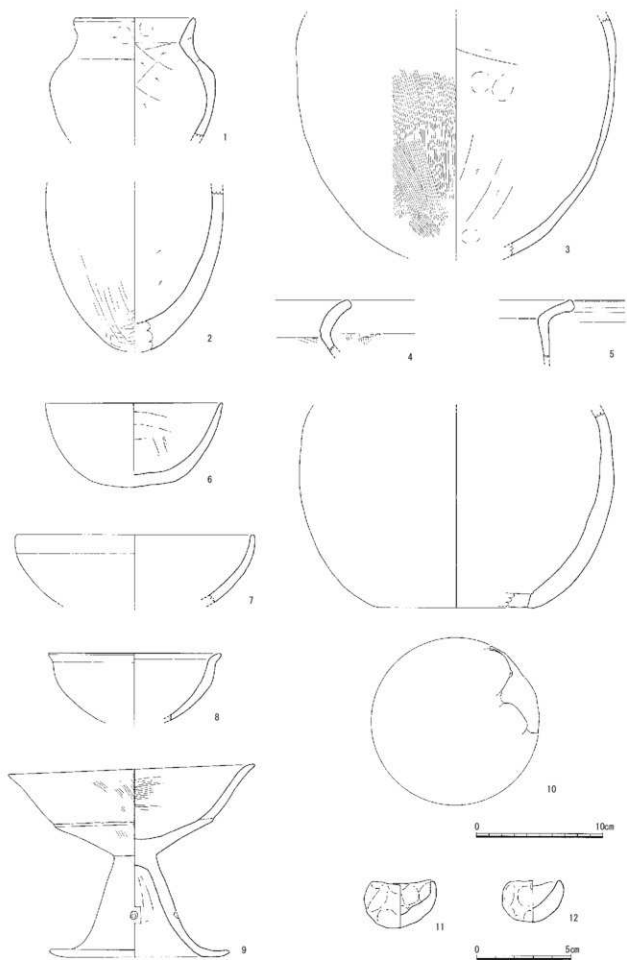
1は弥生土器甕である。口縁部は丸く仕上げる。2は弥生土器甕である。底面はやや上げ底で、底端部は突出しない。



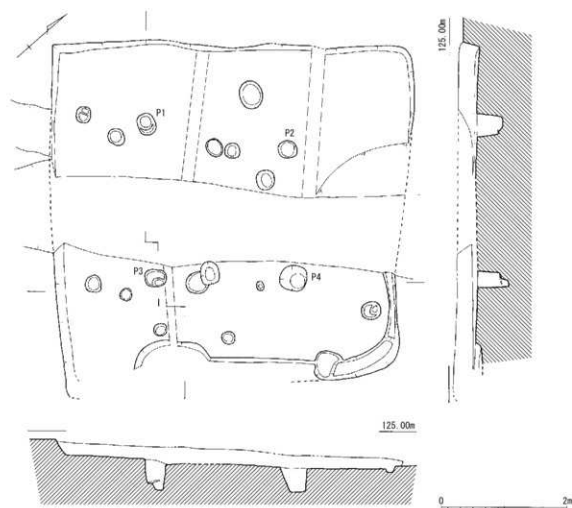
第45図 25号竪穴住居実測図(1/60)及びピカド実測図(1/30)

30号竪穴住居 (第54図 図版16)

19号竪穴住居の南東側で確認され、南西側は調査区外へと広がり、2次調査区のSH22にあたる。平面形は方形を呈すとみられ、調査区内での規模は約1.8m+a×0.3mである。また、検出面からの深さは最大で約5



第46图 25号整穴住居出土物实测图 (1~10:1/3、11·12:1/2)



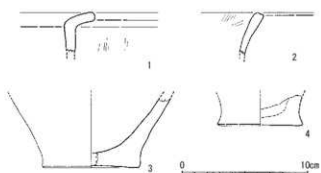
第47図 26号竪穴住居実測図 (1/60)

cmとほとんどが削平を受けている。壁際には焼土が見られるが1次調査の発掘状況からカマドの一部と思われる。

1次調査区に広がる部分と合わせれば、規模は約5.4m×約6.1mとなる。

出土遺物 (第55図 図版34)

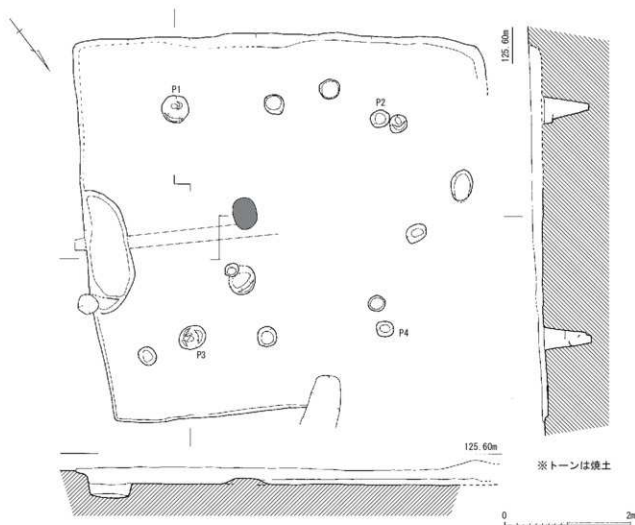
1は土師器壺である。口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げられる。胴部は最大径が中位よりやや上に位置する。
2は土師器高環脚部である。接合部より開き、端部付近で接地する。端部はわずかに跳ね上げる。



第48図 26号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

31号竪穴住居 (第56図 図版17)

調査区の北隅で確認され、32号竪穴住居を切る。西側の大部分は3次調査区のSH255にあたる。平面形はほぼ長方形を呈し、規模は約5.7m×約4.2m、検出面からの深さは約55cmを測る。主柱穴はP1・2の2本と



第49図 27号竪穴住居実測図 (1/60)



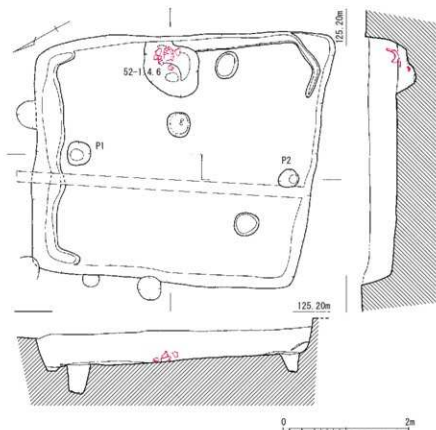
第50図 27号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

みられ、床面からの深さは約60cmを測る。床面の南側には屋内土坑が付設される。また、好跡を示す焼土等は確認できなかった。その他、壁際には壁周溝がほぼ全周する。

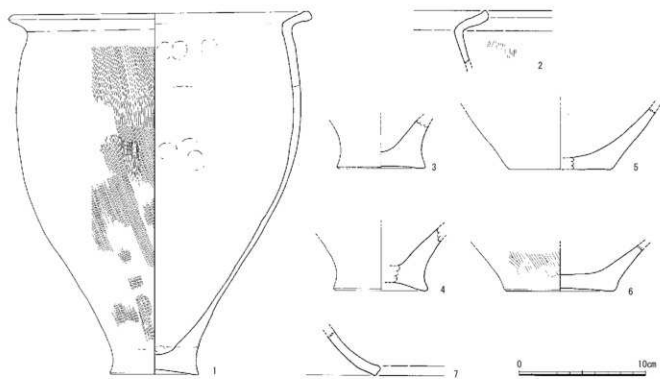
出土遺物 (第57図 図版34)

1・2は土師器壺である。1は口縁部が大きく外反しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げ、頸部は稜が明瞭ではない。2は口縁部がほぼ直線的に開く。口縁部の中位付近でやや器壁が厚くなる。

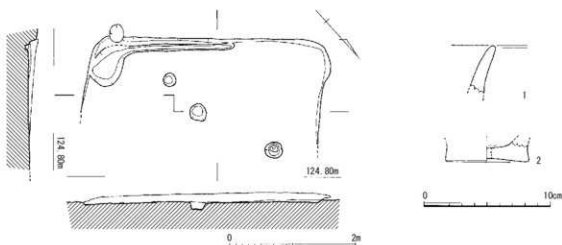
3は弥生土器甕の底部で、底面は平底である。32号竪穴住居からの混入品と思われる。



第 51 图 28 号竖穴住居实测图 (1/60)



第 52 图 28 号竖穴住居出土遗物实测图 (1/3)



第53図 29号竪穴住居実測図(1/60)及び出土物実測図(1/3)

32号竪穴住居

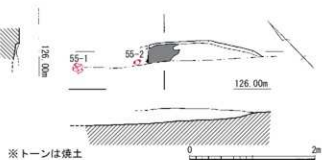
(第58図 図版17)

調査区の北隅、31号竪穴住居を取り囲むように確認され、この住居に切られる。凡そ西半分が3次調査区のSH218にあたる。また、壁周溝や柱穴の展開から少なくとも3軒分の存在が想定されることから、古い順にABCとする。また、これらの住居の床面まで深さは、最も深いところで検出面から約65cmを測る。

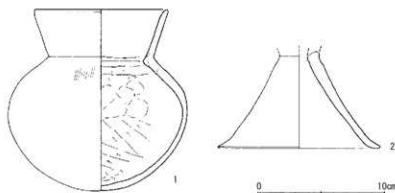
さらに、円形に巡る主柱穴の中心には土坑があり、中央土坑と考えられるが、ABCのどの時期に伴うかなど、切り合い関係は確認できなかった。平面形は不定形で規模は約2.0m×約1.3m、床面からの深さは約30cmである。この他、炉跡とみられる焼土は確認できなかった。

32号A竪穴住居はB竪穴住居に切られるが、壁周溝と考えられる溝が西側に若干残っていることから、平面形は楕円形に近い形を呈すとみられる。規模は西壁から中央土坑までの寄りが約4.4mであることから東西方向の長軸が約8.8mと推測される。また、南北方向をとる短軸は中央土坑との位置関係からおおよそ5~6mになると思われる。主柱穴はP1~P7の7本とみられ、床面からの深さは約55~90cmである。

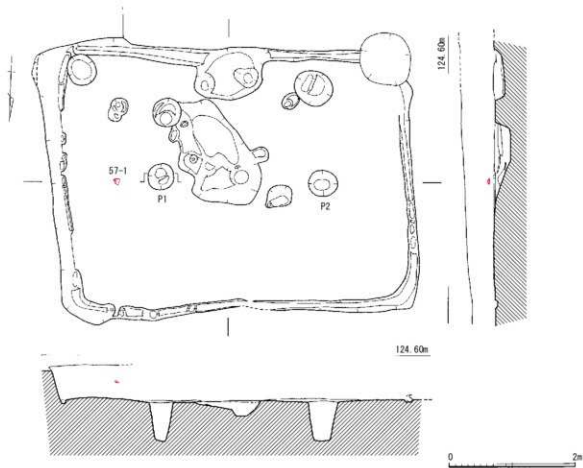
32号B竪穴住居は北側の一部が調査区外へ広がるが、規模は東西軸約11.3m、南北軸約8.9mを測り、平面



第54図 30号竪穴住居実測図(1/60)



第55図 30号竪穴住居出土物実測図(1/3)



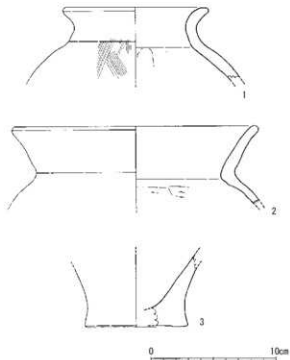
第 56 図 31 号竪穴住居実測図 (1/60)

形は楕円形を呈する。主柱穴は調査区内では P 8 ~ P 17 の 10 本とみられ、床面からの深さは約 40 ~ 95 cm である。このうち、P 14 が A 竪穴住居の壁周溝を切る。

32 号 C 竪穴住居は最も外側の住居で、規模は東西軸約 11.2 m、南北軸約 11.1 m を測り、平面形はほぼ正円となる。主柱穴は P 18 ~ P 29 の 12 本とみられ、床面からの深さは 20 ~ 100 cm である。このうち、P 19 ~ 21、24 は A B 竪穴住居の壁周溝を切る。

この 3 軒以外に、壁周溝とみられる溝、柱穴とみられるピットが存在するが、主柱穴として展開を確認することができなかった。そのため、さらに 1 ないし 2 軒ほど存在する可能性はある。

遺物は弥生土器類などが数点出土している程度である。



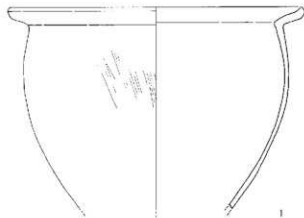
第 57 図 31 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)



第 58 图 32 号整穴住居实测图 (1/80)

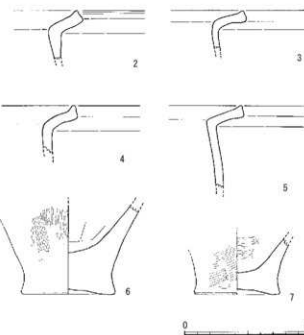
出土遺物 (第59図 図版34)

1～7は弥生土器甕である。1は口縁部が大きく開き、端部を跳ね上げる。胴部は中位よりやや上で最大径を測る。2～5はいずれも口縁部が大きく開き、端部を跳ね上げる。このうち、5のみが、頸部の稜が明瞭で、直線的にシャープな仕上がりに見える。6、7はともに底面は上げ底で、底端部の突出は少ない。



33号竪穴住居 (第60図 図版18)

31号竪穴住居の北東側で確認され、32号竪穴住居を切り、35号竪穴住居に切られる。北東側は調査区外へ広がる、住居の西側は上面を掘り過ぎてしまったが、平面形は長方形を呈すとみられ、調査区内での規模は北西-南東軸が約4.2m、南西-北東軸が約3.3m+αである。住居内には、ほぼ中央に焼土が見られ、炉跡と考えられ、また南西側に屋内土坑が掘り込まれる。炉跡の南西側には主柱穴とみられるピットがあり、床面からの深さは約25cmである。炉跡と推定される南西壁との長さは約2.5mであることから、南西-北東軸の長さは約5.0m、調査区外の長さは約1.7mと推定される。このほか、壁周溝は確認されなかった。



出土遺物 (第61図1・2 図版17)

1は土師器器台である。台部分は浅く、口縁部は緩やかに立ち上がる。脚部は括れ部分から端部に向かって開くが、中位付近でやや膨らみ、その部分が円形の穿孔が4箇所に見られる。2は土師器二重口縁甕の口縁部か。端部を肥厚させる。

第59図 32号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

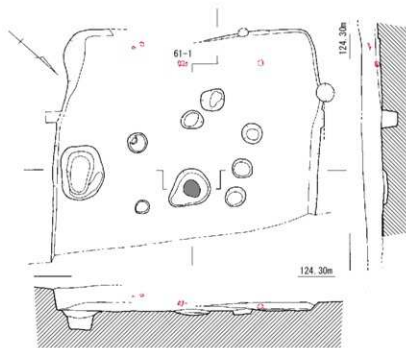
34号竪穴住居 (第60図 図版18・19)

33号竪穴住居の東側で確認され、35号竪穴住居を切り、東側は調査区外へ広がる。平面形は方形を呈し、規模は約3.2m×約1.0m+α、検出面からの深さは最大約5cmを測る。主柱穴は調査区内では確認できなかった。カマドは住居南西壁に付設され、外へ方形に張り出す。袖や袖石、支脚は確認できなかった。張り出し部分の幅は約70cmを測る。カマドの前面向が被熱しており、火床面となる。

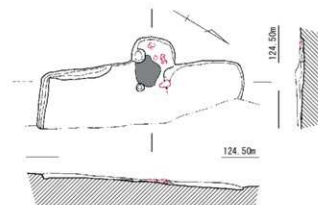
遺物は、カマド内やその周辺から土師器甕などが数点出土しているが、図化可能な遺物は1点のみであった。

出土遺物 (第61図3)

第61図3は土師器甕で、仕上げは雑である。胴部中位よりやや上で最大径を測る。



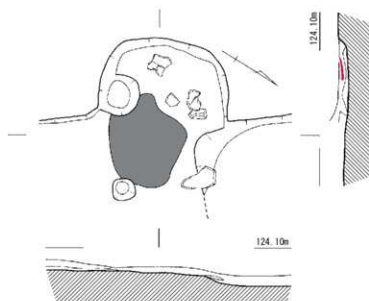
33号竪穴住居



34号竪穴住居

0 2m

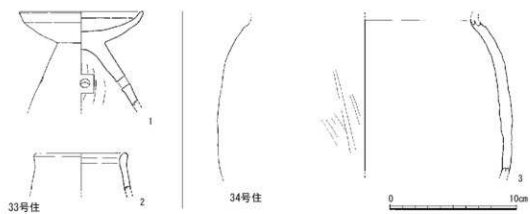
※トーンは焼土



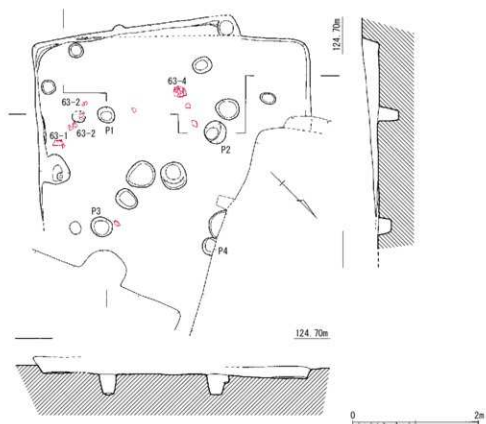
34号竪穴住居カマド

0 1m

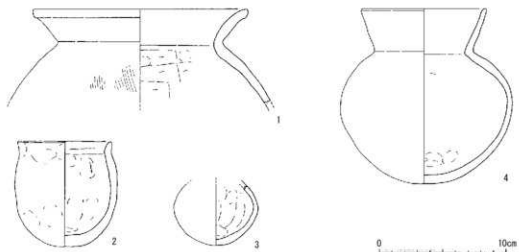
第60図 33・34号竪穴住居実測図 (1/60) 及び34号竪穴住居カマド実測図 (1/30)



第 61 图 33·34 号竖穴住居出土遺物実測図 (1/3)



第 62 图 35 号竖穴住居実測図 (1/60)



第 63 图 35 号竖穴住居出土遺物実測図 (1/3)

35号竪穴住居 (第62図 図版19)

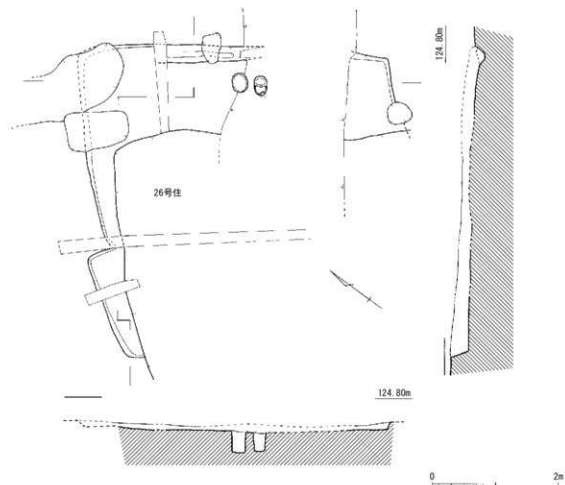
31号竪穴住居の東側で確認され、32・33号竪穴住居を切り、34号竪穴住居に切られる。平面形は方形を呈すとみられ、規模は約4.4m×約3.5m+a、検出面からの深さは最大約30cmを測る。主柱穴は若干軸がずれるもの、P1～P4の4本とみられ、床面からの深さは約20～30cmである。また南東壁際には、屋内土坑が掘り込まれている。この他、跡と判断できるような柱土や壁周溝は確認できなかった。

出土遺物 (第63図 図版34)

1～4は土師器壺である。1は中型の壺で、口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げ上げる。器壁はやや中膨らみとなる。2は胴部が直線的に立ち上がり、口縁端部をわずかに外反させる。口縁部径と胴部最大径はほぼ同じである。3は小型壺である。胴部はほぼ球形を呈する。4は口縁部が直線的に開きながら立ち上がり、端部は丸く仕上げ上げる。胴部は楕円形を呈し、中位付近で最大径を測る。

36号竪穴住居 (第64図)

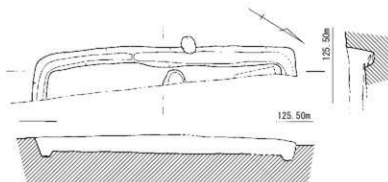
26号竪穴住居の北西側で確認され、この住居および1号石棺墓・14号土坑に切られる。平面形は方形を呈するとみられ、西側に張り出しをもつ。規模は北西-南東軸が約5m、北東-南西軸が5m以上と推定できる。また、検出面からの深さは最大30cmを測る。大部分を26号竪穴住居に切られているため、主柱穴や跡などは確認できなかった。



第64図 36号竪穴住居実測図 (1/60)

出土遺物 (第66図1~4)

第66図1~3は弥生土器甕である。1は口縁部が直線的に開き、端部をやや肥厚させる。2、3はともに底面をやや底である。3は底端部よりやや上位で屈曲して立ち上がる。4は弥生土器高環である。脚部中位付近より裾部に向かって開く。

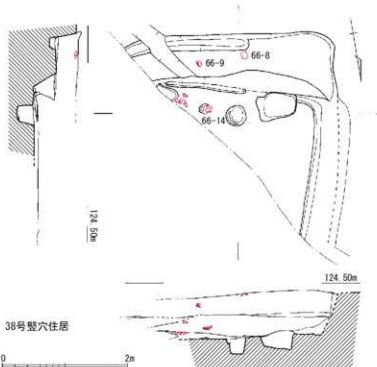


37号竪穴住居

37号竪穴住居 (第65図 図版19)
34号竪穴住居の南東側で確認され、38号竪穴住居に切られる。大部分が調査区外へ広がる。平面形は方形を呈すとみられ、調査区内での規模は約4.2m×約0.7m+aを測る。また、検出面からの深さは最大約20cmである。調査区内では壁周溝が確認できたが、竈跡・主柱穴等は確認できなかった。

出土遺物 (第66図5)

第66図5は弥生土器甕である。断面台形の突帯を貼付け、突帯上面に斜め方向の刻み目を施す。



第65図 37・38号竪穴住居実測図 (1/60)

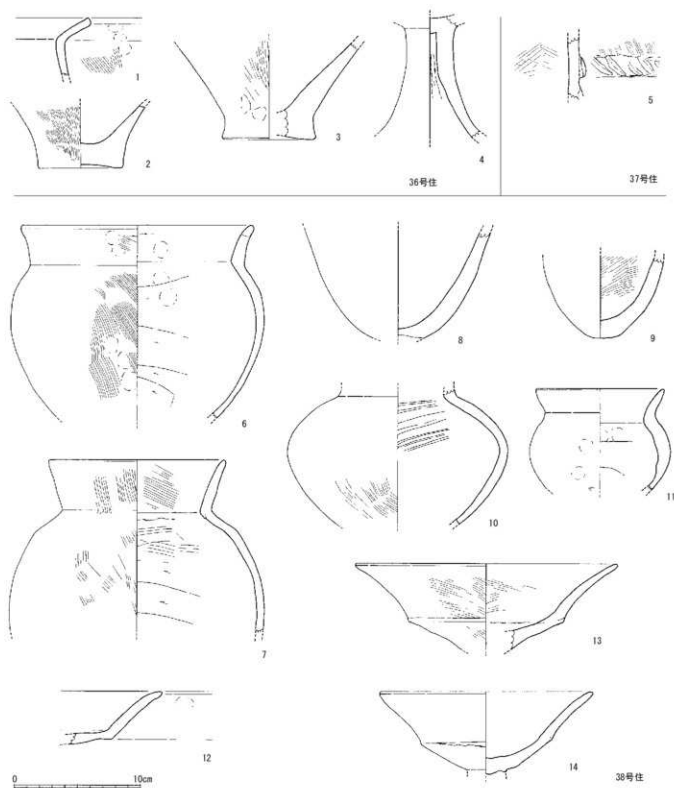
38号竪穴住居 (第65図 図版20)

37号竪穴住居の西側で確認され、この住居を切る。大部分が調査区外へ広がる。平面形は方形を呈すとみられ、西側をやや掘り過ぎたものの、規模は南壁約

3.3m+a、西壁約3.5m+aを測る。住居の南側にベッド状遺構がみられる。検出面からの深さは、ベッド状遺構までが最大約35cm、床面までが最大約70cmを測る。また、ベッド状遺構の南壁の一部、床面西壁・南壁際には壁周溝が掘り込まれる。床面にはビッドが数個見つかったが、主柱穴や竈跡、屋内土坑とみられるものは確認できなかった。

出土遺物 (第66図6~14 図版34)

第66図6は土師器甕である。口縁部は、あまり角度を持たず、外反しながら立ち上がり、端部は丸く仕上げる。胴部は中位よりやや上で最大径を測る。7は土師器甕である。中型のもので、口縁部は直線的に開きながら立ち上がり、端部をやや薄く仕上げる。胴部はほぼ中位付近で最大径を測る。8、9は土師器甕か。ともに底部は尖り気味で、器壁を厚く仕上げる。10、11は土師器甕である。10は胴部が中位付近よりやや上位で最大径を測る。11は口縁部が直線的に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げる。胴部は中位付近で最大径を測り、口縁部と胴部の径はほぼ同じである。12~14は土師器高環である。12、13はともに坯部下部の稜は明瞭で、口縁部は大



第66図 36～38号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

きく外反しなから立ち上がる。また、12は環部が浅く、13の環部は比較的深い。14は12、13に比べ、やや径が小さくなる。環部底面はやや丸味を帯びている。

2. 竪穴遺構

ここでは、柱穴になり得そうなピット・炉跡といった、竪穴住居と判断できる要素が欠けている遺構について、竪穴遺構として、記述する。

1号竪穴遺構 (第67図 図版20)

1号竪穴住居と同位置で確認され、この住居を切る。平面形は長方形を呈し、南西側に方形の張り出しを持つ。規模は約2.1m×約1.6m、張り出し部分は約0.9m×約0.4m、検出面からの深さは最大約20cmを測る。

遺物は、土師器壺・高環が出土しているが、1号竪穴住居のものが混入している可能性がある。

出土遺物 (第68図 1・2)

1は土師器壺である。小型のもので、口縁部を僅かに外反させ、端部は尖り気味に仕上げている。2は土師器高環である。脚部は接合部から大きく開くタイプである。

2号竪穴遺構 (第67図 図版20)

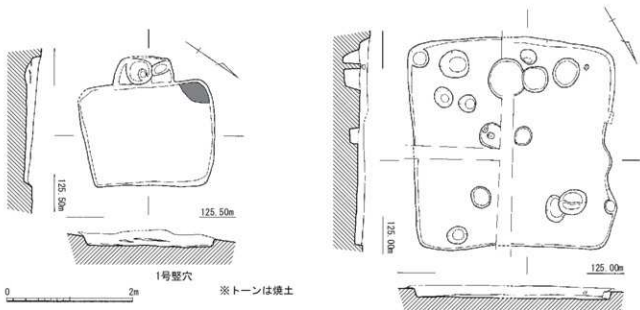
28号竪穴住居の北西側で確認された。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は約3.0m×約3.4m、検出面からの深さは約15～20cmを測る。竪穴内にはピットが多数見られたものの、確実に主柱穴となるようなものではなく、炉跡・壁周溝・屋内土坑も確認されなかったことから、竪穴遺構とした。

出土遺物 (第68図 3)

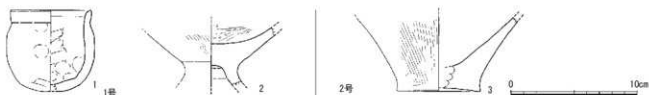
3は弥生土器甕の底部である。底面はやや上げ底である。

3号竪穴遺構 (第69図 図版21)

10号竪穴住居の北側で確認され、11号竪穴住居を切り、10、23号竪穴住居に切られる。大部分が他の遺構に切られているもの、平面形は方形を呈すとみられる。規模は北東壁が約3.6m、北西壁が約1.9m、検出面か



第67図 1・2号竪穴遺構実測図 (1/60)



第68図 1・2号竪穴遺構出土遺物実測図 (1/3)

らの深さは約 25 cmを測る。

遺物は、弥生土器類などが出土しているが図示可能なものはなかった。

3. 溝状遺構

調査区南東側において、近世のものと思われる溝状遺構が数条確認された。これらの遺構の中には拳大の礫が敷かれているものがあり、後述する 22号土坑のように暗渠と思われるようなものが存在することから、水路として利用された可能性がある。また、ここで記述する以外にも、溝状の落ち込みが見られたが、溝として断定するには至らなかったものがある。

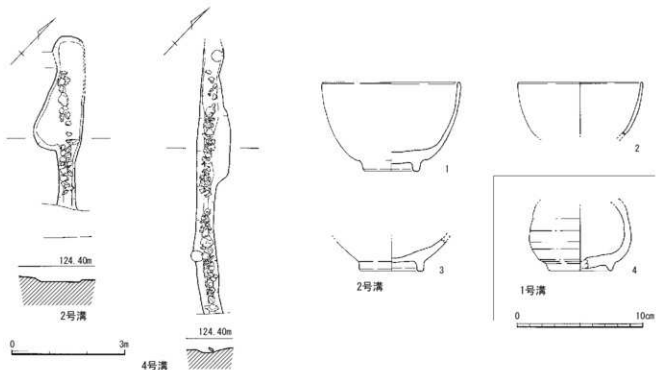
ここでは確認された溝状遺構のうち、礫が敷き詰められていた 2・4号溝状遺構について、個別に図示した。

1号溝状遺構

調査区をほぼ東西方向に貫く溝である。調査区内での長さ約 26.5 m、幅は約 1 m、深さは 20～30 cmを測る。底面の調査区内でのレベル差は約 75 cmである。3次調査の A区で確認されている落ち込みと繋がるものと思われる。

出土遺物 (第 70 図)

第 70 図 4 は磁器の小壺と思われる。内面は一部露筋する。



第 69 図 3号壁穴遺構実測図 (1/60)

第 70 図 溝状遺構実測図 (1/100) 及び溝状遺構出土遺物実測図 (1/3)

2号溝状遺構 (第70図 図版21)

調査区東側で確認された。南東側は1号溝と接続する。長さ4.5m、幅は0.4～1.3m、深さは10～15cmを測る。溝底面には拳大の川原石が敷き詰められていた。

出土遺物 (第70図)

第70図1・2は磁器碗である。1は口縁部へ向かって、直立気味に立ち上がる。3は陶器碗である。見込みには施釉した際にできたとみられる気泡がある。

3号溝状遺構

2号溝の北東側約1.5mで確認された。2号溝とほぼ平行し、南東側で1号溝と接続する。長さは約8.6m、幅は約0.8m、深さは約10cmを測る。

4号溝状遺構 (第70図 図版21)

2・3号溝と平行し、3号溝の北東側約2.5mで確認された。南東側で1号溝と接続する。検出部分で長さは約7.1mであるが、北西側は削平を受けているとみられる。幅は約45～90cm、深さは約5～20cmを測る。

5号溝状遺構

調査区南西側で1号溝の北側で確認された。長さは約4m、幅は0.4～0.8m、深さは約6cmを測る。北西側は削平を受けているが、2号溝と直交して繋がると考えられる。

6号溝状遺構

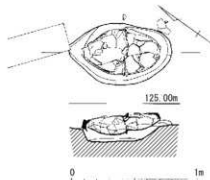
調査区の南端付近で確認された。長さは約6.6mを測り、東よりややカーブして、1号溝と繋がる。この他、一部杖状に分岐する部分も見られる。幅は約20～90cm、深さ5～15cmを測る。遺物は瓦器片が出土したが、図示可能なものはなかった。

4. 墓

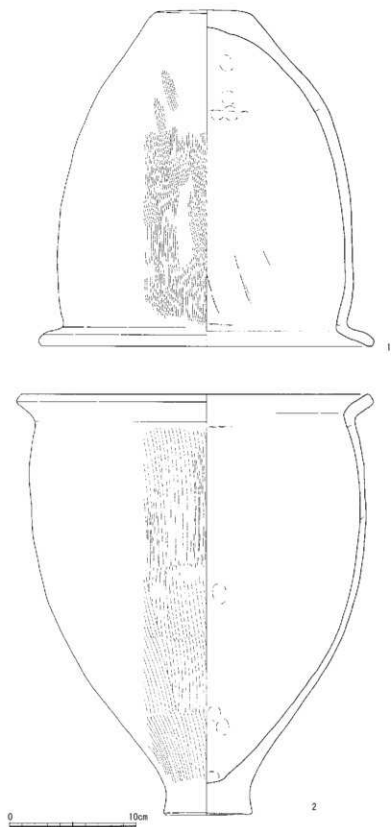
1号甕棺墓 (第71・72図 図版22・35)

18号竪穴住居付近で確認された小児用甕棺墓である。上半は削平を受けており、墓坑は下半分程度の残存と思われる。墓坑は楕円形を呈し、検出面での規模は、長軸約0.82m、短軸0.5m、深さ約20cmを測る。主軸方向はN-36°-Wを取る。甕棺は墓坑が削平を受けた際に、上から押し潰されように破壊されていたが、下部は原位置を保っているとみられる。甕棺の埋置角度は約10°で、わずかながら南東から北西に向かって傾斜しており、頭部は南東側に置きとみられる。当然、棺内には土砂が流れ込んでおり、人骨や副葬品等は確認されなかった。

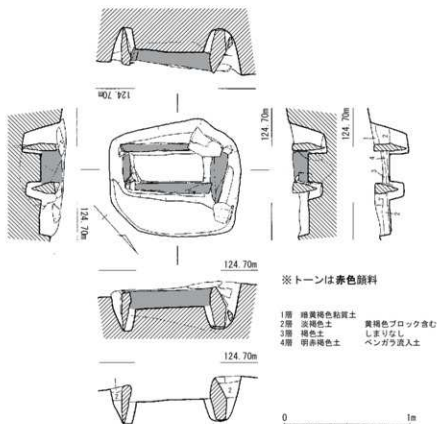
第72図は甕棺墓に使用された甕棺である。1は上甕である。底部はわずかにレンズ状を呈する。胴部は直立気味に立ち上がり、頸部付近は内湾する。口縁部は外に開き、端部をやや肥厚させる。2は下甕である。口縁部は上甕に比べて、開きは少ない。胴部は器壁を薄く仕上げ、上甕同様に頸部付近で内湾させる。底部はわずかに上げ底で外面は柱状に立ち上がる。



第71図 1号甕棺墓実測図 (1/30)



第 72 图 1号甗栳实测图 (1/3)



第73図 1号石棺墓実測図 (1/30)

1号石棺墓 (第73図 図版22・23)

36号竪穴住居の北側で確認され、主軸方向はN-49°-Wにとる、箱式石棺墓である。墓坑は歪な方形を呈し、北東側は2段で掘り込まれている。検出面での規模は長軸1.05m、短軸0.92mを測る。

蓋石はほとんど残ってなく、西隅に確認された蓋石の一部とみられる棺材も原位置を保っていないと考えられる。

石棺の規模は床面の内法で長軸0.63m、短軸0.27m、南東側小口幅0.25m、北西側小口幅0.27mを測る。床面には敷石や石枕等は確認されず、地山を床としている。

床面は北西側から南東側に向かって、約3cm傾斜している。この床面の傾斜と小口幅から、北西側に頭位を置くと考えられる。

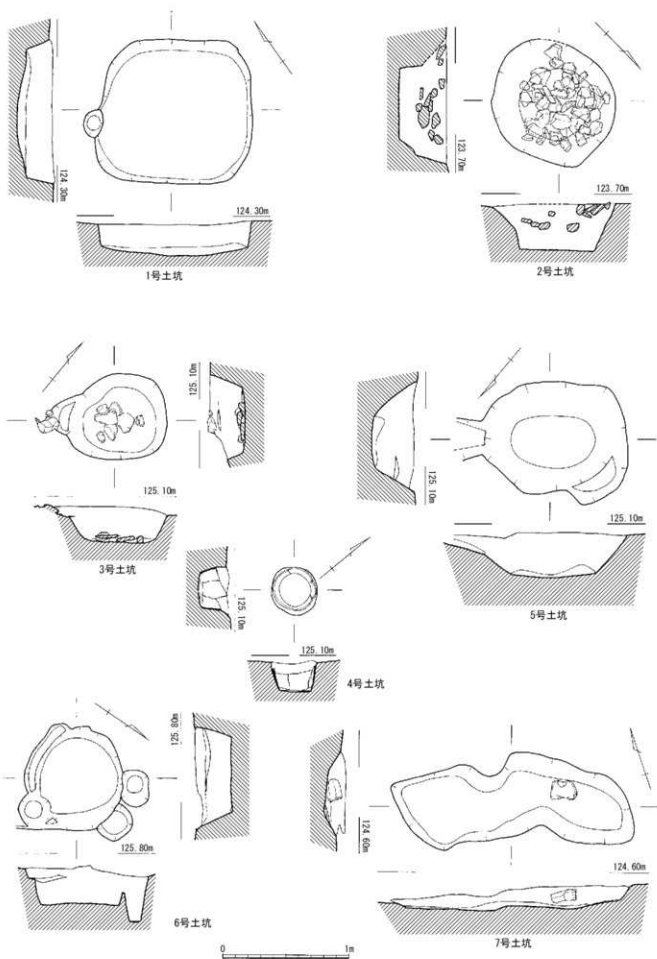
棺身は両長側辺、小口側との板石を1枚ずつ使用され、内部には赤色顔料が塗布されていた。また、頭位側の板石が土圧のためか、若干内側に傾斜していた。

棺内には、棺蓋裏の赤色顔料が崩落したもの(4層)、近年の流入土(3層)が入っており、人骨・遺物等は確認されなかった。

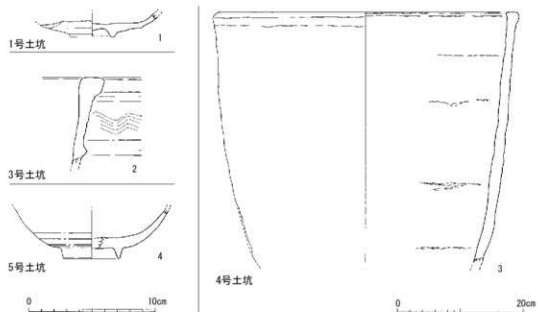
5. 土坑

1号土坑 (第74図 図版23)

調査区の南側で確認され、西側の一部をビットに切られる。平面形は隅丸方形を呈し、底面はやや舟底状となる。壁はほぼ直立する。規模は長軸約1.6m、短軸約1.5m、検出面からの深さは約40cmを測る。



第74图 土坑实测图(1) (1/30)



第75図 1・3～5号土坑出土遺物実測図(1～3:1/3, 4:1/6)

出土遺物 (第75図)

1は陶器碗である。高台付近は露胎している。

2号土坑 (第74図 図版23)

調査区の東端で確認された。平面形はやや歪な円形を呈し、底面は平坦となる。壁は一段を持ちながら、斜めに立ち上がる。規模は径約1.3m、検出面からの深さは約50cmを測る。土坑内には、床から20～30cm浮いた状態で大量の礫が確認された。

遺物は出土しなかった。

3号土坑 (第74図 図版24)

調査区の南西側の段落ち際で確認された。平面形は歪な円形を呈し、南西側が半円形に突出するが、他の遺構との切り合いと思われる。底面は平底で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は突出部分を含めた長軸が約1.3m、短軸約0.9m、遺構面からの深さは約40cmを測る。また、床面では板石や礫が確認された。

出土遺物 (第75図)

2は陶器鉢の口縁部か。外面には波状文が施文され、内面はナデが見られる。

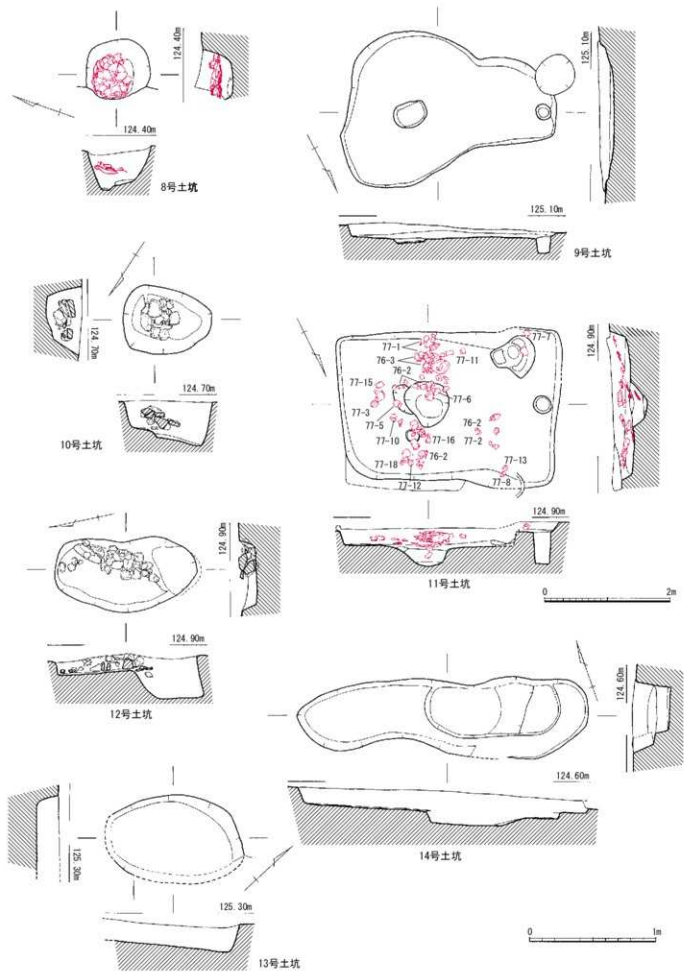
4号土坑 (第74図 図版24)

3号土坑の北西側で確認された。平面形は円形を呈し、底面は平坦になる。内部には急角度で立ち上がる壁に沿って、裏が散め込まれている。規模は径約1.0m、検出面からの深さは約30cmを測る。使槽か。

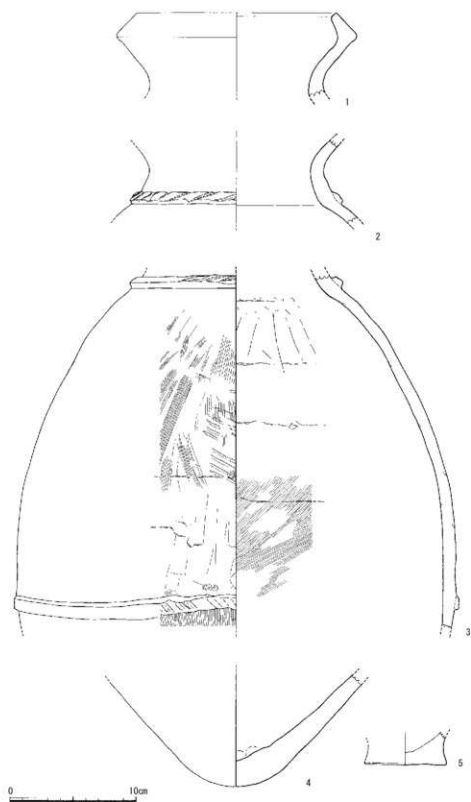
遺物はこの裏のほかに陶器裏の破片が出土しており、同一個体の可能性もある。

出土遺物 (第75図)

3は陶器裏である。口縁端部はやや肥厚させ、端部を平坦に仕上げている。内面には接合痕が残る。



第76図 土坑実測図(2) (1/30、11号土坑のみ1/60)



第 77 图 8 号土坑出土遗物实测图 (1/3)

5号土坑 (第74図 図版24)

4号土坑の北西に隣接して確認された。土坑の北東側は削平を受け、西側はピット状の遺構との切り合いと思われる張り出しがあるが、平面形は楕円形を呈する。底面は舟底状となり、壁の立ち上がりは緩やかである。規模は長軸約1.5 m、短軸約1.2 m、検出面からの深さは約45 cmを測る。

出土遺物 (第75図)

第75図4は陶器碗である。高台先端は鋭く仕上げらる。

6号土坑 (第74図)

5号土坑の北東側で確認された。他のピットと切り合いはあるが、平面形はほぼ円形を呈する。底面は平坦で、壁は比較的急角度で立ち上がる。規模は径約1.1 m、検出面からの深さは約40 cmである。

遺物は出土しなかった。

7号土坑 (第74図)

4号土坑の南東側で確認された。平面形は不定形で、底面には凹凸が見られる。壁の立ち上がりは緩やかである。規模は東西軸約1.2 m、南北軸約0.4 m、検出面からの深さは約15 cmを測る。

遺物は弥生土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

8号土坑 (第76図 図版25)

調査区の北側で確認され、31・32号竪穴住居を切る。西側を掘り過ぎてしまったものの、平面形は円形を呈する。底面はやや傾斜があり、段落ちが見られる。壁は緩やかに内湾して立ち上がる。規模は径約1.4 mで、検出面からの深さは1段目が約40 cm、2段目が約50 cmを測る。

遺物は底面より約10 cm浮いた状態で、ほぼ一個体分の弥生土器壺や甕が出土している。

出土遺物 (第77図 図版34・35)

1～4は弥生土器壺である。整理作業段階での接合や図上復元ができなかったが、恐らく同一個体であることから、まとめてみていく。口縁部は二重口縁である。口縁部の屈曲は緩く、上部口縁は直線的に短く立ち上がる。頸部は下部に斜め方向の刻み目を施した断面M字形の突帯を貼り付ける。胴部は中位付近からやや下部までが最大径を測り、下部に断面M字形の突帯を貼り付ける。この突帯にも頸部同様の刻み目が施される。底部は尖り気味で、器壁は厚く仕上げる。

5は弥生土器甕の底部で、底面は平底である。

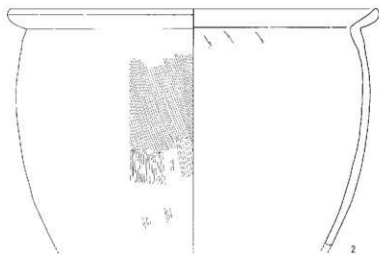
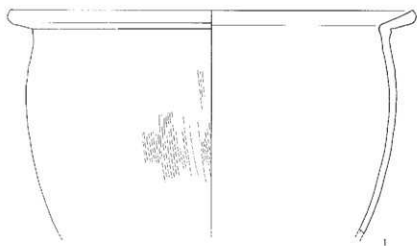
9号土坑 (第76図 図版10)

23号竪穴住居の北側で確認された。平面形は不定形で、底面はほぼ平坦である。壁の立ち上がりは緩やかである。規模は東西軸約2.2 m、南北軸約1.4 m、検出面からの深さは約15 cmを測る。

遺物は土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

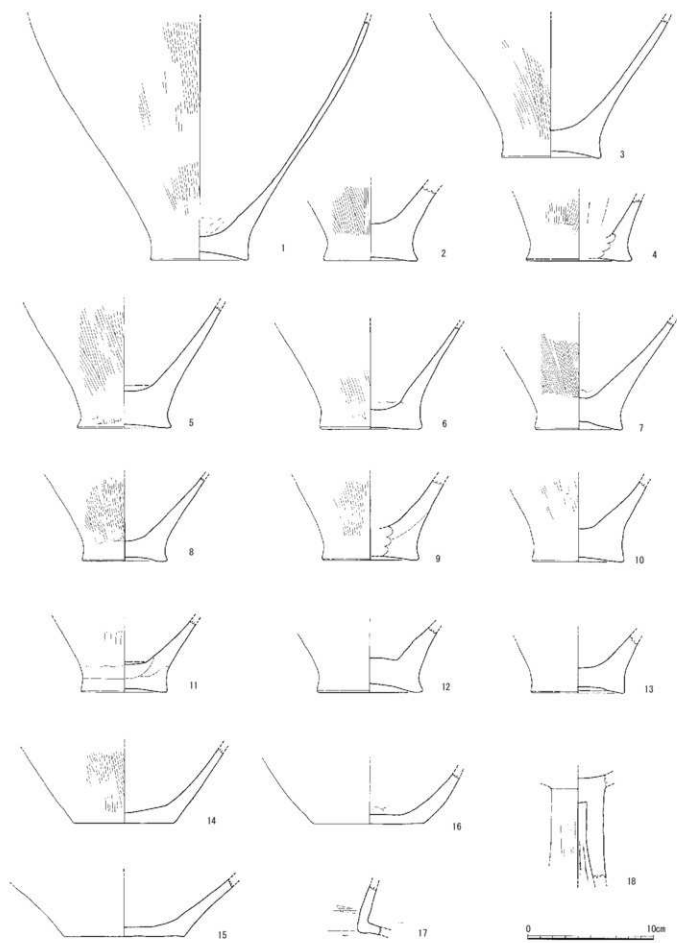
10号土坑 (第76図 図版26)

32号竪穴住居の南東側で確認された。平面形はほぼ楕円形を呈し、底面は緩やかな段落ちが見られる。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約0.9 m、短軸約0.7 m、検出面からの深さは1段目が約30 cm、2段目が約50 cmを測る。また、床から若干浮いた状態で多くの礫が確認された。



0 10cm

第78图 11号土坑出土遗物实测图(1)(1/3)



第 79 图 11 号土坑出土文物实测图 (2) (1/3)

遺物は弥生土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

11号土坑（第76図 図版26・27）

10号竪穴住居とはほぼ同位置で確認され、この住居を切り、9号竪穴住居に切られる。平面形は長方形を呈し、底面は平坦である。中央付近には不定形の落ち込みがある。また、西壁から約70cm付近では段落ちが見られる。ちょうどサブトレンチを設定していたため、この部分に本来の壁があったのか、段落ちがあったのかは定かではない。規模は現状で確認できた部分において、長軸約3.5m、短軸約2.4mを測り、検出面からの深さは1段目が約15cm、2段目が約30cmを測る。

遺物は、弥生土器のほか、磨製石斧、剥片などが数多く出土している。

出土遺物（第78・79図 図版35）

第78図1～3は弥生土器甕である。1、2は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部を肥厚させる。胴部はやや張りを持ち、比較的上位で最大径を測る。3は口縁部が直線的に立ち上がり、端部を跳ね上げる。胴部の張りは1、2に比べて小さい。

第79図1～14、16は弥生土器甕の底部である。1～13はいずれも上げ底である。前図の1～3と同一個体になる可能性のものもあると思われるが、整理の段階で復元できなかった。これに対し、14・16は平底で底部の器壁は薄い。15は弥生土器壺の底部である。底面は平底である。17は弥生土器甕である。口縁部は直線的に開いて立ち上がる。18は弥生土器高坏脚部である。坏部との接合部より直線的に胴部へ向かう。

12号土坑（第76図 図版27）

28号竪穴住居の北側で確認された。平面形は中程で少し屈曲する楕円形を呈す。底面は段落ちが見られ、平坦である。壁は南壁でオーバーハングして立ち上がり、北壁はほぼ直立する。また、東西壁は緩やかに立ち上がる。規模は南北軸約1.5m、東西軸約0.8m、検出面からの深さは1段目までが約20cm、2段目までは約40cmを測る。1段目からは礎が多く出土している。

遺物は土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

13号土坑（第76図）

24号竪穴住居の東側で確認され、この住居に切られる。一部、削平を受けているが、平面形はほぼ楕円形を呈す。床面は平坦であるが、南西から北東に向かって傾斜する。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約1.4m、短軸約0.9mと推定でき、検出面からの深さは最大約20cmを測る。

遺物は土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

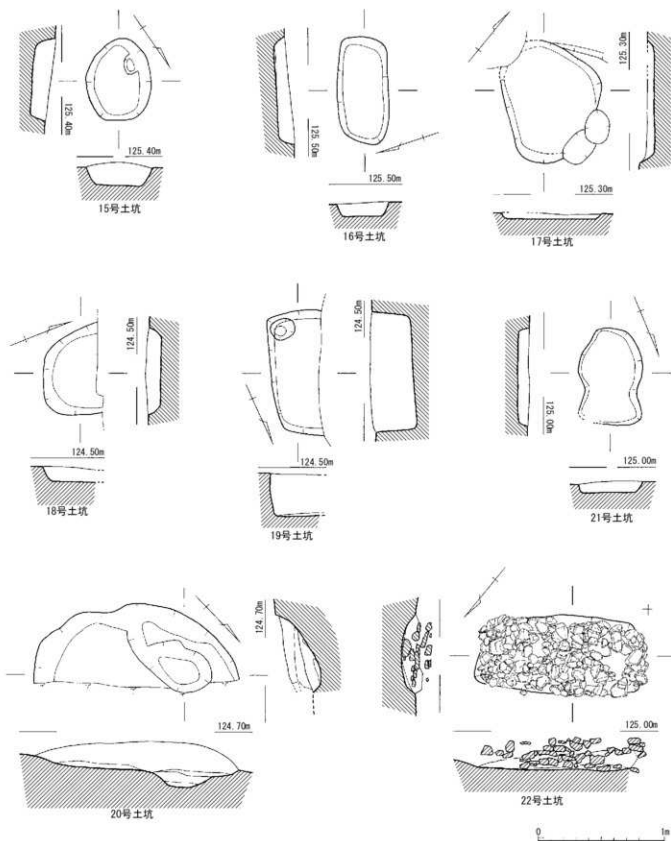
14号土坑（第76図）

36号竪穴住居の北側で確認され、この住居および1号石棺墓に切られる。平面形は長楕円形を呈し、床面は平坦で、数段の段落ちが見られる。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約3.1m、短軸約0.8m、検出面からの深さは、浅いほうから15cm、20cm、35cmを測る。

遺物は出土しなかった。

15号土坑（第80図）

25号竪穴住居の東側で確認された。平面形は楕円形を呈し、底面は平坦である。壁はやや内湾しながら立ち



第 80 图 土坑实测图 (3) (1/30)

上がる。規模は長軸約 0.9 m、短軸約 0.7 m、検出面からの深さは約 20 cmを測る。

遺物は弥生土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

16号土坑 (第80図)

36号竪穴住居の東側で確認された。平面形は隅丸方形を呈し、底面は平坦である。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約 1.1 m、短軸約 0.6 m、検出面からの深さは約 15 cmを測る。

遺物は弥生土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

17号土坑 (第80図)

10号土坑の東側で確認され、この土坑やピットに切られる。平面形は不定形を呈し、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。規模は北西-南東軸約 1.3 m、北東-南西軸約 1.0 m、検出面からの深さは約 10 cmを測る。

遺物は弥生土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

18号土坑 (第80図)

35号竪穴住居の南側で確認され、この住居に切られる。平面形は現状で半楕円形を呈し、底面は平坦である。壁はやや内湾気味に緩やかに立ち上がる。規模は長軸約 0.6 m + a、短軸約 0.9 m、検出面からの深さは約 10 cmを測る。

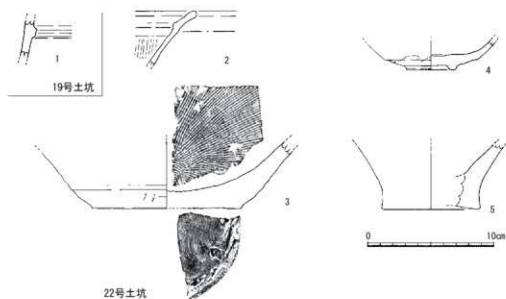
遺物は土師器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

19号土坑 (第80図)

32号竪穴住居の東側で確認され、この住居に切られる。半分ほど削平を受けているが、平面形は隅丸方形を呈すとみられ、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は南北軸約 1.3 m、東西軸約 0.5 m、検出面からの深さは約 45 cmを測る。

出土遺物 (第81図)

第81図1は弥生土器甕である。外面には断面「M」字形の突帯が貼付されており、口縁部に近い部分と思われる。外面には丹が塗布されている。



第81図 19・22号土坑出土遺物実測図 (1/3)

20号土坑 (第80図 図版11)

21号竪穴住居の北側で確認され、21号竪穴住居を切る。北東側がほぼ半分削平を受けているが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。底面はやや傾斜しており、北側にはビット状の段落ちが見られる。壁の立ち上がりは非常に緩やかである。規模は長軸約2.2m、短軸約0.9m、深さは約25cm、50cmを測る。

遺物は土師器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

21号土坑 (第80図)

8号竪穴住居の東側で確認され、この住居に切られる。平面形は不定形を呈し、底面はほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。規模は南北軸約1.0m、東西軸約0.7m、検出面からの深さは約10cmを測る。

遺物は土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

22号土坑 (第80図 図版28)

5号竪穴住居の東側で確認された。平面形は長方形を呈し、規模は長軸約1.7m、短軸約0.8m、検出面からの深さは約15cmである。土坑内は、拳大の川原石が全体に充填されており、暗渠の可能性もある。

出土遺物 (第81図)

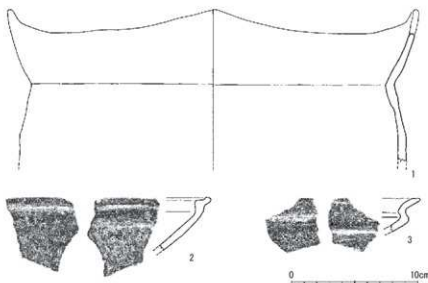
第81図2・3は陶器播鉢である。摺目は細かい。口縁部と底部形態から17世紀後半頃のものと思われる。4は陶器碗である。底部付近が一部剥胎している。5は弥生土器甕である。底部はやや上げ底である。この土坑の西側に存在する2号竪穴住居から混入した可能性がある。

6. その他の遺物 (第82～91図)

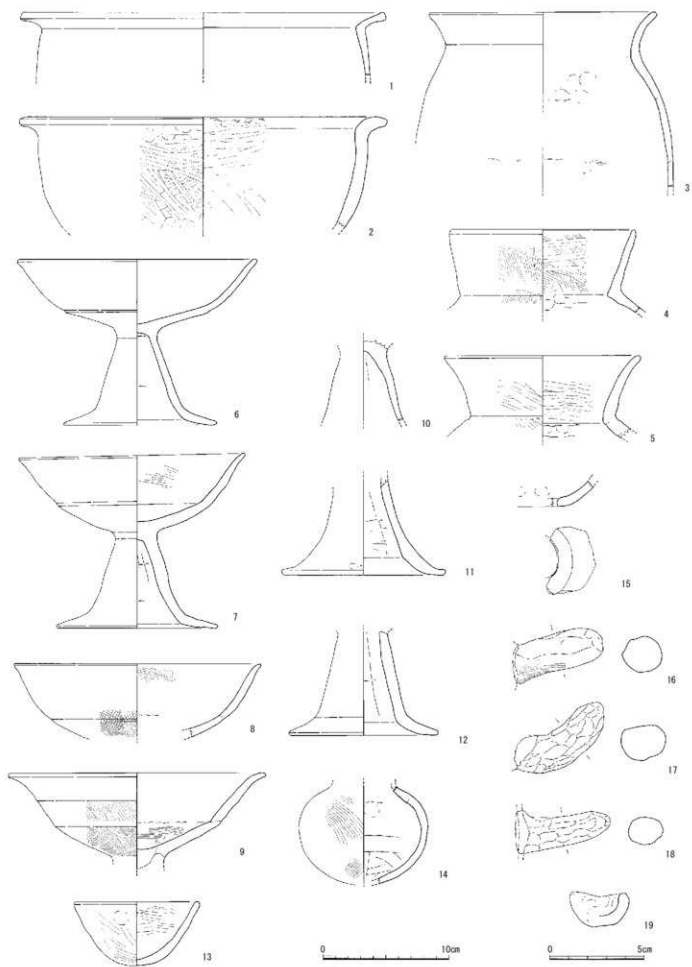
ここではビット出土遺物やグリッド一括遺物及び各遺構出土の石器・土製品・鉄製品について説明を行う。(出土遺構は観察表を参照されたい。)

縄文土器 (第82図 図版35)

1は三万田式期の深鉢と思われる。器面には条痕がみられる。2・3は浅鉢である。晩期初頭～前半頃のものと思われる。



第82図 その他の出土土器実測図 (1) (1/3)



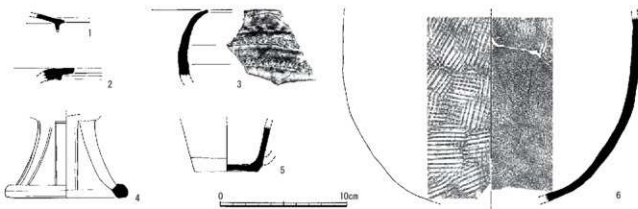
第83図 その他の出土土器実測図(2) (1~18: 1/3, 19: 1/2)

弥生土器・土師器 (第83図 図版35)

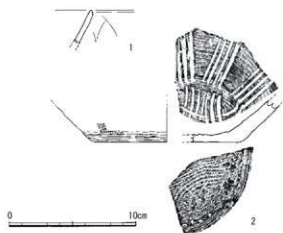
1は弥生土器甕である。口縁部は直線的に大きく開く。2は土師器甕である。口縁部は短く外反させ、厚ぼったく仕上げる。胴部は張らない。3は土師器甕である。口縁部は緩やかに外反しながら開き、端部を丸く仕上げる。胴部は中位付近で最大径を測りそうである。4は土師器壺である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸く仕上げる。5は土師器甕である。口縁部は緩やかに外反しながら開き、端部を丸く仕上げる。頸部との境付近でやや厚みを帯びる。

6～12は土師器高坏である。6～8はいずれも坏部下部に稜がみられ、口縁部は比較的緩やかに開きながら立ち上がり、端部をやや外反させる。6、7の脚部は接合部から開きながら坏部へ向かい、接地面より1cmほど上で屈曲する。7は脚部の中位付近がやや膨らむ。9は坏部下部の稜が6～8より明瞭に見られ、やや角張った感がある。口縁部は大きく開きながら立ち上がり、端部を外反させる。10は脚部中位付近がやや膨らむ。11は接合部から坏部へ開き、接地面より1cmほど上で屈曲する。屈曲部より下位は器壁に厚みがあり、端部をやや角張らせて仕上げる。12は11に比べ、脚部の開きはやや小さい。屈曲部の位置や坏部は形態は11とほぼ同様で、端部を丸く仕上げる。

13は土師器鉢である。底部はやや丸味を帯び、口縁部は直線的に外に開き、端部を丸く仕上げる。14は土師器の小型壺である。胴部は中位付近で最大径を測る。



第84図 その他の出土土器実測図(3)(1/3)



第85図 その他の出土土器実測図(4)(1/3)

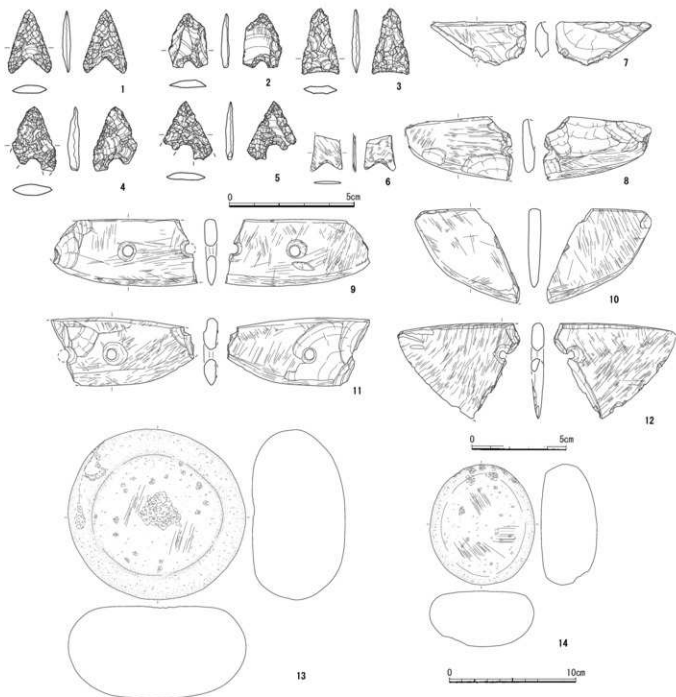
15は土師器甕の底部である。複数の蒸気孔を持つものと思われる。16～18は土師器甕の把手である。何れも傾きは確実ではないが、16、18は直線的に伸びるもので、17はやや上方に屈曲する。

19は手捏土器である。器壁はほぼ均等な厚さで仕上げる。

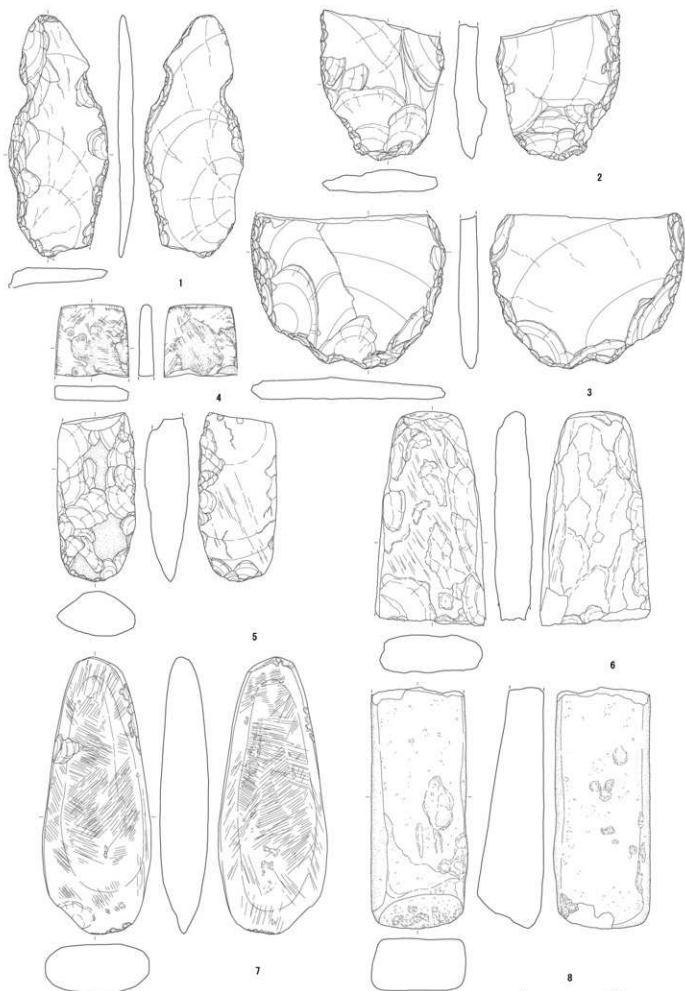
須惠器 (第84図 図版35)

1は須惠器蓋である。口縁部は端部付近でやや肥厚させ、端部を丸く仕上げる。受け部は短い。2は蓋と思われる。外面には下向きの突帯を持ち、口縁部は端部を角張らせて仕上げる。

3は長頸甕の口縁部である。端部は薄く、丸味を帯びて仕上げる。朝倉産か。4はの高环脚部である。环部と



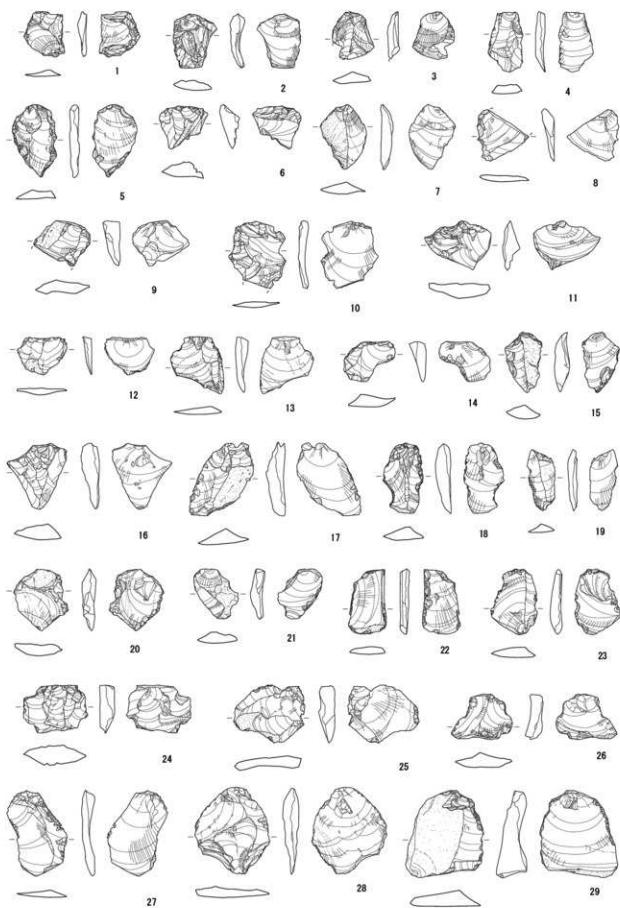
第86図 出土石器実測図 (1) (1～6:2/3, 7～12:1/2, 13・14:1/3)



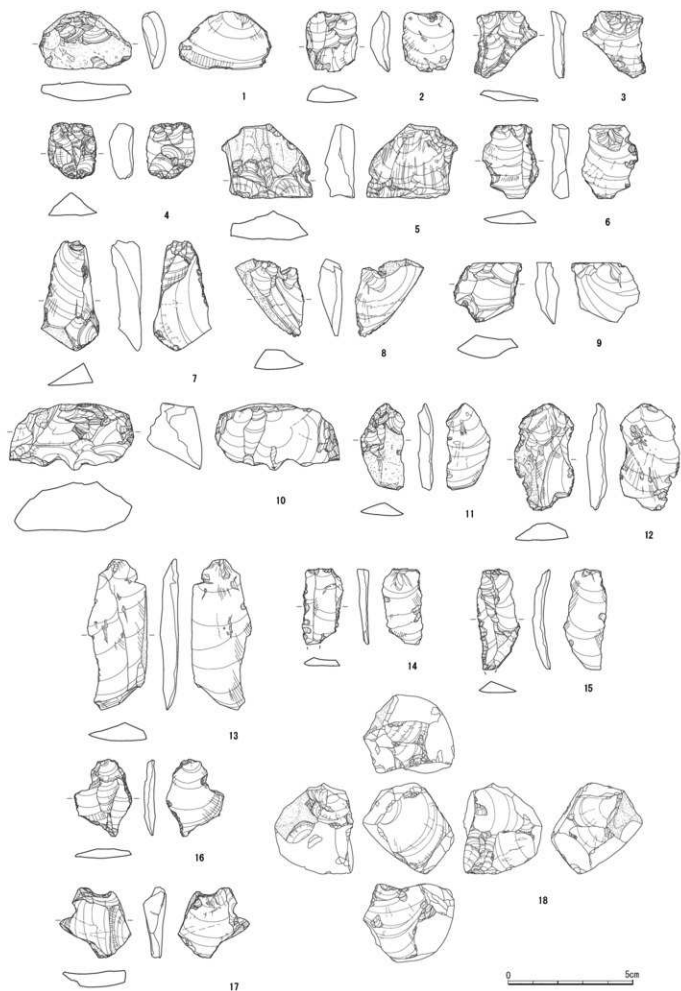
第 87 图 出土石器实测图 (2) (1/2)



第 88 図 出土石器実測図 (3) (1 ~ 9 : 1/2、10 : 2/3)



第 89 图 出土石器实测图 (4) (2/3)



第90图 出土石器实测图(5)(2/3)

の接合部から脚端部にいたる長方形透かしを四方に穿つと思われる。5は鉢である。底部付近に把手の痕跡が見られるが、把手数は1個か2個かは不明である。6は壺である。中心軸や傾きは不確実ではあるが、胴部はあまり膨らみを持たず、直立する。

陶磁器 (第85図)

1は龍泉窯系の青磁碗である。外面には蓮弁文がみられる。2は瓦器雑鉢である。内面はハケで仕上げた後、4本単位の摺り目が施される。

石器 (第86～90図 図版36・37)

第86図1、3～5は打製石鏃で、1、3は安山岩製、4・5は黒曜石製である。2は黒曜石の縦長剥片を利用した剥片鏃である。6は結晶片岩製の磨製石鏃である。切先・基部ともに欠損している。7～12は石砲丁である。石材は7～9が輝緑凝灰岩、10～12が粘板岩である。13は凹石、14は磨石である。ともによく使い込まれている。

第87図、1～3、5は打製石斧である。1は挟りが入っているが、大型剥片の可能性もある。4、7は磨製石斧である。6は扁平片刃石斧である。

第88図1は粘板岩製の石剣である。基部を欠損しているが、丁寧な仕上げである。2～9は砥石である。2が粘板岩製で、それ以外は珉岩製である。10は腰岳系黒曜石製のスクレイパーである。

第89図及び第90図1～17は二次加工剥片および使用痕剥片である。石材は第90図9が珉岩、10が玉髓であるのを除き、腰岳系黒曜石である。第90図13～15は鈴桶技法によるものである。また16・17は石錘として利用したと考えられる突起部がみられる。第90図18は姫島産黒曜石製の石核である。

これらの剥片は、風化の度合いや鈴桶技法を用いている点などから、前述した縄文土器と同時期の縄文時代後期の所産とみれよう。また、刃潰れしたものが多く、かなり激しく使い込んだものと思われる上、前述の鈴桶技法を用いたものはごく一部で、多くは特定の技法もなく、ただ剃いたというものが多い。

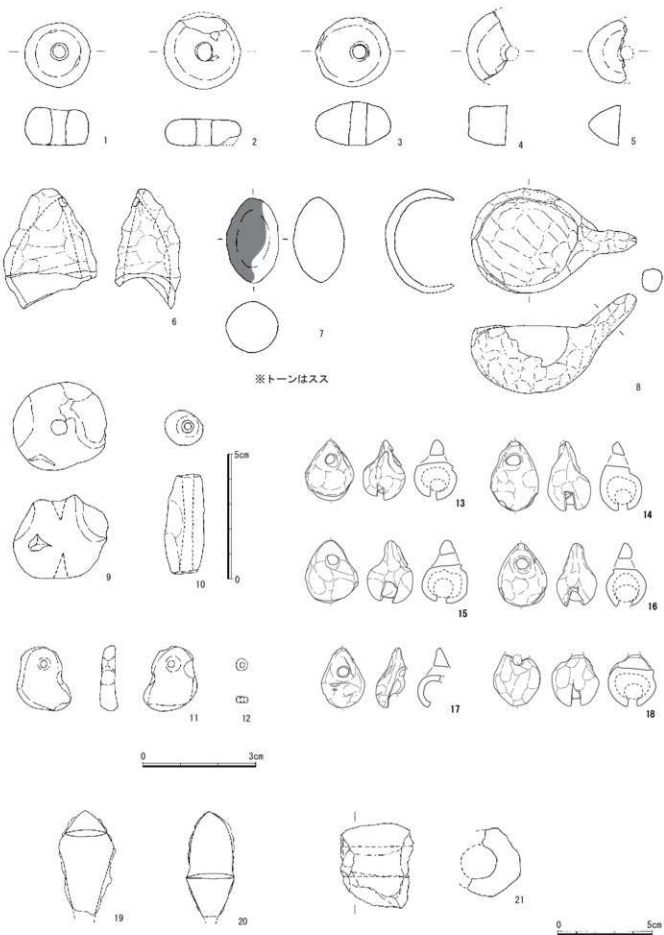
こうした剥片類については、出土位置や層位等に注意して、取り上げを行っていなかったことから、堅穴住居に伴うものかどうかの判断はできなかったが、流れ込みによる可能性が高いと思われる。

土製品・石製品・鉄製品 (第91図 図版36)

1～5は紡錘車である。3と5は断面形は楕円形を呈する。6は袋状を呈する土製品であるが、用途は不明である。全面に指押さえやナデの痕があり、上部に1ヶ所穿孔が施される。7は投弾である。形状は楕円形を呈し、黒斑がみられる。8は土甕である。胴部はほぼ半球形になっており、短い把手が付く。9は土玉である。歪な球形を呈し、穿孔も貫通していないことから、製作途中とみられる。10は土錘である。11は硬玉製勾玉の再加工品と考えられる。11は滑石製白玉である。

13～18は土鈴である。いずれも黄橙色系の色調を呈する。13、14、17は同一のビットからの出土であり、調査中に確認ができなかったものの、近世の遺構が存在する可能性がある。

19・20は鉄鏃で、鏃身部のみが残存する。ともに柳葉形を呈するが、ふくらの長さが異なる。21は輪刃口である。半分ほどが残存している。



第91図 出土土製品・石製品・鉄製品実測図 (1～8、13～21:1/2、9・11・12:1/1、10:2/3)

IV まとめ

以上、金田遺跡の2次調査について報告してきたが、この調査では弥生時代中期から古墳時代後期までを中心に、40軒の竪穴住居や石棺墓・甕棺墓・土坑などが確認された。また、1、3次調査区でも44軒（内、本調査区との重複7軒）の竪穴住居が確認されている。最後にこれまでの調査成果と合わせて、時期や集落の様相について若干の検討を行ってみたい。

(1) 弥生時代の遺構と遺物について

弥生時代の竪穴住居は2、5～7、11～19、23、24、26～28、29、32（ABC）、36、37号の24軒である。まず、竪穴住居の時期⁹⁾を整理し、その後、本遺跡における集落の動向を考えてみたい。

遺構の時期について

確認された竪穴住居の中で、古い時期のものは平面形が円形を呈する5、6、11～14、32号竪穴住居で中期に属する。まず、11～14号竪穴住居は11、12～14号の順で切り合い関係にあり、さらに11号土坑が11号竪穴住居を切る。まず、12～14号竪穴住居は数回の建替えが行われたであろうが、出土した蓋（第26図6・7）の径が30～40cmと大きくなっていることから、少なくともこれらは中期後半～末の中期に収まるものと考えられる。そして、11号土坑は甕の形態などから中期中頃～後半のものともみられ、よってこれに切られる11号竪穴住居は中期中頃のものとも見ていざうろ。

次に5号竪穴住居については遺物量が少なく、時期の断定が難しいが、11号竪穴住居と同様の規模で主柱穴も同数であることから、同時期の中期中頃と考えたい。よって、これを切る6号竪穴住居は続く中期後半以降で、高環（第8図1）から中期後半～末になると考えられる。32号竪穴住居は中期後半頃の甕が出土しているが、少なくとも2回以上の建替えが行われており、どの竪穴住居に対応するか確認できなかったが、最も新しい32号C竪穴住居の規模が径約11～12mと大きくなっていることから中期末にかけて営まれたと思われる。

また、方形竪穴住居の28号竪穴住居の屋内土坑からは中期後半頃の甕が出土し、さらに27号竪穴住居からは同時期とみられる甕底部が出土しているが、切り合い関係から27号、28号の順となる。

続いて36号竪穴住居は出土した甕底部の形態から、中期末～後期初頭頃とみられ、これを切る26号竪穴住居が続く。さらに7号竪穴住居については、壺の形態から後期前半ものと考えられる。

上記以外の竪穴住居の多くは、後期後半以降のものである。まず、15～18号竪穴住居であるが、これらの竪穴住居からは底部がレンズ状を呈す甕や胴部が大きく横に張る長頸壺（第31図4）などが出土しており、後半～終末のものと考えられ、切り合い関係から17号、16号、15号・18号の順に営まれたとみられる。さらにタタキを施した長胴甕が出土した23号竪穴住居や、口縁部が外反気味に立ち上がる壺（第35図3）、底部が球状を呈す小型甕（第35図4）が出土した19号竪穴住居なども終末期頃のものであり、切り合い関係から23号、24号、19号の順となる。また、8号土坑は出土した複合口縁壺から後期後半頃とみられる。

このほか、2・29号竪穴住居からは中期の甕、37号竪穴住居からは突帯を付けた後期の壺胴部が出土しているが、いずれの竪穴住居も出土量が少ない上、29号竪穴住居に至っては切り合い関係もないことから、詳細な時期については断定を控えたい。

甕棺墓については、胴部の張りや口縁部・底部の形態から、橋口氏の編年のKⅢb式並行¹⁰⁾、中期中頃～後半と考えられ、32号竪穴住居や11号土坑とほぼ同時期である。また、石棺墓は、副葬品等が出土しなかったことから、明確な時期の決定はできないが、36号竪穴住居を切っていることから、少なくとも後期前半以降のものと考えられる。

弥生時代集落の動向

以上の主な遺構の時期をみてきたが、次に1・3次調査区の調査成果と合わせ、本遺跡における弥生時代集落の動向をまとめてみたい。まず、中期中頃に5・11号竪穴住居、SH 204の3軒が作られることで、集落の営みが始まる。その後、中期後半以降には16軒の竪穴住居がみられるが、切り合い関係から同時期に存在した竪穴住居は5軒前後程度と推測され、後期前半にかけて軒数は減少していく。

続く後期前半から後半にかかる時期の竪穴住居はなく、後期後半～終末にかけての時期に10軒が営まれるが、同時期に存在した竪穴住居の数はやはり、切り合い関係から5軒前後であったとみられる。

以上、弥生時代の集落は中期中頃～後期前半、後期後半～終末と大きく2つの時期に分けることができ、集落の規模としては大きなものではなかったと考えられる。ただ、本遺跡の対岸に位置する小西遺跡でもこの時期の集落が存在することから⁹⁸、求来里川流域一帯でいくつかの集落が存在していたことが想定される。

(2) 古墳時代の遺構と遺物について

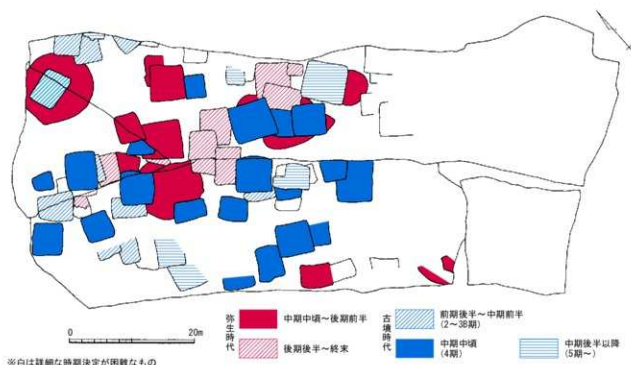
古墳時代の竪穴住居は1、3、4、8～10、20～22、25、30、31、33～35、38号である。以下、前節と同様、遺物の検討や竪穴住居の時期を整理し、本遺跡の古墳時代集落について、検討していく⁹⁹。

初期須恵器と朝鮮半島系土器について

9・10号竪穴住居とその周辺のグリッドから初期須恵器や朝鮮半島系土器が10数点出土しており、カマドの導入なども深く関係すると思われるので、以下、主なものについて、簡単ではあるがみていきたい。

まず、9号竪穴住居出土の遺物をみていく。第16図5・6の高杯蓋であるが、山形に突出するツマミや外面に施された櫛歯文は、同様の特徴が見られる大庭寺TC231・232号窯や陶邑ON231号窯のものと考えられる⁹⁹。次に、第16図7・8の壺について検討する。これらの壺は中村勝氏の分類によるB型波状文が施され、山形の突出部が低くなっている特徴から朝倉産と考えられ、時期はON46～TK208古段階とみられる⁹⁹。

続いて、10号竪穴住居の出土遺物についてみる。第22図1は口縁部形態から陶邑産や朝鮮半島系の可能性もあるが、断定は難しい。2は口縁部形態が福岡県・居屋敷窯跡の壺に類似しており、また、同様の山形突帯は愛媛県・



第92図 弥生～古墳時代の竪穴住居配置図 (1/600)

市場南縦窯跡の壺にも見られる。これらの山形突帯をもつ遺物が直接的に関係するかは判断しかねるが、いずれにしる TK208 以降の特徴と思われる⁹⁾。

続いて、上記の竪穴住居周辺の E 6・E 7・F 6・F 7 グリッド一括で取上げた遺物についてみる。第 84 図 3 は第 16 図 7・8 と同様に B 型波状文が施され、朝倉産とみられる。4 の高環は脚端部の形態から陶邑産と考えられる⁹⁾。5 の把手付碗は那珂川町松木遺跡や筑紫野市隈・西小田遺跡で類例がみられ、ここでは TK208 並行の縁と共伴している⁹⁾。

また、須恵器以外の土器をみてみる。10 号竪穴住居出土の第 21 図 2 の多孔式の甕は丁寧なタキで仕上げられ、胴部中に浅い沈線があり、第 20 図 14 の平底の鉢には格子タキが見られる。こうしたタキや沈線などの特徴からともに朝鮮半島系の軟質土器と考えられる¹⁰⁾。

以上、須恵器については多くが陶邑産や朝倉産とみられる。陶邑産のものには他の遺物に比べ時期の古い須恵器もみられるが、朝倉産の壺などは、基本的に陶邑編年 TK216～TK208、重藤氏編年 4 期の範疇に入ると思われる。またこれらと共伴する朝鮮半島系土器については軟質土器のみが存在し、陶質土器が存在しないことが注目されるが、このことについては後述する。

遺構の時期について

まず、前期の遺物が出土しているのが、31・33 号竪穴住居である。31 号竪穴住居は土師器裏 (第 57 図 2) 及び 3 次調査の SH255 で出土した土師器裏から、また 33 号竪穴住居は土師器器台 (第 61 図 1) から、いずれも 2 期のものとみられる。

次に中期に入ると、初頭から前半にかけて 2 軒の竪穴住居がみられる。35 号竪穴住居からは、3 A 期のものとみられる直口壺 (第 63 図 4) が出土している。38 号竪穴住居は高環の形態 (第 66 図 7) や壺の口縁形態 (第 66 図 13) から 3 B 期のものと考えられる。

続く中期前半から中頃の時期がカマドを造り付けた竪穴住居の出現期にあたる。前述の須恵器や朝鮮半島系土器の時期を参考に竪穴住居の時期を考えていく。

カマドをもった竪穴住居で最も古いのは、切り合い関係から 20 号竪穴住居とみられる。この竪穴住居からは、土師器の小型丸底壺 (第 37 図 4) や口縁部が直線外反して開く口縁部の壺 (第 37 図 6)、口縁端部を外反させた高環坏部 (第 37 図 8) などが出土しており、その特徴から 3 B～4 期前半頃のものと考えられる。

次にこの竪穴住居を切る 9・10 号竪穴住居が続く。9 号竪穴住居については、前述したように出土した須恵器高環蓋や壺は TK208 を下限とする。また、カマド内から出土し、支脚に転用した土師器高環 (第 15 図 11) の坏部の屈曲が緩やかになっていること、多孔式の甕が出土していることなどから、4 期後半が下限と考えられ、前述した須恵器の時期とも矛盾しない。

10 号竪穴住居では、土師器小型丸底壺の多くは口縁部径が胴部最大径より小さくなっており (第 19 図)、最も時期の下るもので、4 期前半頃と比定できる。土師器高環については、脚部の形態が脚の途中で明確な稜をなして開くもの (第 20 図 1・2・10・13) や坏部との接合部から裾部にかけて、直線的に開くもの (第 20 図 3・7) が見られ、3 B 期～4 期の特徴を示している。しかし、前述した須恵器壺、朝鮮半島系軟質土器などの新しい遺物が出土しており、4 期の竪穴住居と考えたい。

9・10 号竪穴住居と同じ時期と考えられるのが、25 号竪穴住居である。土師器高環の口縁部の傾きや口縁端部が外反する坏などから、4 期の特徴がみられる。さらに 30 号竪穴住居は焼土近くから出土した土師器壺がやや古手の 3 B 期のものとみられるが、1 次調査区 (SH22) ではこれより新しい 4 期の遺物が出土しており、9・10・25 号竪穴住居と同時期と考えられる。

上記の竪穴住居に続いて、作られたのが8号竪穴住居である。この竪穴住居から内湾口縁の土師器環や頸部の稜線が緩やかになる土師器甕が出土しており、5期のものとみられ、中期後半～後期初頭にかかる。

この他、1号竪穴住居は土師器甕の口縁形態から6～7期と思われる。また、3号竪穴住居は4～5期や7期の甕が、4号竪穴住居は2期の土師器小型丸底甕が出土している。さらに、22号竪穴住居は高環や環の形態から4～5期、34号竪穴住居はカマドの形態から7期以降と思われる。ただし、以上の竪穴住居は遺物量が少なかったり、詳細な出土位置を押さえていないことから、確実な時期を断定するには材料に乏しい。

10号竪穴住居にあるカマド導入期の様相

次に初期須恵器や朝鮮半島系軟質土器、鞆羽口など、多くの遺物が出土し、4期のものと考えられる10号竪穴住居について少し考えてみたい。

まず、遺物は前述の初期須恵器とともに土師器の甕・小型丸底甕・鉢・鉢形甕・高環などが出土しているが、これらの多くは朝倉市・宮原遺跡B C地区3号住居跡出土の土器と器種構成が類似している⁹⁹。宮原遺跡の住居の時期は5世紀前半と報告されており、3 B期にあたる。このことから、この時期の器種構成がカマドの導入を挟んで4期まで残存していたことが指摘できよう。そして、これらの土器のうち、鉢形の小型甕と多孔式の大甕が共存するという九州地方の特徴を示す一方で、九州地方では出土例が少ないタキ目をもつ朝鮮半島系の甕も見られ、注目される¹⁰⁰。

鞆羽口については、荻原遺跡での鞆羽口・鉄銚などが出土した5世紀前半頃の鍛冶遺構¹⁰¹、一丁田遺跡での鉄銚が出土した5世紀初頭～前半頃の竪穴遺構¹⁰²など、3期における市内での出土例に次ぐものであり、続く4期には鉄の生産技術がさらに広がりを見せ、定着していたことを窺わせるものといえる。

ところで、日田におけるカマドの導入時期については、これまで4期後半とみられていた⁹⁸。しかし、今回の調査や1・3次調査において4期前半頃には確実にカマドをもつ竪穴住居が存在することが明らかになった。この結果、日田におけるカマドの導入は筑後川中流域での導入とほぼ同時期に行われたと考えられる。

ただし、カマドをもつ竪穴住居を10号竪穴住居が切っているということは、カマドが集落全体で一気に受容されたわけではなく、一部の住居に限られていたことを示すものである。これは時期の異なる須恵器が共存すること、朝鮮半島系土器についても軟質土器のみで陶質土器が存在しないこと、さらに日田全体で考えても、鉄の生産技術とカマドの導入時期に差がみられることなど、古墳時代中期における新たな文物の流入が、漸次的に進み、その受容も選択的に行われた可能性があることを示すものであろう。以上、こうした状況の一端を10号竪穴住居の在り方から垣間見ることができると考えている。

古墳時代集落の動向

最後に1・3次調査も含めた、本遺跡における古墳時代の集落についてまとめる。まず、前期には31・33号竪穴住居、SH29・32など5軒の竪穴住居が存在する。これらの竪穴住居は全て2期に属するとみられることから、1期が集落の空白時期となり、弥生時代後期終末から集落が連続的に営まれている可能性は低い。なお、求来里川流域において、この時期の集落は他に確認されておらず、本遺跡が最初の集落になると考えられる。

続く中期の竪穴住居は、3 A期に1軒、3 B期に3軒程度しか見られず、規模は前期と変わらない。しかし、3 B期から4期にかけて4軒、その後4期には16軒と一気に増加する。切り合い関係のある竪穴住居を除いても、少なくとも10軒前後は同時存在していた可能性が高く、中期中頃にカマドの導入とともに金田遺跡の集落規模は最大となる。

中期後半～後期にかけては、5期に2軒、6～7期にも3～4軒と竪穴住居の数は激減する。この時期以降の

集落は本道跡とほぼ同時期にカマドを導入した求来里川対岸の町ノ坪遺跡やさらに上流の求来里平島遺跡・名里遺跡⁸⁶などに見られ、中期後半以降、居住域の中心が川の主流域へと移動・拡大していったことが窺える。

おわりに

今回は本道跡に限って集落の動向などをまとめたが、次の段階として、求来里川流域における状況を把握することが重要と考えており、今後の検討課題としたい。

また、担当者の力量不足により、全ての遺構や遺物について、触れることができなかったことをお詫びしますとともに、発掘調査や報告書作成にあたって、数多くのご教示・ご指導を頂いた方々に心より感謝申し上げます。

註

- (1) 弥生土器編年表(柳田 1987)、吉田氏(吉田2001)、平谷氏(平谷2001)の編年表を参考にした。
- (2) 柳田 隆「TV考釈」九州縦断自動車道開通歴史文化財調査報告XXXI 中 弥生時代財貨集録 福岡県教育委員会 1979
- (3) 杉村竜太「石西線跡」平成16年度(2004年度) 日田市阿蘇文化財年報 日田市教育委員会 2005
- (4) 土居和幸編の重藤氏(重藤2002:2008)、須藤徳重田辺氏(田辺1981)のものに拠り、遺構の時期については重藤氏の編年表を使用し、其年代表は、木村氏(木村2003)や杉井氏(杉井2003)の論を参考にした。これらに基づき、時期区分については1・2期を前期、3～5期を中期、6・7期を後期としている。また、4期については便宜上、前・後半に分けている。
- (5) 第16図5の跡はツミヤや文移の沖積帯から伽藍跡の土器の可能性も考えたが、その場合5世紀後半期の所産となる可能性が高く(白井2003)、土器遺構や後の遺構との切り合い、関係に齟齬が生じると、国産と考えるほうが妥当と判断した。
- (6) 中井照氏のご教示による。
- (7) 柳田氏については中宿野浩氏・中井照氏にご教示いただいた。
- (8) 中井照氏・木村龍生氏のご教示による。
- (9) 中井照氏のご教示による。この他、古式遺構中や有田・小田原遺跡等での出土品など多くのご教示をえたにも関わらず、担当者の力量不足から全てを網羅することが出来なかった。
- (10) 杉井龍氏のご教示による。
- (11) 児玉真一編「九州縦断自動車道開通歴史文化財調査報告-14」日本市研在学際遺跡の調査I 福岡県教育委員会 1988
- (12) 杉井龍「生活様式における中心部近距離の成立とその意義」『先史学・考古学論究』IV 龍田考古会 2003
- (13) 平谷和生編「深瀬遺跡」日田市阿蘇文化財調査報告書第9集 日田市教育委員会 1995
- (14) 須藤徳重編「一丁二部跡Ⅱ」日田市阿蘇文化財調査報告書第83集 日田市教育委員会 2008
- (15) 須藤徳重編「大塚遺跡Ⅱ - B・C区の調査と記録」日田市阿蘇文化財調査報告書第66集 2006
土居和幸編「求来里平島遺跡」日田市阿蘇文化財調査報告書第39集 日田市教育委員会 2003
- (16) 土居和幸編「求来里平島遺跡」日田市阿蘇文化財調査報告書第39集 日田市教育委員会 2003
- (17) 西村下雄「求来里平島遺跡Ⅱ」日田市教育委員会阿蘇文化財調査報告書第77集 日田市教育委員会 2007
若杉竜夫「求来里平島遺跡E・F区」平成17年度(2005年度)日田市阿蘇文化財年報 日田市教育委員会 2007
今田秀樹「名里遺跡」平成18年度(2006年度)日田市阿蘇文化財年報 日田市教育委員会 2008
今田秀樹「名里遺跡」平成19年度(2007年度)日田市阿蘇文化財年報 日田市教育委員会 2008
柳田隆編「求来里の遺跡Ⅰ」日田市阿蘇文化財調査報告書第88集 日田市教育委員会 2009
柳田隆・田中治・松本弘編「一帯から求来里川中河段修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告 第31集 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2008

(参考文獻)

- 木村龍生「古銅時代銅器の年代分類について」『先史学・考古学論究』IV 龍田考古会 2003
酒井浩治「須磨器生産のまじまり」白石太一郎・上野伸史編「古代東アジアにおける倭と伽藍の交流」国立歴史民俗学館研究報告110 国立歴史民俗学館 2004
重藤徳行「福岡県における古銅時代中期～後期の土器Ⅱ」『古銅時代中・後期の土器器Ⅱ—その編年と地域性—』第5回九州地方後期研究学会実行委員会 2002
重藤徳行「筑前・筑後の銅器製造地としての土器」山口県の古銅時代土器編年を考える』山口県考古学フォーラム 2008
白井克也「日本における高部地帯の土器の出土傾向」『日南市阿蘇文化財年報』(熊本古銅研究会 創刊号 熊本古銅研究会 2003
杉井龍「生活様式における中心部近距離の成立とその意義」『先史学・考古学論究』IV 龍田考古会 2003
原田邦彦編『阿蘇遺跡跡』一般社団法人阿蘇文化財調査報告書第6集 福岡県教育委員会 1996
田辺真三「筑後国大分 角川遺跡 1981
平谷和久「阿蘇遺跡内における弥生時代後期の土器について」吉田隆理編『右衛門開闢跡Ⅱ』下巻 浮羽ハイパス関係埋蔵文化財調査報告書第14集 福岡県教育委員会 2001
柳田隆編「名里遺跡」阿蘇文化財調査報告書第35集 春日市教育委員会 2003
柳田隆編「2. 高木三郎氏宅西側新出土品」佐原謙編「弥生文化の研究」4弥生土器Ⅱ 堀土屋 1987
吉田隆理「右衛門開闢跡Ⅱの弥生時代中期土器について」吉田隆理編『右衛門開闢跡Ⅱ』下巻 浮羽ハイパス関係埋蔵文化財調査報告書第14集 福岡県教育委員会 2001

第1表 出土土器観察表(1)

調査番号	遺構	出土層	種類	別称	数量()は復元数・残存数				調		粉土		焼成		色		備考		
					口径	胴径	底径	高さ	外	内	含有率	含有率	温度	温度	内	外			
第6021	1住	12	土師	甕	(16.3)	-	-	(5.0)	ナデ・ハケ	?	○	○	○	○	良	淡黄色	淡黄褐色		
第6022	1住	12	土師	甕	-	-	-	(3.7)	指オサエ	指ナデ	○	○	○	○	良	灰黄色	灰黄褐色		
第6023	2住	12	土師	甕	(22.6)	-	-	(4.1)	ハケ	?	○	○	○	○	良	褐色	淡黄褐色		
第6024	2住	12	弥生	高坏	-	-	-	(8.6)	ナデ	ケズリ	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色		
第6025	3住	12	土師	甕	(16.4)	-	-	(5.2)	ナデ	ハケ・ナデ・ケズリ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第6026	3住	12	土師	甕	(11.6)	-	-	(5.3)	?	ハケ・ナデ・ケズリ	○	○	○	○	良	灰白色	灰白色		
第6027	3住	12	土師	甕	(13.2)	-	-	(5.3)	ナデ・ハケ 指オサエ	ハケ・ナデ ケズリ	○	○	○	○	良	灰白色	灰白色		
第6028	3住	12	弥生	甕	-	-	(6.6)	(3.0)	ナデ	ナデ	○	○	○	○	良	灰白色	灰黄褐色		
第6029	4住	12	弥生	甕	-	-	-	(1.6)	?	?	○	○	○	○	良	淡黄色	淡黄褐色		
第6030	4住	12	弥生	甕	-	-	-	(2.8)	ナデ	ミダキ	○	○	○	○	良	灰白色	灰白色		
第6031	4住	12	土師	丸底甕	(11.3)	(7.6)	-	7.2	ナデ	ナデ	○	○	○	○	良	灰白色	灰白色	外底黒線有り	
第6031	5-6住	12	弥生	高坏	22.2	-	-	(6.8)	指オサエ・ナデ	土師・ミダキ ナデ	○	○	○	○	良	灰白色	灰白色	内外面赤彩有り	
第6032	5-6住	12	弥生	甕	-	-	-	(6.8)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○	○	○	良	黄褐色	淡黄色		
第6033	5-6住	12	土師	甕	(16.2)	-	-	(3.9)	ナデ	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第6034	5-6住	12	土師	甕	(13.3)	-	-	(6.8)	?	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第10011	7住	12	弥生	甕	-	-	-	(7.4)	ハケ・ナデ	ナデ・ハケ	○	○	○	○	良	淡黄色	淡黄褐色		
第10022	7住	12	弥生	甕	-	-	6.5	(3.9)	ナデ?	ナデ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第10023	7住	12	弥生	甕	-	-	-	(5.8)	(3.0)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○	○	○	良	灰白色	褐色	
第10034	7住	12	土師	高坏	-	-	-	(10.6)	工具ナデ・ナデ	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	良	淡黄褐色	淡黄褐色		
第13021	8住	12	土師	甕	15.8	13.8	-	20.4	指オサエ・ナデ 土師	ナデ・土師 ケズリ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第13022	8住	12	土師	甕	(17.2)	(21.0)	-	(13.6)	ナデ	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第13023	8住	12	土師	甕	(15.9)	-	-	(3.5)	ナデ	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第13024	8住	12	土師	甕	-	-	(27.6)	-	ナデ	ケズリ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第13025	8住	12	土師	甕	-	-	-	(5.4)	ナデ?	ケズリ	○	○	○	○	良	灰白色	褐色		
第13026	8住	12	土師	鉢	(12.2)	-	-	5.9	?	?	○	○	○	○	良	褐色	褐色	外底黒線有り	
第13027	8住	12	土師	甕	(13.2)	-	-	5.9	ミダキ?	ミダキ?	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第13028	8住	12	-	手組土師	2.4	-	-	1.6	指オサエ	指オサエ	○	○	○	○	良	淡黄色	淡黄色		
第13021	9住	12	弥生	甕	-	-	6.6	(3.6)	?	?	○	○	○	○	良	灰白色	褐色		
第13022	9住	12	弥生	甕	-	-	(6.8)	(4.7)	?	?	○	○	○	○	良	淡黄色	褐色		
第13023	9住	12	弥生	甕	-	-	5.6	(2.6)	?	?	○	○	○	○	良	淡黄色	淡黄色		
第13024	9住	12	土師	甕	(16.6)	(22.6)	-	(15.2)	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	良	褐色	灰白色		
第13025	9住	12	土師	甕	(16.5)	24.4	-	(20.5)	ナデ 丁取ナデ	ハケ・ナデ ケズリ	○	○	○	○	良	淡黄褐色	淡黄褐色	外底黒線有り	
第13026	9住	12	土師	甕	(16.8)	(26.2)	-	(23.2)	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ 指オサエ	○	○	○	○	良	灰白色	灰白色	外底黒線有り	
第13027	9住	12	土師	甕	(15.1)	-	-	(5.6)	ナデ	ナデ?	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第13028	9住	12	土師	坪	16.9	-	-	5.2	?	?	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第13029	9住	12	土師	坪	12.4	-	-	4.1	?	?	○	○	○	○	良	灰白色	灰白色	外底黒線有り	
第13030	9住	13	土師	坪	14.7	-	-	4.8	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○	○	○	良	灰白色	灰白色	外底黒線有り	
第13031	9住	13	土師	高坏	19.0	-	13.4	15.8	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ ケズリ	○	○	○	○	良	褐色	褐色	外底黒線有り	
第13032	9住	13	土師	高坏	-	-	-	(3.6)	?	?	○	○	○	○	良	黒褐色	褐色		
第13033	9住	-	手組土師	-	-	-	(3.1)	ナデ	指オサエ	○	○	○	○	良	淡黄褐色	淡黄褐色			
第13034	9住	-	手組土師	-	-	-	(2.9)	指オサエ	指オサエ	○	○	○	○	良	灰白色	灰白色			
第14021	9住	13	土師	甕	(26.2)	-	-	(18.2)	ナデ・ハケ 指オサエ	ナデ・ケズリ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第14022	9住	13	土師	甕	-	-	(10.0)	(4.5)	ハケ・ナデ	指オサエ・ナデ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第14023	9住	13	土師	甕	-	-	-	(6.3)	指ナデ	指オサエ・ナデ	○	○	○	○	良	灰白色	灰白色	外底黒線有り	
第14024	9住	13	土師	甕	-	-	-	(1.9)	?	?	○	○	○	○	良	淡黄色	淡黄色		
第14025	9住	13	弥生	高坏	12.5	-	-	6.4	回転ハケ・ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	外底黒線有り 内外面自然剥	
第14026	9住	13	弥生	甕	(12.2)	-	-	5.2	回転ハケ・ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	○	○	○	○	良	灰白色	灰白色		

第2表 出土土器観察表(2)

調査番号	遺構	土器種別	形別	口径()は復元種・残存高				調 整				土 質				色 調		備 考
				口径	脚高	底径	高さ	外 面	内 面	全土質	土質	土質	土質	内 面	外 面			
第16067	9住	13	煎茶 壺	(14.1)	-	-	(7.5)	回転ナブ	回転ナブ	○	○	○	○	良	灰褐色	暗黄灰褐色		
第16068	9住	13	煎茶 壺	-	-	-	(5.4)	回転ナブ	回転ナブ	○	○	○	○	良	灰褐色	黄灰褐色		
第16069	10住	13	煎茶 壺	-	-	-	(7.2)	ハケ・ナブ	ナブ・煎オサエ	○	○	○	○	良	黄灰色	褐色		
第16070	10住	13	煎茶 壺	-	-	-	7.3	ハケ・ナブ	煎ナブ・煎オサエ	○	○	○	○	良	灰黄色	灰黄色		
第16071	10住	13	煎茶 壺	-	-	-	6.2	?	ナブ	○	○	○	○	良	灰黄色	褐色		
第16072	10住	13	煎茶 壺	-	-	-	6.2	?	?	○	○	○	○	良	灰黄色	褐色		
第16073	10住	13	土師 壺	(19.0)	28.8	-	31.6	ナブ・ハケ	ナブ・ケズリ	○	○	○	○	良	にぶい・褐色	にぶい・褐色	内外面黒線有り	
第16074	10住	13	土師 壺	(16.4)	(22.0)	-	(25.4)	煎オサエ・ナブ	ナブ・ケズリ 煎オサエ	○	○	○	○	良	にぶい・赤褐色	赤褐色	内外面黒線有り	
第16075	10住	13	土師 壺	(15.8)	-	-	(5.5)	ハケ・ナブ	ハケ・ケズリ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第16076	10住	13	土師 壺	(18.7)	-	-	(6.6)	ナブ	ナブ・ケズリ	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色		
第16077	10住	13	土師 壺	(14.2)	-	-	(7.1)	ハケ・ナブ	ナブ・ケズリ	○	○	○	○	良	にぶい・黄褐色	褐色		
第16078	10住	13	土師 壺	14.9	-	-	(6.9)	ナブ・ハケ	ハケ・ナブ・ケズリ	○	○	○	○	良	灰黄色	灰黄色	外黒線有り	
第16079	10住	13	土師 壺	18.4	-	-	(6.0)	ナブ・ハケ	ナブ・ケズリ	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色		
第16080	10住	13	土師 壺	(20.2)	-	-	(5.4)	ハケ・ナブ	?	○	○	○	○	良	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色		
第16081	10住	13	土師 壺	-	-	-	(11.7)	?	?	○	○	○	○	良	にぶい・褐色	黄褐色	外黒スス付着	
第16082	10住	13	土師 壺	(6.8)	-	-	(14.5)	ナブ・ハケ	ナブ・ハケ 煎オサエ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第16083	10住	13	土師 壺	(11.8)	-	-	(7.0)	ナブ	ナブ	○	○	○	○	良	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色		
第16084	10住	13	土師 丸底壺	(10.0)	-	-	(4.5)	ナブ・ハケ	ナブ・ケズリ	○	○	○	○	良	にぶい・褐色	にぶい・褐色		
第16085	10住	13	土師 壺	10.2	(12.1)	-	(9.0)	ナブ・ハケ	ナブ・ケズリ 煎オサエ	○	○	○	○	良	黒褐色	赤褐色		
第16086	10住	13	土師 丸底壺	(9.0)	-	-	(4.3)	ナブ	ナブ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第16087	10住	13	土師 壺	(16.0)	14.3	-	(11.3)	ナブ・ハケ	ナブ・ケズリ 煎オサエ	○	○	○	○	良	にぶい・褐色	褐色		
第16088	10住	13	土師 丸底壺	(11.5)	-	-	(9.4)	ナブ・ハケ	ナブ・ケズリ	○	○	○	○	良	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色		
第16089	10住	14	土師 丸底壺	-	(13.7)	6.3	(11.1)	ハケ・ナブ	煎オサエ・ナブ	○	○	○	○	良	灰黄色	黒褐色	外黒スス付着	
第16090	10住	13	土師 丸底壺	8.4	9.0	-	10.4	ナブ	ナブ・ケズリ 煎オサエ	○	○	○	○	良	灰黄色	灰黄色		
第16091	10住	14	土師 丸底壺	(9.0)	8.2	-	9.9	ハケ・ナブ	ナブ・ハケ	○	○	○	○	良	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	外黒線有り	
第16092	10住	14	土師 丸底壺	9.8	10.1	-	10.8	ハケ・ナブ	ハケ・ナブ・ケズリ	○	○	○	○	良	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	外黒線有り	
第16093	10住	13	土師 丸底壺	7.6	9.1	-	9.2	ナブ・ハケ	ナブ・煎オサエ	○	○	○	○	良	灰黄色	灰黄色	外黒線有り	
第16094	10住	13	土師 丸底壺	(8.0)	9.3	-	10.9	ナブ・ハケ	ナブ・ハケ・ケズリ	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	外黒線有り	
第16095	10住	13	土師 丸底壺	(16.2)	-	-	(6.0)	ハケ・ナブ	ハケ・ナブ・煎オサエ	○	○	○	○	良	褐色	にぶい・黄褐色		
第16096	10住	13	土師 丸底壺	(8.0)	-	-	(6.5)	ナブ・ハケ	ハケ・ナブ	○	○	○	○	良	にぶい・褐色	にぶい・褐色		
第16097	10住	13	土師 丸底壺	-	(9.0)	-	(6.7)	ナブ・ハケ	ナブ・土具残 土具ナブ	○	○	○	○	良	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色		
第16098	10住	13	土師 丸底壺	-	-	-	(7.4)	ナブ・ハケ	ケズリ・ナブ	○	○	○	○	良	褐色	にぶい・褐色		
第20001	10住	14	土師 高坏	17.6	-	-	10.5	ナブ	ナブ	○	○	○	○	良	褐色	黄褐色		
第20002	10住	14	土師 高坏	(20.2)	-	-	(13.1)	ナブ・ハケ	ナブ・ケズリ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第20003	10住	14	土師 高坏	17.0	-	-	11.7	ナブ	ナブ	○	○	○	○	良	黄褐色	灰黄色	内面黒線有り	
第20004	10住	14	土師 高坏	(16.2)	-	-	(10.0)	?	煎オサエ・ナブ	○	○	○	○	良	褐色	にぶい・褐色		
第20005	10住	13	土師 高坏	-	-	-	(2.8)	ハケ	?	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色		
第20006	10住	13	土師 高坏	-	-	-	(3.3)	ミダケ	ナブ	○	○	○	○	良	にぶい・褐色	褐色		
第20007	10住	13	土師 高坏	-	-	-	13.0	煎オサエ・ナブ	ナブ・ケズリ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第20008	10住	13	土師 高坏	(16.4)	-	-	(5.4)	ナブ	ナブ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第20009	10住	13	土師 高坏	16.1	-	-	(7.2)	ハケ・ナブ	ナブ・ハケ	○	○	○	○	良	にぶい・赤褐色	にぶい・褐色	内外黒線有り	
第20010	10住	13	土師 高坏	-	-	-	(13.2)	ナブ	ケズリ・ナブ	○	○	○	○	良	褐色	褐色	外黒線有り	
第20011	10住	13	土師 高坏	-	-	-	(13.0)	ハケ・ナブ	ケズリ・ナブ	○	○	○	○	良	にぶい・褐色	にぶい・褐色		
第20012	10住	13	土師 高坏	-	-	-	(8.7)	ナブ	ケズリ・ナブ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第20013	10住	13	土師 高坏	-	-	-	13.2	ナブ	ケズリ・ナブ 紋瓦	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色		
第20014	10住	14	土師 鉢	-	-	-	9.5	ナブ	ナブ	○	○	○	○	良	灰黄色	褐色		
第20015	10住	14	土師 鉢	19.9	-	-	13.2	ナブ	ナブ・ケズリ 煎オサエ	○	○	○	○	良	灰黄色	灰黄色		

第3表 出土土器観表(3)

詳細 番号	遺構	土器 種類	形 別	口径	胴径	底径	器高	測 量		動 土		色 調		備 考						
								外 面	内 面	表層	中層	底層	内 面		外 面					
第20016	10住	14	土鍋	瓶	15.5	-	-	(13.3)	ハケ・ナブ	ケズリ・指オサエ	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外底面赤有り 底面凹			
第20017	10住	14	土鍋	鉢	(12.8)	-	(4.8)	7.8	ナブ	ナブ・指オサエ	○	○	○	良	淡黄色	淡黄色	外底面赤有り			
第20018	10住		土鍋	坪	(16.4)	-	-	8.2	ハケ・ナブ	ナブ?	○	○	○	良	黄褐色	褐色	内面スス付着			
第20019	10住		土鍋	坪	(16.2)	-	-	(5.3)	ナブ?	ナブ?	○	○	○	良	褐色	褐色				
第21381	10住	14	土鍋	瓶	-	-	(11.6)	(13.3)	橋子宮タケ	指オサエ・ナブ	○	○	○	良	黄褐色	淡黄色	外面面赤有り			
第21382	10住	14	土鍋	瓶	22.0	-	(11.2)	21.3	橋子宮タケ	指オサエ・ナブ	○	○	○	良	褐色	褐色				
第21383	10住	14	土鍋	鉢	(28.8)	-	-	(9.4)	ナブ・ハク	ナブ・指オサエ	○	○	○	良	淡黄色	淡黄色	外面スス付着			
第21384	10住	14	土鍋	瓶	-	-	-	(1.0)	ナブ	ナブ	○	○	○	良	淡黄色	黄灰色				
第22081	10住	14	煎茶	高环蓋	(13.2)	-	-	(3.4)	回転ハケナブ	回転ナブ	○	○	○	良	灰黑色	灰黑色				
第22082	10住	14	煎茶	蓋	15.8	(23.0)	-	24.4	回転ナブ	回転ナブ	○	○	○	良	灰黑色	灰黑色	内面やや赤掛け			
第24081	11住		弥生	壺	(21.8)	-	-	(9.5)	ナブ・ハク	ナブ	○	○	○	良	黄褐色	にぶい黄褐色				
第24082	11住		弥生	壺	-	-	7.3	(6.3)	ハケ・ナブ	ナブ?	○	○	○	良	黄褐色	褐色				
第24083	11住		弥生	壺	-	-	7.5	(7.4)	ハケ・ナブ	指ナブ・ナブ	○	○	○	良	黄褐色	褐色				
第24084	11住	15	弥生	壺	-	-	(7.2)	(7.0)	ハケ・ナブ	ナブ	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				
第24085	11住		弥生	壺	-	-	(7.0)	(4.3)	ハケ・ナブ	ナブ	○	○	○	良	灰黄褐色	灰黄褐色				
第24086	11住		弥生	壺	-	-	(8.4)	(4.3)	ハケ・ナブ	工具ナブ・ナブ	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい褐色				
第26081	12-14住	15	弥生	壺	(29.2)	-	-	(6.9)	ミガキ	ミガキ・ナブ?	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	内外面赤有り			
第26082	12-14住		弥生	壺	(27.1)	-	-	(8.2)	ナブ・ハク	ナブ	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色				
第26083	12-14住		弥生	壺	(15.1)	-	-	(4.9)	ミガキ	ミガキ	○	○	○	良	黄褐色	にぶい黄褐色	内外面赤有り			
第26084	12-14住	15	弥生	甗台	9.6	-	-	(13.2)	ナブ・ハク	指オサエ・ナブ	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				
第26085	12-14住		弥生	甗台	-	-	(11.0)	(5.9)	ハケ・ナブ	ナブ	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				
第26086	12-14住	15	弥生	甗	31.6	-	-	15.0	ナブ・ハク	指オサエ・ナブ	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	外面面赤有り			
第26087	12-14住		弥生	甗	(37.0)	-	-	(3.9)	ハケ・丁取ナブ	ナブ	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				
第26088	12-14住	15	弥生	壺	-	-	8.1	(11.8)	ハケ・ナブ	ナブ・指オサエ	○	○	○	良	黄褐色	にぶい褐色				
第26089	12-14住	15	弥生	高坪	(22.2)	-	-	(9.7)	ハケ・ナブ	ハケ・ナブ	○	○	○	良	褐色	褐色				
第260916	12-14住		弥生	壺	-	-	(8.2)	(3.9)	ナブ	ナブ	○	○	○	良	淡黄色	淡黄色				
第260911	12-14住		弥生	壺	-	-	6.5	(6.7)	ハケ・ナブ	ナブ	○	○	○	良	黄褐色	褐色				
第260912	12-14住		弥生	壺	-	-	(6.8)	(3.2)	指オサエ・ナブ	ナブ・指オサエ	○	○	○	良	黒褐色	淡黄色				
第260913	12-14住		弥生	壺	-	-	5.8	(6.4)	ナブ	ナブ・指オサエ	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	外面赤有り			
第260914	12-14住		弥生	壺	-	-	6.0	(4.3)	ナブ	ナブ・指オサエ	○	○	○	良	にぶい黄褐色	褐色	外面面赤有り			
第28081	15住		弥生	壺	(25.6)	-	-	(9.7)	ナブ・ハク	ハケ・ナブ	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				
第28082	15住		弥生	壺	-	-	(6.3)		ナブ・ハク	ハケ	○	○	○	良	にぶい褐色	にぶい褐色	内外面赤有り			
第28083	15住		弥生	高坪	-	-	(9.0)		ナブ	ナブ・段り蓋	○	○	○	良	褐色	褐色	外面面赤有り			
第28084	15住	15	弥生	壺	-	(19.3)	5.8	(13.9)	ハケ・タズリ	ナブ・ハク	○	○	○	良	明褐色	明褐色				
第28085	15住	15	弥生	壺	-	-	(15.0)		ハケ	ハケ	○	○	○	良	明褐色	明褐色				
第30081	16-17住	15	弥生	壺	(24.0)	(28.0)	8.0	(40.8)	ナブ・ハク	ナブ・ハク	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外面面赤有り			
第30082	16-17住		弥生	壺	(24.9)	-	-	(10.8)	ハケ・ナブ	ハク	○	○	○	良	灰黄褐色	にぶい黄褐色				
第30083	16-17住		弥生	壺	(15.2)	-	-	(12.1)	ナブ・ハク	ハケ	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	外面面赤有り			
第30084	16-17住	15	弥生	壺	(22.2)	-	-	(26.3)	ナブ・ハク	ナブ・ハク	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	外面面赤有り			
第30085	16-17住		弥生	壺	-	-	6.4	(11.2)	ナブ	ナブ?	○	○	○	○	○	○	良	褐色	褐色	
第30086	16-17住		弥生	壺	-	-	(8.8)	(3.9)	ハケ・ナブ	ナブ	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				
第30087	16-17住		弥生	壺	-	-	(5.8)	(4.3)	ナブ	ナブ	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				
第30088	16-17住		弥生	壺	-	-	6.8	(5.2)	ハケ・ナブ	ナブ	○	○	○	良	明黄褐色	明黄褐色				
第30089	16-17住		弥生	壺	-	-	(6.0)	(6.2)	ナブ	ナブ・指オサエ	○	○	○	良	黄灰色	褐色				
第31381	16-17住	15	弥生	甗	(14.6)	-	-	(12.2)	ハケ・ナブ	ナブ・ハク	○	○	○	良	褐色	褐色	内外面赤有り			
第31382	16-17住	15	弥生	壺	15.2	(26.1)	-	(18.7)	ハケ・ナブ	ナブ・ハク	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色				
第31383	16-17住	15	弥生	壺	(15.0)	-	-	(17.4)	ナブ・ハク	ナブ・ハク	○	○	○	良	灰黄褐色	灰黄褐色	外面スス付着			

第4表 出土土器観察表(4)

標記番号	遺構	年代	種別	器種	胎土()は覆元種・残存高			調 整		胎 土		色 調		備 考		
					口径	胴径	底径	外 面	内 面	胎土	胎土	内 面	外 面			
第31004	16-17F	15	弥生	甕	-	12.6	2.0	(6.9)	ミガキ?	ナゾ・指オサエ	○	○	良	にぶい・褐色	にぶい・褐色	外面黒底有り
第31005	16-17F	15	弥生	甕	-	-	-	(5.3)	?	?	○	○	良	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	焼き不明
第31006	16-17F	15	弥生	甕	-	-	9.0	(3.3)	ナゾ	ハケ	○	○	良	肌白色	褐色	
第31007	16-17F	15	弥生	鉢	21.8	-	-	(12.2)	タタキ・ナゾ	ナゾ・工具痕 指オサエ	○	○	良	黄褐色	黄褐色	内外面黒底有り
第31008	16-17F	15	弥生	鉢	-	-	-	(5.5)	土黒底(タタキ)	工具ナゾ	○	○	良	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	
第31009	16-17F	15	弥生	鉢	14.2	-	-	7.6	?	ナゾ・指オサエ	○	○	良	にぶい・褐色	にぶい・褐色	外面黒底有り
第31010	16-17F	15	弥生	鉢	14.1	-	-	6.3	ミガキ?	ナゾ	○	○	良	にぶい・褐色	にぶい・褐色	内面黒底有り
第31011	16-17F	15	弥生	鉢	12.5	-	-	6.9	ナゾ	ナゾ・工具痕	○	○	良	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	
第32001	16-17F	15	弥生	高杯	28.8	-	-	(3.3)	ナゾウ・ミガキ?	ナゾウ・ミガキ?	○	○	良	明褐色	明褐色	口縁上縁に緑文?
第32002	16-17F	16	弥生	高杯	18.9	-	17.8	21.4	ハケ・ミガキ・ナゾ	ハケ・ナゾ 脱土痕	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第32003	16-17F	16	弥生	高杯	-	-	-	(4.1)	ハケ	ナゾ	○	○	良	にぶい・褐色	にぶい・褐色	
第32004	16-17F	16	弥生	高杯	-	-	-	(7.1)	ミガキ	ナゾ	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第32005	16-17F	16	弥生	高杯	-	-	(14.2)	(15.1)	?	?	○	○	良	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	
第34001	18F	16	弥生	甕	21.7	24.5	4.8	35.7	ハケ・ナゾ	ハケ・ナゾ	○	○	良	褐色	褐色	内外面黒底有り
第34002	18F	16	弥生	甕	-	-	-	(17.0)	ハケ・ナゾ	ハケ	○	○	良	にぶい・褐色	にぶい・褐色	外面黒底有り
第34003	18F	16	弥生	高杯	-	-	11.2	(14.0)	ミガキ・ナゾ	ナゾ・脱り痕	○	○	良	黄褐色	黄褐色	外面黒底有り
第35001	19F	16	弥生	甕	21.0	(19.0)	-	(5.4)	?	ナゾ	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第35002	19F	16	弥生	甕	(16.7)	-	-	(5.8)	ナゾ	ナゾ	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第35003	19F	16	弥生	甕	(15.3)	-	-	(6.8)	ハケ・ナゾ	ナゾ・ハケ	○	○	良	にぶい・赤褐色	にぶい・赤褐色	
第35004	19F	16	弥生	甕	(17.0)	(15.8)	-	12.3	ナゾ・ハケ	ハケ・ナゾ・指オサエ	○	○	良	明黄褐色	明黄褐色	外面黒底有り
第35005	19F	16	弥生	高杯	-	-	-	(12.4)	ミガキ?	ナゾ・ハケ	○	○	良	黄褐色	黄褐色	外面黒底有り 唇部脱土有り?
第35006	19F	16	弥生	高杯	-	-	(13.4)	(8.6)	ハケ・ナゾ	ナゾ・ハケ 脱り痕	○	○	良	褐色	褐色	
第35007	19F	16	弥生	甕	-	(20.0)	(6.8)	(16.6)	ハケ	ハケ・ナゾ 指オサエ	○	○	良	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	外面黒底有り
第35008	19F	16	弥生	甕	-	-	(6.8)	(4.3)	ハケウ・ナゾ	ナゾウ	○	○	良	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	
第35009	19F	16	弥生	甕	-	-	(6.8)	(4.8)	ハケウ・ナゾ	ナゾ	○	○	良	肌黄褐色	にぶい・褐色	
第35010	19F	16	弥生	甕	-	-	(6.3)	(5.4)	ナゾウ?	ナゾ	○	○	良	肌白色	にぶい・褐色	
第37001	20F	16	弥生	甕	-	-	(3.5)	ナゾ	?	?	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第37002	20F	16	弥生	甕	-	-	(2.5)	ナゾ	ナゾ	ナゾ	○	○	良	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	
第37003	20F	16	弥生	甕	-	-	(6.2)	(4.7)	ハケウ・ナゾ	ナゾ	○	○	良	にぶい・黄褐色	褐色	外面黒底有り
第37004	20F	16	土師	丸底甕	11.4	14.6	-	15.4	ハケ・ナゾ	ナゾ・タズリ 指オサエ	○	○	良	肌褐色	にぶい・褐色	
第37005	20F	16	土師	甕	(12.2)	(16.0)	-	(14.8)	ハケ・ナゾ	ナゾ・ハケ タズリ	○	○	良	肌褐色	褐色	外面黒底有り
第37006	20F	16	土師	甕	(14.5)	(24.0)	-	(23.9)	ハケ・ナゾ	ナゾ・ハケ タズリ	○	○	良	黄褐色	にぶい・黄褐色	外面黒底有り
第37007	20F	16	土師	甕	(16.4)	-	-	(13.0)	ナゾウ?	ナゾウ?	○	○	良	黄褐色	黄褐色	外面黒底有り
第37008	20F	16	土師	高杯	20.9	-	-	(6.8)	?	?	○	○	良	にぶい・褐色	にぶい・褐色	
第37009	20F	16	土師	高杯	(19.4)	-	-	(6.8)	?	?	○	○	良	褐色	褐色	
第39001	21F	16	土師	甕	(15.6)	-	-	(8.8)	?	ナゾウ?	○	○	良	黄褐色	黄褐色	外面ヌス付
第42001	22F	16	土師	杯	12.7	-	-	(6.8)	ハケ	?	○	○	良	にぶい・褐色	にぶい・褐色	
第42002	22F	16	土師	甕	-	-	(2.8)	ハケ・ナゾ	ナゾ	ナゾ	○	○	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第42003	22F	16	土師	高杯	(21.4)	-	-	(7.5)	?	?	○	○	良	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	
第42004	23F	16	弥生	甕	(15.4)	(17.2)	-	33.2	ナゾ・ハケ・タタキ	ナゾ・ハケ 指オサエ	○	○	良	褐色	褐色	
第42005	23F	16	弥生	甕	-	-	(6.8)	ハケ・ナゾ・タタキ	ナゾ・ハケ	○	○	良	褐色	褐色	外面黒底有り	
第42006	23F	16	弥生	甕	-	-	(1.4)	?	?	?	○	○	良	肌白色	肌白色	
第42007	23F	16	弥生	甕	-	-	(1.2)	ナゾ	ナゾ	ナゾ	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第42008	23F	16	弥生	甕	-	-	(4.0)	ナゾ・ハケ	ナゾ	ナゾ	○	○	良	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	
第42009	23F	16	弥生	高杯	-	-	(6.4)	ミガキ	指オサエ・ナゾ	ナゾ	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第42010	23F	16	弥生	甕	-	-	(8.2)	(3.5)	工具ナゾ・ナゾ	ナゾ	○	○	良	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	
第42011	23F	16	土師	杯	14.0	-	-	4.9	ナゾ・ハケ	ナゾ	○	○	良	にぶい・褐色	にぶい・褐色	内面黒底有り

第5表 出土土器観察表(5)

調査番号	遺構	土層	種別	形別	数量()は破元種・残存高				調		胎土		施		色		備考	
					口徑	胴径	底径	高さ	外 面	内 面	胎土	胎土	内 面	外 面				
第420812	23住	土層	甕	-	-	-	(8.8)	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	良	にぶい褐色	にぶい褐色	
第44021	24住	弥生	甕	-	-	-	(2.9)	ナゲ	ハケ・ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	黄褐色	内外面赤彩有り
第44022	24住	弥生	甕	-	-	(6.4)	(3.3)	ハケ・ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	良	黄褐色	にぶい黄褐色	
第44023	24住	16 土層	高坏	(18.8)	-	-	(14.1)	ハケ	ハケ・ケズリ	ナゲ	○	○	○	○	良	にぶい褐色	にぶい褐色	外面黒彩有り
第46021	25住	16 土層	甕	直	9.4	13.1	-	(9.3)	ナゲ・工具ナゲ 指オサエ	ナゲ・ケズリ 指オサエ	○	○	○	○	良	褐色	褐色	外面黒彩有り
第46022	25住	土層	甕	-	-	-	(12.7)	ナゲ・ハケ	ケズリ	ナゲ	○	○	○	○	良	褐色	にぶい黄褐色	
第46023	25住	土層	甕	-	-	(25.2)	-	(18.0)	ハケ	ケズリ・ナゲ 指オサエ	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	外面スス付着
第46024	25住	土層	甕	-	-	-	(4.2)	ナゲ・ハケ	ナゲ・ハケ	ナゲ	○	○	○	○	良	黄褐色	灰黄褐色	
第46025	25住	弥生	甕	-	-	-	(4.6)	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第46026	25住	16 土層	鉢	14.0	-	-	6.7	ナゲ	工具ナゲ・工具柄	ナゲ	○	○	○	○	良	にぶい褐色	にぶい褐色	
第46027	25住	土層	坪	(18.8)	-	-	(5.4)	ナゲ?	ナゲ?	ナゲ?	○	○	○	○	良	にぶい褐色	にぶい褐色	
第46028	25住	土層	坪	(13.4)	-	-	(5.3)	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	良	褐色	褐色	
第46029	25住	16 土層	高坏	(19.4)	-	-	14.2	14.9	ハケ・ナゲ	ハケ・ナゲ ケズリ	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第46030	25住	17 土層	瓶	-	-	-	(13.2)	(15.4)	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	良	黄褐色	にぶい褐色	外面黒彩有り
第46031	25住	-	平段土罎	3.1	-	-	2.6	指オサエ	指オサエ	指オサエ	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第46032	25住	-	平段土罎	2.6	-	-	2.2	指オサエ	指オサエ	指オサエ	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第46033	26住	弥生	甕	-	-	-	(3.2)	ナゲ・ハケ	?	?	○	○	○	○	良	褐色	褐色	
第46032	26住	弥生	甕	直	-	-	(2.4)	ナゲ	ナゲ・ハケ	ナゲ	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第46033	26住	弥生	甕	-	-	(7.3)	(5.5)	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	褐色	
第46034	26住	弥生	甕	-	-	(6.4)	(2.4)	ナゲ	?	?	○	○	○	○	良	一	にぶい黄褐色	
第50021	27住	17 弥生	高坏	-	-	-	(3.4)	ナゲ?	ナゲ?	ナゲ?	○	○	○	○	良	褐色	褐色	内外面赤彩有り
第50022	27住	弥生	甕	-	-	(6.5)	(3.4)	ハケ・ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	良	褐色	にぶい黄褐色	
第50023	27住	弥生	甕	-	-	-	(3.6)	ナゲ	ナゲ?	ナゲ?	○	○	○	○	良	にぶい褐色	にぶい褐色	
第52021	28住	17 弥生	甕	23.5	22.4	6.8	28.8	ナゲ・ハケ	ナゲ・指オサエ	ナゲ	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	内外面スス付着
第52022	28住	弥生	甕	-	-	-	(4.2)	ハケ	?	?	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第52023	28住	弥生	甕	-	-	(6.6)	(3.0)	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	良	黄褐色	にぶい黄褐色	
第52024	28住	弥生	甕	-	-	(7.2)	(5.0)	ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	良	黄褐色	褐色	
第52025	28住	弥生	甕	-	-	(8.4)	(4.9)	ナゲ?	ナゲ?	ナゲ?	○	○	○	○	良	灰黄褐色	褐色	
第52026	28住	弥生	甕	-	-	(8.4)	(3.4)	ハケ・ナゲ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	良	灰黄色	灰黄色	外面黒彩有り
第52027	28住	弥生	高坏	-	-	-	(3.4)	ナゲ?	ナゲ?	ナゲ?	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	内外面赤彩有り
第53021	29住	弥生	甕	-	-	-	(3.4)	ナゲ?	ナゲ?	ナゲ?	○	○	○	○	良	褐色	褐色	
第53022	29住	弥生	甕	-	-	(6.3)	(1.6)	ナゲ?	指オサエ	指オサエ	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	褐色	
第53021	30住	17 土層	直	10.4	14.2	-	14.4	ナゲ・ハケ	ナゲ・ケズリ 指オサエ	ナゲ	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第53022	30住	土層	高坏	-	-	(12.4)	(7.4)	?	ケズリ?	?	○	○	○	○	良	褐色	褐色	
第57021	31住	17 土層	甕	(11.0)	-	-	(5.4)	ナゲ・ハケ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	良	褐色	褐色	外面黒彩有り
第57022	32住	弥生	甕	(18.2)	-	-	(6.2)	ナゲ	ナゲ・ケズリ	ナゲ	○	○	○	○	良	黄褐色	にぶい黄褐色	
第57023	31住	弥生	甕	-	-	(8.0)	(5.4)	ナゲ?	ナゲ?	ナゲ?	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	褐色	
第59021	32住	弥生	甕	(23.1)	(21.0)	-	(16.0)	ナゲ・ハケ	ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第59022	31住	17 弥生	甕	-	-	-	(3.0)	ナゲ・不明	?	?	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第59023	31住	弥生	甕	-	-	-	(3.1)	?	?	?	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第59024	32住	17 弥生	甕	-	-	-	(3.9)	?	?	?	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第59025	32住	17 弥生	甕	-	-	-	(6.4)	ナゲ?	ナゲ?	ナゲ?	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第59026	32住	弥生	甕	-	-	(7.2)	(7.1)	ハケ・ナゲ	工具ナゲ・ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	良	黄褐色	にぶい黄褐色	外面黒彩有り
第59027	32住	弥生	甕	-	-	(6.6)	(4.5)	ハケ・ナゲ	ハケ・ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	良	灰褐色	にぶい黄褐色	
第61021	33住	17 土層	甕	(8.4)	-	-	(7.4)	ミダナ?	ミダナ?・工具ナゲ	ナゲ	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	頸部穿孔4ヶ所
第61022	33住	弥生	甕	(7.4)	-	-	(3.0)	ナゲ?	ナゲ?	ナゲ?	○	○	○	○	良	赤褐色	黄褐色	
第61023	34住	土層	甕	-	-	(23.4)	-	(12.3)	ナゲ・ハケ	ナゲ・ケズリ?	○	○	○	○	良	黄褐色	暗褐色	

第6表 出土土器観察表(6)

経度番号	遺構	平土器	種別	器形	総数() : 江原元種・残存数				調 査		胎 土		色 調		備 考			
					日様	胴部径	底径	器高	外 面	内 面	胎土	胎土	内 面	外 面				
第63021	35住	土師	直	16.0	-	-	(7.5)	ナダ・ハケ	ナダ・ナズリ 指オサエ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第63022	35住	17	土師	直	7.3	8.1	-	8.4	指オサエ・ナダ	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい褐色	外面スス付着	
第63023	35住	土師	小型直	-	(6.7)	-	(4.9)	ナダ	指ナダ	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色		
第63024	35住	17	土師	直	9.0	13.6	-	13.9	丁寧なナダ ナダ・ナズリ 指オサエ	○	○	○	○	良	にぶい褐色	にぶい褐色	内外面スス付着	
第66021	36住	弥生	直	-	-	-	(4.0)	ナダ・ハケ 指オサエ	ナダ	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第66022	36住	弥生	直	-	-	(6.0)	(5.0)	ハケ・ナダ	ナダ	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
第66023	36住	弥生	直	-	-	(7.0)	(7.7)	ハケ・ナダ 指オサエ	ナダ	○	○	○	○	良	にぶい褐色	にぶい褐色		
第66024	36住	弥生	高坪	-	-	-	(9.0)	ナダ?	靱り籠・ナダ	○	○	○	○	良	灰黄褐色	にぶい黄褐色		
第66025	37住	弥生	直	-	-	-	(5.0)	ハケ	ハケ・ナダ?	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第66026	38住	17	土師	直	(8.0)	(20.0)	-	(15.3)	ナダ・ハケ 指オサエ	ナダ・ナズリ 指オサエ	○	○	○	○	良	褐色	褐色	
第66027	38住	17	土師	直	(13.8)	(20.2)	-	(13.7)	ハケ・ナダ	ハケ・ナダ・タタキ	○	○	○	○	良	褐色	褐色	
第66029	38住	17	土師	直	-	-	(8.5)	ナダ?	ナダ?	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	外面黒色有り	
第66029	38住	17	土師	直?	-	-	(6.4)	ナダ・飯状直	ハケ	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内外面黒色有り	
第66029	38住	17	土師	直	-	-	(17.4)	(10.7)	ミガキ・ハケ 飯状工具での調理 丁寧なナダ	○	○	○	○	良	にぶい褐色	にぶい褐色		
第66021	38住	土師	小型直	(10.0)	(10.2)	-	(8.0)	ナダ・ハケ 指オサエ	ナダ?・指オサエ	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色		
第66021	38住	土師	高坪	-	-	-	(4.2)	指オサエ・ナダ	不明	○	○	○	○	良	褐色	褐色		
第66021	38住	土師	高坪	(20.7)	-	-	(6.0)	ナダ・ハケ	ナダ・ハケ	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
第66021	38住	17	土師	高坪	16.8	-	-	(6.0)	ナダ	ナダ?	○	○	○	○	良	褐色	褐色	
第68021	1号	土師	直	(6.2)	(7.0)	-	6.5	ナダ・指オサエ	指オサエ・ナダ	○	○	○	○	良	にぶい褐色	にぶい褐色		
第68022	1号	土師	直	-	-	-	(4.0)	ハケ・ナダ	ハケ・ミガキ・ナダ	○	○	○	○	良	にぶい褐色	にぶい褐色		
第69023	2号	弥生	直	-	-	-	(6.4)	(6.0)	ハケ・ナダ	ナダ	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第70021	2號	埴輪	碗	(11.0)	-	4.5	7.1	-	-	-	-	-	-	一	灰緑色	灰緑色		
第70022	2號	埴輪	碗	(9.8)	-	(4.3)	-	-	-	-	-	-	-	一	白色	白色		
第70023	2號	埴輪	碗	-	-	(5.2)	(2.0)	ナダ	ナダ	○	○	○	○	良	暗茶色	暗茶色	みこみに気泡あり	
第70024	1號	埴輪	小皿	-	(6.2)	(5.0)	(5.3)	-	-	-	-	-	-	一	-	-	内面一部磨削	
第73021	1號	18	弥生	盤形	26.2	23.5	7.7	26.8	ナダ・ハケ	指オサエ・ナダ	○	○	○	○	良	灰黄色	黄灰色	外面スス付着
第73022	1號	18	弥生	盤形	27.6	26.6	6.4	33.5	ナダ・ハケ	ナダ・指オサエ	○	○	○	○	良	灰黄色	暗灰色	外面スス付着
第75021	1土	陶器	碗	-	-	3.6	(1.9)	ケズリ	ナダ	○	○	○	○	良	灰白・黄褐色	灰白色	外面一部磨削	
第75022	3土	陶器	鉢	-	-	-	(7.0)	ナダ	ナダ	○	○	○	○	良	灰茶褐色	灰茶褐色		
第75023	4土	陶器	鉢	48.4	-	-	(20.0)	?	ナダ	○	○	○	○	良	灰黄色	灰黄色	外面スス付着	
第75024	5土	陶器	碗	-	-	(4.0)	(4.0)	ケズリ	ナダ	○	○	○	○	良	灰白色	灰白色	高古直流 内面一部磨削	
第77021	8土	17	弥生	直	(15.0)	-	(6.7)	ナダ	ナダ	○	○	○	○	良	灰黄褐色	灰黄褐色		
第77022	8土	17	弥生	直	-	-	(6.7)	ナダ	ナダ	○	○	○	○	良	灰黄褐色	灰黄褐色		
第77023	8土	18	弥生	直	-	(35.2)	(28.3)	ハケ・タタキ?	ナダ・ハケ 指オサエ	○	○	○	○	良	灰黄褐色	灰黄褐色		
第77024	8土	弥生	直	-	-	-	(9.0)	ナダ	ナダ・指オサエ	○	○	○	○	良	灰褐色	灰褐色		
第77025	8土	弥生	直	-	-	6.2	(2.6)	ナダ	-	○	○	○	○	良	一	一	褐色	
第79021	11土	弥生	直	(11.0)	(28.3)	-	(17.0)	ナダ・ハケ	ナダ	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
第79022	11土	18	弥生	直	(29.0)	(28.0)	-	(18.0)	ナダ・ハケ	ナダ・工具直	○	○	○	○	良	黄褐色	黄褐色	
第79023	11土	弥生	直	(26.4)	(23.5)	-	(16.0)	ナダ・ハケ	ナダ	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
第79021	11土	弥生	直	-	-	(7.5)	(19.2)	ハケ・ナダ	ナダ・指オサエ	○	○	○	○	良	褐色	褐色	外面スス付着	
第79022	11土	弥生	直	-	-	7.0	(5.9)	ハケ・ナダ	工具ナダ・ナダ	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	黄褐色		
第79023	11土	弥生	直	-	-	7.6	(11.0)	ハケ・ナダ	ナダ	○	○	○	○	良	灰褐色	褐色		
第79024	11土	弥生	直	-	-	(8.2)	(5.0)	ハケ・ナダ	ナダ	○	○	○	○	良	にぶい褐色	にぶい褐色		
第79025	11土	18	弥生	直	-	-	(7.0)	(9.7)	ハケ・ナダ	ナダ	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第79026	11土	弥生	直	-	-	7.8	(8.2)	ハケ・ナダ	ナダ	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	褐色		
第79027	11土	18	弥生	直	-	6.6	(6.7)	ハケ・ナダ	ナダ	○	○	○	○	良	にぶい黄褐色	褐色		
第79028	11土	弥生	直	-	-	6.6	(6.0)	ハケ・ナダ	ナダ	○	○	○	○	良	灰黄色	灰黄色		

第8表 出土石器観察表(1)

標記番号	写真図版	出土位置等	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	備考
第86図1	18	19住	打製石鏃	安山岩	2.50	1.70	0.30	0.90	
第86図2		23住	削片鏃	黒曜石	2.15	2.55	0.30	1.00	
第86図3	18	12~14住	打製石鏃	安山岩	2.60	1.50	0.30	1.00	
第86図4		33住	打製石鏃	黒曜石	(2.50)	(1.75)	0.50	1.60	
第86図5	18	8住	打製石鏃	黒曜石	(2.30)	(1.95)	0.30	0.90	
第86図6	19	26住	磨製石鏃	結晶片岩	(1.80)	(1.60)	0.15	0.80	
第86図7		16住	石筴丁	輝緑凝灰岩	(2.30)	(5.05)	(0.65)	8.60	未成品、穿孔途中
第86図8		12~14住	石筴丁	輝緑凝灰岩	(3.40)	(5.70)	0.60	14.10	
第86図9	19	12~14住	石筴丁	輝緑凝灰岩	3.50	(7.40)	0.65	26.10	
第86図10		21住	石筴丁	粘板岩	(4.25)	(4.00)	0.60	17.50	P1出土
第86図11	19	31住	石筴丁	粘板岩	3.60	(7.10)	0.70	29.80	
第86図12		11住	石筴丁	粘板岩	(5.00)	(6.45)	0.65	23.30	
第86図13		10住	箇石	閃緑岩	13.55	14.10	7.30	2300.0	
第86図14		11住	磨石	輝石安山岩	9.60	8.30	4.40	556.0	
第87図1		F7	打製石斧	粘板岩	12.85	5.30	1.05	66.2	
第87図2		10住	打製石斧	粘板岩	(7.90)	(6.60)	1.70	83.10	
第87図3		31住	打製石斧	粘板岩	(8.25)	(10.25)	1.20	130.00	
第87図4		11土	磨製石斧	砂岩	(3.80)	3.90	0.70	26.80	扁平片刀か?
第87図5	19	19住	打製石斧	砂岩	(9.00)	(4.15)	2.35	111.10	
第87図6		12~14住	打製石斧	角閃片岩	(11.30)	(5.85)	2.00	242.20	中央土坑出土
第87図7	19	10住	磨製石斧	蛇紋岩	14.15	5.75	2.55	359.50	
第87図8		32住	柱状片刀石斧?	輝石安山岩	(12.80)	5.10	3.40	383.50	
第88図1	19	11住	石剣	粘板岩	15.80	3.10	0.55	43.50	
第88図2		4住	砥石	粘板岩	(15.10)	4.70	2.10	234.90	
第88図3		10住	砥石	珩岩	(5.00)	4.95	2.00	72.80	
第88図4		10住	砥石	珩岩	(7.55)	4.00	2.00	61.20	
第88図5		F6	砥石	珩岩	(7.20)	6.80	4.60	233.90	
第88図6	19	32住	砥石	珩岩	9.80	2.80	1.90	104.90	
第88図7	19	9住	砥石	珩岩	(7.10)	3.60	3.10	76.70	
第88図8		10~17住	砥石	珩岩	(4.80)	2.10	2.00	25.20	
第88図9		27住	砥石	珩岩	(4.90)	(4.25)	0.90	18.80	P1出土
第88図10		15住	スクレイパー	腰岳系黒曜石	1.60	2.50	1.25	4.6	
第89図1	20	26住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	1.80	1.60	0.40	0.8	
第89図2	20	10住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.15	1.70	0.65	1.4	
第89図3	20	9住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	1.90	1.70	0.50	1.2	
第89図4	20	31住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.40	1.40	0.40	1.0	
第89図5	20	24住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.90	1.80	0.40	2.4	
第89図6	20	5-6住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	1.70	1.90	0.75	1.6	
第89図7	20	26住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.60	1.85	0.50	1.6	
第89図8	20	38住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.10	2.10	0.50	1.2	

第9表 出土石器観察表(2)

押洞番号	写真図版	出土位置等	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	備考
第89図9	20	32住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	1.80	2.25	0.70	2.2	
第89図10	20	10住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.70	2.30	0.40	1.8	
第89図11	20	10住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	1.95	2.65	0.70	2.4	
第89図12	20	10住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	1.50	2.00	0.40	0.6	
第89図13	20	31住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.20	1.60	0.50	1.8	
第89図14	20	一括	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	1.60	2.00	0.70	1.4	
第89図15	20	22住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.40	1.50	0.60	1.4	
第89図16	20	22土	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.60	2.40	0.75	3.0	
第89図17	20	1壺	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.90	2.55	0.75	3.4	
第89図18	20	23住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.80	1.60	0.60	2.0	
第89図19	20	1壺	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.40	1.10	0.40	0.9	
第89図20	20	9住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.45	2.20	0.55	2.2	
第89図21	20	10住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.00	1.75	0.65	1.4	
第89図22	20	25住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.60	1.50	0.35	1.8	
第89図23	20	32住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.60	1.85	0.50	2.2	
第89図24	20	1住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	1.90	2.50	0.60	3.0	
第89図25	20	18住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.30	2.85	0.65	3.4	
第89図26	20	8住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	1.80	2.40	0.70	2.2	
第89図27	20	11土	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	3.40	2.40	0.55	2.4	
第89図28	20	9住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	3.40	3.00	0.65	4.4	
第89図29	20	32住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	3.45	3.10	1.20	10.2	
第90図1	20	32住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.30	3.70	0.90	7.0	
第90図2	20	11住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.40	2.00	0.75	3.4	
第90図3	20	26住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.65	2.50	0.60	2.0	
第90図4	20	9住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.25	1.90	0.95	3.8	
第90図5	20	10住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.95	3.60	1.15	12.2	
第90図6	20	32住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.95	2.25	0.70	4.2	
第90図7	20	25住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	4.40	2.30	1.20	6.8	
第90図8	20	9住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	3.10	2.75	0.95	5.2	
第90図9	20	1壺	二次加工剥片	珉質岩	2.35	2.70	0.95	5.8	
第90図10	20	10住	二次加工剥片	玉髓?石英?	2.60	4.95	2.20	27.0	
第90図11	20	32住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	3.45	1.80	0.60	3.2	
第90図12	20	33住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	4.20	2.35	0.80	7.0	
第90図13	20	1壺	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	6.00	2.40	0.75	8.2	
第90図14	20	33住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	3.00	1.65	0.45	1.6	
第90図15	20	16-17住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	4.00	1.70	0.70	2.6	
第90図16	20	18住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.05	1.25	0.40	2.2	
第90図17	20	38住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.80	2.90	0.90	4.6	
第90図18	19	一括	石核	姫島産黒曜石	4.80	4.80	4.15	81.6	

第 10 表 出土土製品観察表

標記番号	写真図版	遺構	器種	径 (cm)	孔径 (cm)	厚 (cm)	重さ (g)	色 調	備 考 (胎土等)
第91図1	19	8住	紡錘車	3.5	1.0	2.0	26.9	暗褐色、褐色	角閃石・斜長石・赤色粒
第91図2		一括	紡錘車	4.1	0.9	1.4	22.2	暗黄褐色	角閃石・斜長石・石英赤色粒・白色粒
第91図3	19	27住	紡錘車	4.0	0.8	2.3	30.4	赤褐色	角閃石・斜長石・石英赤色粒・白色粒
第91図4		10住	紡錘車	—	—	2.1	17.1	淡茶褐色	角閃石・斜長石・石英赤色粒
第91図5		10住	紡錘車	—	—	2.1	9.8	暗赤褐色	角閃石・斜長石・石英白色粒

標記番号	写真図版	遺構	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	色 調	備 考 (胎土等)
第91図6		27住	不明土製品	(6.0)	4.9	3.5	39.9	赤褐色	一部片断あり 斜長石・角閃石・白色粒
第91図7	19	12~14住	投擲	4.6	2.8	2.7	28.2	にぶい褐色	×ス付着
第91図8	19	23住	土匙	—	—	—	172.0	褐色	底部口径:7.0cm、高:7.9cm 斜長石・角閃石

標記番号	写真図版	遺構	器種	長さ・径 (cm)	厚さ・幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	色 調	備 考
第91図9		10住下層	土玉(丸玉)	2.3	2.2	0.4	11.7		
第91図10		近世埋乱	土罐	4.0	1.5	0.6	7.9		

標記番号	写真図版	遺構	器種	最大長さ (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	穿孔径 (cm)	重さ (g)	色 調	備 考
第91図13	19	B2-P1	土鈴	3.3	2.8	2.4	0.6	10.6	淡黄褐色	
第91図14	19	B2-P1	土鈴	4.4	2.6	2.1	0.6	10.4	黄褐色	
第91図15		1庫	土鈴	3.2	2.6	2.2	0.4~0.6	8.5	褐色	
第91図16		一括	土鈴	3.2	2.3	1.5	0.5~0.6	3.9	淡黄褐色	
第91図17		B2-P1	土鈴	3.7	2.6	2.2	0.6~0.7	10.6	淡黄褐色	
第91図18		一括	土鈴	2.7	2.5	2.5	(0.5)	9.8	にぶい黄褐色	

第 11 表 出土玉類観察表

標記番号	写真図版	遺構	器種	長さ (cm)	幅・径 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	石材	色調	備 考
第91図11	19	9住	勾玉再加工品	1.6	1.3	0.2	2.1	硬玉	淡緑色	
第91図12	19	8住	白玉	—	0.2	0.15	0.127	滑石	濃緑色	厚さ0.15cm

第 12 表 出土鉄器観察表

標記番号	図版番号	遺構名	器種	全長 (cm)	刃部長さ (cm)	刃部幅 (cm)	頸部幅 (cm)	刃部厚 (cm)	頸部厚 (cm)	重さ (g)	備 考
第91図19	—	4住	鉄鎌	—	(5.4)	(2.9)	—	0.4	—	18.0	
第91図20	—	18住	鉄鎌	—	(5.5)	(2.5)	—	0.2	—	14.2	
第91図21	—	10住	鑄羽口	(3.6)	—	—	—	—	—	27.9	復元羽口径1.9cm、幅4.6cm



調査区透景（東から）



調査区空中写真（真上から）

写真図版2



1号竪穴住居発掘状況（南東から）



1号竪穴住居Aカマド発掘状況（南東から）



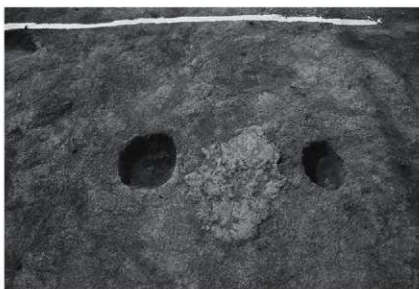
1号竪穴住居Bカマド発掘状況（南東から）



2号竪穴住居発掘状況（南東から）



3号竪穴住居発掘状況（南東から）



3号竪穴住居カマド発掘状況（南東から）

写真図版4



5・6号竪穴住居発掘状況（北西から）



5・6号竪穴住居遺物出土状況



8号竪穴住居発掘状況（南東から）



8号竪穴住居カマド発掘状況 (南東から)



9号竪穴住居カマド遺物出土状況



9号竪穴住居カマド発掘状況 (南東から)

写真図版6



9号竪穴住居遺物出土状況



9号竪穴住居遺物出土状況



10号竪穴住居発掘状況（南西から）



10号竪穴住居遺物出土状況



10号竪穴住居遺物出土状況



10号竪穴住居遺物出土状況

写真図版8



11号竪穴住居発掘状況（北から）

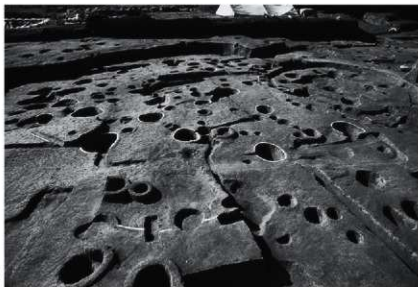


11号竪穴住居遺物出土状況



11号竪穴住居遺物出土状況

12～14号竪穴住居発掘状況（北東から）



15号竪穴住居発掘状況（南から）



16・17号竪穴住居発掘状況（北西から）



写真図版 10



16・17号竪穴住居遺物出土状況



16・17号竪穴住居遺物出土状況



18号竪穴住居発掘状況（北東から）

18号竪穴住居遺物出土状況



19号竪穴住居発掘状況（南西から）



20号竪穴住居発掘状況（北東から）



写真図版 12



20号竪穴住居カマド発掘状況（北東から）



20号竪穴住居カマド発掘状況（北東から）



23号竪穴住居発掘状況（北西から）



24号竪穴住居発掘状況（南東から）



24号竪穴住居焼土・炭化物検出状況



25号竪穴住居発掘状況（南東から）

写真図版 14



25号竪穴住居カマド遺物出土状況



25号竪穴住居カマド発掘状況（南東から）



26号竪穴住居発掘状況（北西から）



27号竪穴住居発掘状況（北西から）



28号竪穴住居発掘状況（北西から）



28号竪穴住居屋内土坑遺物出土状況



29号竪穴住居発掘状況（北東から）



30号竪穴住居発掘状況（南西から）



30号竪穴住居遺物出土状況

31号竪穴住居発掘状況（北から）



31号竪穴住居遺物出土状況



32号竪穴住居発掘状況（東から）





33号竪穴住居発掘状況（北西から）



33号竪穴住居遺物出土状況



34号竪穴住居発掘状況（北東から）

34号竪穴住居カマド発掘状況（北東から）



35号竪穴住居発掘状況（北東から）



37号竪穴住居発掘状況（北東から）





38号竪穴住居発掘状況（北から）



1号竪穴遺構発掘状況（北東から）



2号竪穴遺構発掘状況（南東から）

3号堅穴遺構発掘状況（北東から）



2号溝状遺構発掘状況（南東から）

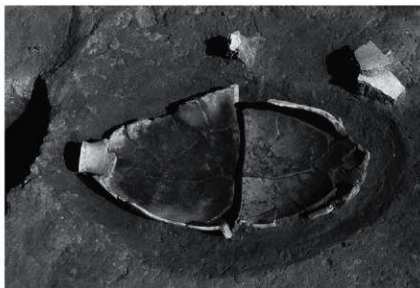


4号溝状遺構発掘状況（南東から）





1号甕棺発掘状況（南西から）



1号甕棺発掘状況（南西から）



1号石棺基壇出土状況（南東から）



1号石棺墓発掘状況（南東から）



1号土坑発掘状況（北東から）



2号土坑発掘状況（北西から）

写真図版 24



3号土坑発掘状況（北西から）



4号土坑発掘状況（南東から）



5号土坑発掘状況（南西から）

8号土坑遺物出土状況



8号土坑遺物出土状況



9号土坑発掘状況 (北から)





10号土坑発掘状況（北西から）



11号土坑発掘状況（東から）



11号土坑遺物出土状況

11号土坑遺物出土状況



12号土坑発掘状況（東から）



20号土坑発掘状況（北東から）



写真図版 28



22号土坑発掘状況（南西から）



発掘作業に従事したみなさん



6-1



6-3



6-5



6-7



6-9



6-11



8-4



13-1



13-2



13-4



13-5



13-7



13-8



15-4



15-5



15-6



15-8



15-9



15-10



15-11



16-1



16-2



16-3



16-5



16-6



16-7



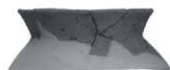
16-8



18-5



18-6



18-8



18-10



18-11



18-13



19-1



19-4



19-6



19-8



19-10



19-11



20-1



20-2



20-3



20-14



20-15



20-16



20-17



21-1 (側面)



21-2 (側面)



21-3



21-1 (底面)



21-2 (底面)



21-4



22-1



22-2



24-4



26-1



26-4



26-6



26-8



26-9



28-4



28-5



30-1



30-4



31-1



31-2



31-3



31-4



31-5



31-9



31-11



32-1



32-2



34-1



34-2



34-3



35-3



35-4



35-5



35-6



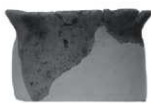
37-4



37-6



37-7



39-1



42-4



42-11



44-3



46-1



46-6



46-9



46-10 (侧面)



46-10 (底面)



50-1



52-1



55-1



57-1



57-2



59-3



59-4



61-1



63-2



63-4



66-6



66-7



66-9



66-10



66-14



77-1



73-1 (上壁)



77-3



78-2



73-2 (下壁)



79-5



79-7



79-10



79-16



82-1



83-4



83-7



83-12



84-3



84-4



84-5



86-1



86-3



86-5



86-6



86-9



86-11



87-5



87-7



88-1



88-6



88-7



90-18



90-1



90-3



90-7



90-8



90-9



90-11



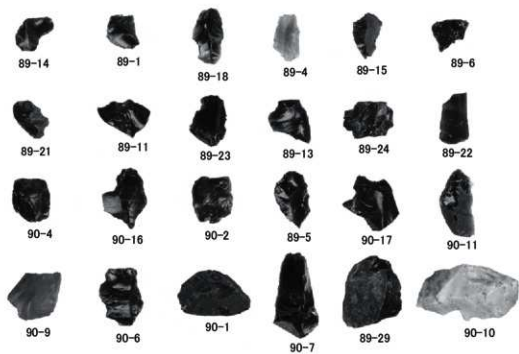
90-12



90-13



90-14



報 告 書 抄 録

ふりがな	くくりのいせきに
書名	求来里の遺跡Ⅱ
副書名	県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
巻次	(2)
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	89
編著者名	若杉竜太
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市市島2-6-1
発行年月日	2009年3月19日

所収遺跡名	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	通称番号					
金田遺跡	大分県日田市 大字求来里 字金田1060ほか	44204-6	204239	33° 18' 57"	130° 57' 52"	20040423 ↓ 20041126	1,850㎡ (3次調査 区との重 複60㎡)	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金田遺跡	集落 墓地	弥生 古墳 近世	竪穴住居 竪穴墓 石棺墓 土坑 溝状遺構	弥生土器・石器 土師器・須恵器・鉄器 陶磁器	カマド導入期の集落 朝鮮半島系土器・初 期須恵器が出土

求来里の遺跡 Ⅱ

— 県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (2) —

金田遺跡の調査

2009年3月19日

編 集	日田市教育庁文化財保護課 〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1
発 行	日田市教育委員会 〒877-8601 大分県日田市田島2-6-1
印 刷	㈲中央印刷 〒877-0012 大分県日田市淡窓2-3-1

